福　岡　市

有田・小田部

ARI TA KO TA BE

第21集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第426集

1995

福岡市教育委員会

No.28018

有田・小田部第２１集正誤表

頁	行	誤	正
5	4	原西中学校	原北小学校
２０	1	３０は高坏１／３で	３２は高坏１／３で
２０	2	３１は小片で	３０は小片で
２０	4	３２は天井で	３１は天井部で
２７	Fig. 19	１１０	１０９
５３	7	２７１は高坏脚部	２６５は高坏脚部
５３	9	２７６は壺か	２６６は壺か
６０	6	ＳＢ０３である。	ＳＤ０３である。
６０	8	ＳＢ０３はその下で	ＳＤ０３はその下で
PL. 14		１１０	１０９

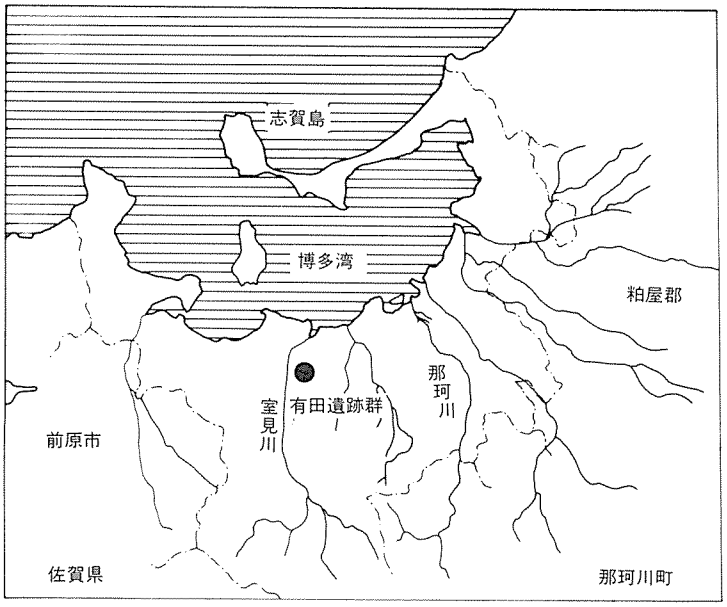
福　岡　市

ARI TA KO TA BE

有田・小田部

第21集

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第426集



調査番号　8854・8960
遺跡略号　ART-147・153

8861

1995

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸との門戸として繁栄しており、特に本市の西南部に位置する早良平野は文化財が数多く包蔵されている地域として知られています。この平野の北部、室見川の右岸に位置する有田・小田部地区にある有田遺跡群は、旧石器時代から近世にかけての重要な遺跡です。

本市では昭和50年度から開発行為に先行して発掘調査を実施し、今年度まで177ヵ所を数えています。長年の調査の成果から当遺跡群は弥生時代の集落のほか、台地全面に古墳時代の集落や、律令時代の官衙規模の大型建物群、中世戦国時代の小田部城に関連する濠跡などの重要な遺構が発見され、学界の注目を集めています。

今回の報告は昭和63年度と平成元年度に実施した有田地区1ヵ所、小田部地区1ヵ所の調査に関するものです。有田地区の第147次調査区では谷部の包含層から弥生時代中期から後期にかけての土器が多量に出土しました。また包含層上層から有田遺跡では初めて鳥形土製品が出土しました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究においても活用していただければ幸いです。

調査に際しましては、地権者の皆様を始め、関係各位に多大なご協力を頂きました。心から感謝の意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　　言

(1)　本書は、福岡市早良区有田・小田部・南庄地区における開発に伴い、福岡市教育委員会が、平成6年度の国庫補助を得て実施した、緊急発掘調査の報告書である。

(2)　本書には昭和63年度の第147次調査、平成元年度の第153次調査を収録する。

(3)　本書では、有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見なし、広義の有田遺跡群とする。

(4)　本書に収録した調査は、第147次・153次調査いずれも山崎龍雄が担当した。

(5)　本書に掲載した遺構の実測は、担当者の他、清原ユリ子、金子由利子、宮原邦江、吉岡田鶴子が行い、写真は担当者が行った。

　遺物の実測とトレース、遺構のトレースについては、山崎の他、井上加代子が行い、遺物の写真については山崎と平川啓治が行った。

(6)　遺構番号については、ピット以外の遺構については連番とし、頭に遺構の性格を示す記号を付し、ピットについては独自に番号を付した。

(7)　遺構記号は、福岡市の遺構基準によっている。

　SA…柵、SB…掘立柱建物、SC…竪穴住居跡、SD…溝状遺構、SE…井戸、SK…土坑

　SR…土壙墓・木棺墓、ST…甕棺墓、SP…ピット、SX…その他

(8)　本書に使用した方位は磁北であり、その他については図中に記した。

(9)　本書報告の遺物・図面・写真類は、すべて本市の埋蔵文化財センターに収蔵保管する予定である。

(10)　本書の執筆は以下のとおりである。

　第1章　はじめに　　……山崎

　第2章　遺跡の立地と歴史的環境……山崎

　第3章　調査の記録　　……山崎、加藤良彦（第148次調査遺物補遺）

(11)　本書の編集は山崎が行った。

本　文　目　次

本文頁

第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．発掘調査の組織……2

第２章　遺跡の立地と歴史的環境……3
　１．遺跡の立地と歴史的環境……3
　２．有田遺跡群関係文献一覧……5

第３章　調査の記録……7
〔有田地区の調査〕
　１．第147次調査 ……9
　　１）調査区の立地と調査の概要……9
　　２）遺構と遺物……9
　　①　掘立柱建物……9
　　②　土坑……14
　　③　溝……17
　　④　包含層・谷部の調査……18
　　⑤　ピット・遺構面・その他の遺物……46
　　３）小結……53

〔小田部地区の調査〕
　２．第153次調査 ……55
　　１）調査区の立地と調査の概要……55
　　２）遺構と遺物……55
　　①　竪穴住居跡……55
　　②　溝……57
　　③　ピット・その他の遺物……58
　　３）小結……58

　３．第148次調査遺物補遺 ……61

図 版 目 次

PL. 1　有田遺跡群周辺航空写真（1961年撮影）
PL. 2　有田遺跡群周辺航空写真（1972年撮影）
PL. 3　(1)　第147次調査区東側全景（西から）　(2)　同東側全景（西から）
PL. 4　(1)　調査区東側谷部建物検出状況（西から）(2)　調査区西側全景（北から）
PL. 5　(1)　調査区全景谷部完掘後（西から）　(2)　同（北から）
PL. 6　(1)　SB01（西から）(2)　SB02（東から）
PL. 7　(1)　SB03（西から）(2)　SD01・02（南から）
PL. 8　(1)　SD16（西から）(2)　SK03（南から）(3)　SK04（西から）
(4)　SK05（南から）
PL. 9　(1)　SP66（南から）(2)　包含層上層住居址床面？（西から）
PL. 10　(1)　包含層上層遺物出土状況　(2)　同出土状況　(3)　包含層下層遺物出土状況（西から）
(4)　同出土状況（北から）
PL. 11　(1)　土器群A群検出状況（東から）　(2)　同B群検出状況（東から）　(3)　北東隅遺物検出状況（東から）　(4)　谷部東壁際遺物出土状況（西から）　(5)　同北壁土層（南から）
(6)　同東壁遺物堆積状況（西から）
PL. 12　掘立柱建物・土坑・ピット・土器群上面出土遺物
PL. 13　包含層出土遺物
PL. 14　包含層・土器群A群出土遺物1
PL. 15　土器群A群出土遺物2
PL. 16　土器群B群出土遺物
PL. 17　土器群C群・D群出土遺物と包含層出土石器・土製品
PL. 18　(1)　第153次調査区全景（東から）　(2)　同全景（北から）
PL. 19　(1)　SC02（南から）　(2)　SC02遺物出土状況（北から）
PL. 20　(1)　SD03北壁土層（南から）　(2)　SC02・SD03・ピット出土遺物

目　　次

頁

Fig. 1　有田遺跡群と周辺遺跡（1/25,000）……4
Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点（1/5,000）……折込み
Fig. 3　有田・小田部台地の旧地形図（1/5,000）……折込み
Fig. 4　調査区位置図（1/4,000）……7
Fig. 5　調査区第1面遺構配置図（1/120）……10
Fig. 6　第2面・3面遺構配置図（1/80）……11
Fig. 7　SB01・02（1/60）……13
Fig. 8　SB03（1/60）……14
Fig. 9　土坑・SP66（1/30・1/10）……15
Fig. 10　掘立柱建物・土坑出土遺物（1/3・1/4・2/3）……16
Fig. 11　溝出土遺物（1/3）……18
Fig. 12　包含層土層図（1/60）……19
Fig. 13　包含層出土遺物1（1/3・1/4）……21
Fig. 14　包含層出土遺物2（1/4）……22
Fig. 15　包含層出土遺物3（1/4）……23
Fig. 16　包含層出土遺物4（1/4）……24
Fig. 17　包含層出土遺物5（1/4）……25
Fig. 18　包含層出土遺物6（1/4）……26
Fig. 19　包含層出土遺物7（1/4）……27
Fig. 20　土器群出土状況図（1/40）……30
Fig. 21　土器群上面出土遺物1（1/3・1/4）……31
Fig. 22　土器群上面出土遺物2（1/4）……33
Fig. 23　土器群A群出土遺物1（1/4）……34
Fig. 24　土器群A群出土遺物2（1/4・1/6）……35
Fig. 25　土器群A群出土遺物3（1/4）……36
Fig. 26　土器群A群出土遺物4（1/4）……37
Fig. 27　土器群A群出土遺物5（1/4）……38
Fig. 28　土器群A群出土遺物6（1/4）……39
Fig. 29　土器群B群出土遺物1（1/4）……42
Fig. 30　土器群B群出土遺物2（1/4）……43
Fig. 31　土器群B群出土遺物3（1/4）……45
Fig. 32　土器群B群出土遺物4（1/4）……46
Fig. 33　土器群C群出土遺物1（1/4・1/6）……47
Fig. 34　土器群C群出土遺物2（1/4）……48
Fig. 35　土器群D群出土遺物（1/4）……49

Fig. 36　包含層出土土製品・石器（1/2・1/3）……50
Fig. 37　ピット出土遺物１（1/3・1/4）……51
Fig. 38　ピット出土遺物２（1/3・1/4）……52
Fig. 39　第153次調査遺構配置図（1/100）……56
Fig. 40　第153次・142・143次遺構配置図（1/200）……折込み
Fig. 41　SC02（1/60）……57
Fig. 42　SC02出土遺物（1/3）……58
Fig. 43　調査区北壁・東壁土層（1/60）……59
Fig. 44　SC02及びその他の出土遺物（1/3・1/4）……60
Fig. 45　第148次調査遺構全体図（1/400）……61
Fig. 46　第148次調査出土遺物（1/1・1/2・1/3）……62

表目次

Tab. 1　第21集報告調査地区一覧表……1

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

福岡市西郊、室見川右岸に位置する有田・小田部の台地上には、有田・小田部・南庄の３カ所の集落が存在している。昭和40年代初めの区画整理とその後の国道202号今宿バイパスや地下鉄１号線の開通は、当地区一帯の都市化を著しく促進し、農地は減少し、都市近郊の住宅地として変貌している。有田遺跡群の発掘調査は、昭和41年の九州大学による有田地区の区画整理に伴う調査以降、昭和50年度から、市内の重要遺跡として、国庫補助事業として出発した。昭和52年度からは1000m²以下の個人専用住宅などの小規模開発についても対応を行っている。

昭和60年度迄の開発傾向は、都心に近い手頃な住宅地として、個人専用住宅の建設が多かったが、その後の平成２年頃にかけては、史上空前のバブル景気や、地価高騰の影響を受けて、民間資本によって、202号線バイパスの北側地区を中心に、店舗・高層の共同住宅・分譲住宅等の開発が増加していた。その後、現在に至る迄はバブル景気後の不況で、民間による開発が鎮静化し、また事前審査の方法が変わったことから、調査件数は減少している。現在迄の調査件数は177件を数えるが、この中には学校建設・下水道建設・市営住宅の立替えなどの公共事業も含まれている。

本書では、昭和63年度から平成元年度にかけて調査を行った有田地区の第147次調査、有田地区の第153次調査の成果を報告する。各調査の要項は下表のとおりである。

Tab. 1　第21集報告調査地区一覧表

調査次第	調査番号	地区名	調　査　地　番	申請面積 (m²)	調査面積 (m²)	申　請　者	調　査　期　間	事前審査番号
第147次	8854	K	早良区有田２丁目７－７	739、60	228	高田潔	1989年１月24日～３月31日	63—2—51
第153次	8960	E	早良区小田部５丁目70・71	330	263	中央信託銀行	1989年11月15日～11月30日	1—2—21

２．発掘調査の組織

昭和63年度～平成６年度の調査組織

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　昭和63～平成２年度　埋蔵文化財課長　柳田純孝
平成３～６年度　埋蔵文化財課長　折尾学

事務担当　昭和63年度　埋蔵文化財課第２係長　飛高憲雄　（庶務）　同第１係　岸田隆
平成元年～２年度　埋蔵文化財課第２係長　柳沢一男　（庶務）　同第１係　阿部徹、中山昭則
平成３～４年度　埋蔵文化財課第２係長　塩屋勝利　（庶務）　同第１係　中山昭則
平成５～６年度　埋蔵文化財課第２係長　山崎純男　（庶務）　同第１係　中山昭則、内野保基

発掘担当　昭和63～平成元年度　埋蔵文化財課第２係　山崎龍雄、小林義彦（福岡市埋蔵文化財センター）、加藤良彦

調査・整理補助　昭和63～平成６年度　平川敬治（九州大学）、梶村嘉長、溝口武司、黒田和生、英豪之、井上加代子

なお、発掘調査・資料整理にあたっては、申請者及び施工業者の皆様をはじめ、地元の方々の理解、協力を得た。特に地元の寺田勝行氏には、事務所用地を心よくお貸しいただいた。また調査にあたっては、調査指導の諸先生及び、埋蔵文化財課の試掘担当の諸氏には、多大な助言と協力を受けた。記して謝意を表したい。

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

１．遺跡の立地と歴史的環境

有田遺跡群は、福岡市の西南部に位置する早良平野の中央やや北側に所在する。この早良平野は中央を南北に貫流する室見川によって形成された沖積平野で、西側は長垂丘陵、南側は背振山塊、東側は油山によって限定され、その形は北に開く扇形をなす。この有田遺跡群は室見川下流部の右岸にある最大標高15m前後を測る洪積世の独立中位段丘上に立地する。台地の西側は室見川、東側は金屑川によって浸食され、北から幾筋もの浅い谷が入り込み、北側に八つ手状に開く複雑な形態を示す。この台地は南北約1.7km、東西約0.8km、面積約70万m²の広がりを持ち、遺跡はこの台地上のほぼ全域に分布している。遺跡は旧石器時代から近世迄の各時代の遺構が複合しており、それらを総称して有田遺跡群としている。

有田遺跡群の所在する有田・小田部地区は、古代では早良６郷の一つ、田部郷にあたり、明治22年の町村制実施によって原村の一部として組み込まれ、昭和４年の原村と福岡市の合併によって福岡市に編入された。昭和40年代初めの区画整理以前は、『小田部大根』の産地としての近郊農村地帯であったが、国道202号線バイパスや地下鉄の開通以降は、都心に近い手頃な住宅地として急激に開発が進んできている。

当遺跡の調査の歴史は昭和42年の区画整理に伴う調査を九州大学が行い、弥生時代前期初頭の環濠の一部や貯蔵穴、古墳時代前期の焼失家屋などを発見し、遺跡のその重要性が確認された。しかし、当遺跡周辺は既に市街化が進行している地域であったため、史跡指定するということが難しく、個人専用住宅建設に伴う開発まで調査を実施し、記録することとなった。現在177次を数える調査の成果は著しく、台地上における各時代の遺跡の分布状況が把握出来つつある。最も古い時期の旧石器時代、遺物は台地上で十数ケ所で確認されているが、大半が他時代遺構からの出土で、包含層や遺構を確認したのは、第３次調査区しかない。早良平野では同時代の遺跡は他に吉武遺跡群がある。

縄文時代については、中期から後期の貯蔵穴が台地西側の第５次･115次調査区を中心に検出されており、貯蔵穴群は馬蹄形状に巡ることが確認されている。縄文時代晩期末の突帯文期には台地の南西側周辺の有田七田前遺跡で多量の夜臼式土器とともに大陸系の石器などが出土しており、既に初期稲作農耕文化が有田遺跡にも伝播しており、福岡地区では博多区の板付遺跡、那珂遺跡と並んで最も古い稲作農耕遺跡のひとつと見なされている。

弥生時代になると前期初頭のＶ字濠が、第２次調査を始めとして、第45次・54次・77次・95次・133次調査区で確認されている。それらの地点のものをつなぎあわせると、有田地区台地の高所部を楕円形状に巡る環濠となり、その規模は長径300m、短径200mを測る。また、その出入口の陸橋部は第133次調査区南側の下水道調査区で確認されている。前期後半代には環濠は数カ所掘開された可能性がある。中期になると環濠は巡らされなくなり、また集落も台地の各尾根上に分散している状況が認められ、それぞれの集落に伴う甕棺墓群が各尾根毎に確認されている。青銅利器は台地南端の西福岡高校敷地内の甕棺墓から出土し、また北側小田部地区からも青銅利器の出土の記録がある。そして有田地区の第３次･81次･108次調査区では青銅利器の鋳型片が出土しており、当遺跡群でも青銅器の生産が行われていたことがわかる。これらのことから有田遺跡群は吉武遺跡群、野方遺跡などとともに、早良

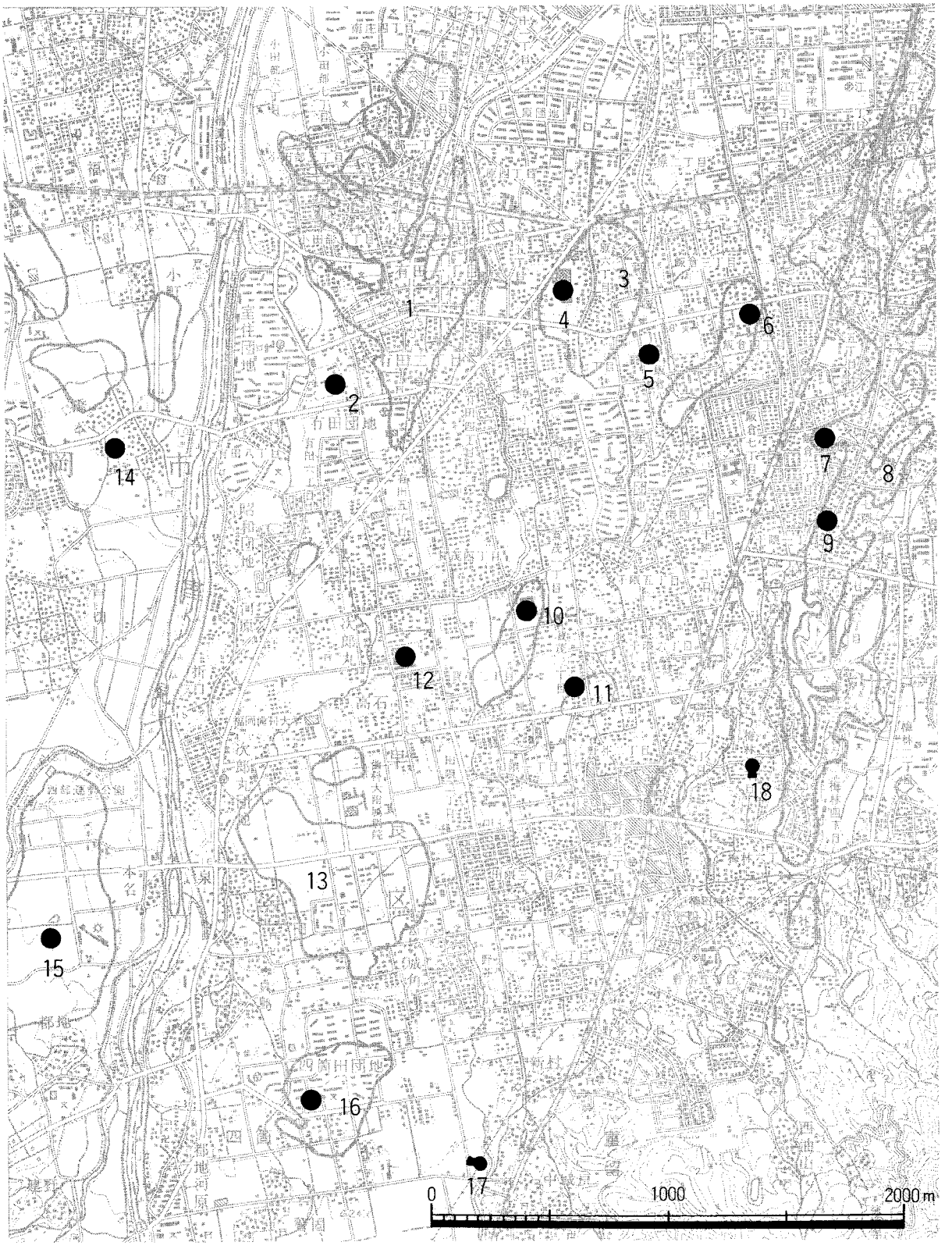


Fig. 1　有田遺跡群と周辺遺跡（1/25,000）

1．有田遺跡群　2．有田七田前遺跡　3．原遺跡群　4．原談儀遺跡　5．原深町遺跡
6．飯倉原遺跡　7．飯倉唐木遺跡　8．飯倉遺跡群　9．干隈古墳　10．鶴町遺跡
11．野芥大藪遺跡　12．次郎丸高石遺跡　13．田村遺跡　14．橋本榎田遺跡　15．吉武遺跡群
16．四箇遺跡　17．拝塚古墳　18．梅林古墳

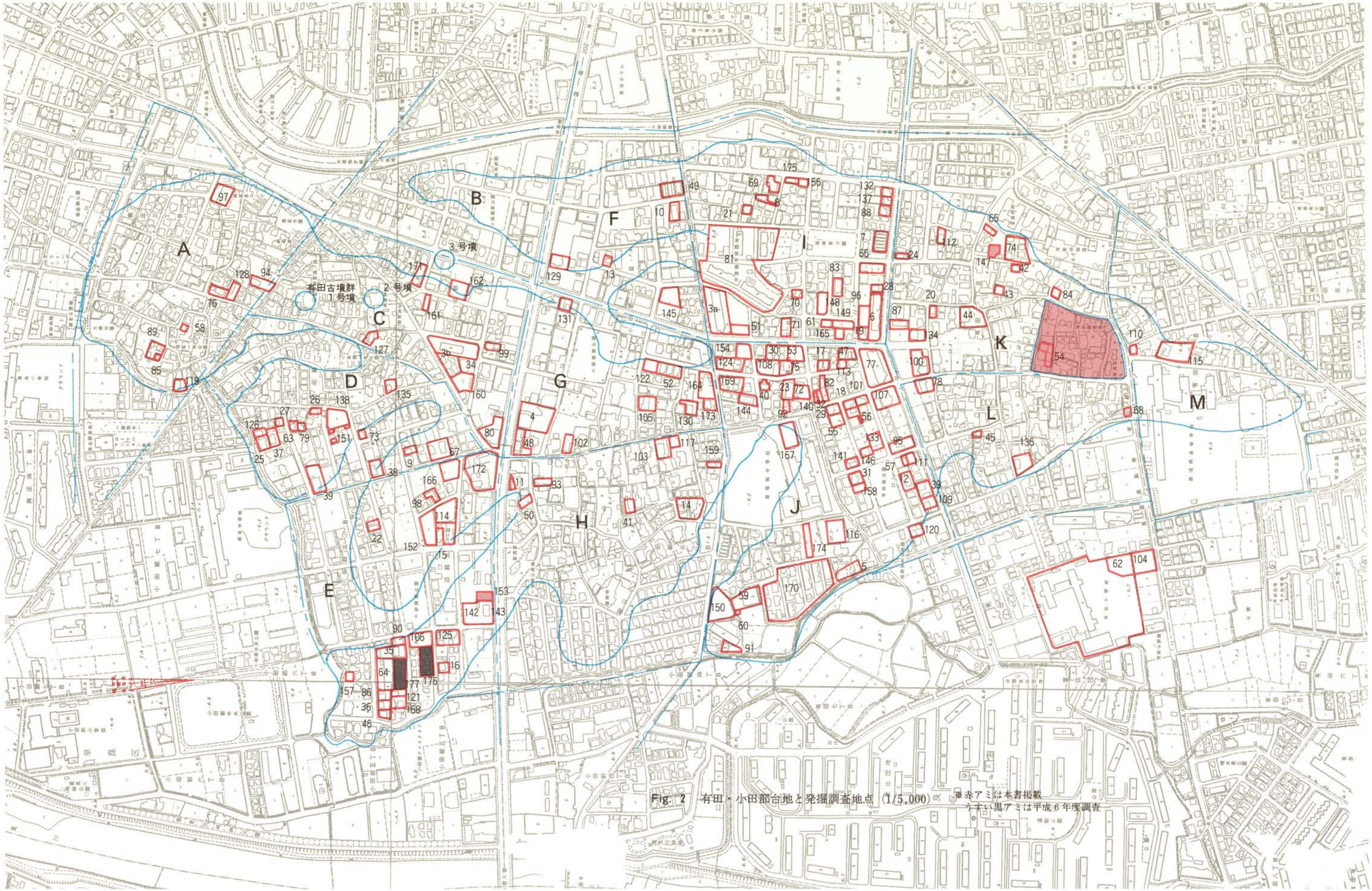


Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点（1/5,000）

※赤アミは本書掲載
うすい黒アミは平成6年度調査

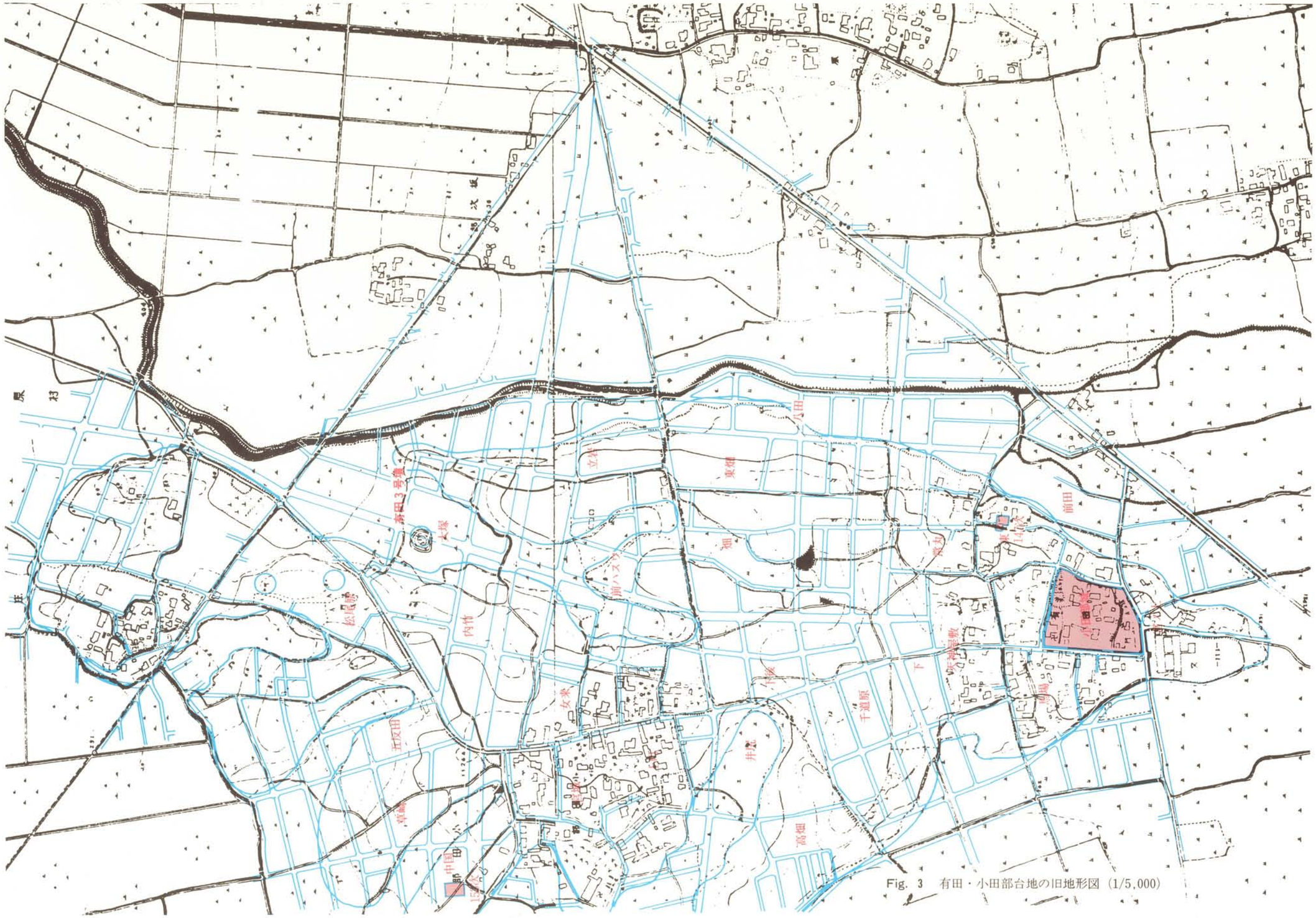


Fig. 3　有田・小田部台地の旧地形図（1/5,000）

平野の拠点集落の一つといえる。しかし、後期になると、遺跡の範囲は縮小し、台地の南東部に範囲が限定されていく。

古墳時代は再び集落が拡大しはじめ、台地全域に各時期の集落が確認されている。ただ北側の南庄地区は墳墓域という性格が強くなり、石棺墓（現在原西中学校校内に移築保存されている）の出土のほか、筑紫殿塚・松浦殿塚などの大型円墳が存在する。後期の６世紀代になると、竪穴住居址と共に一本柱の柵に囲まれた方形の区画が出現し、７世紀から８世紀代にかけては３本柱の柵に囲まれた倉庫群が出現し、那津官家との関連がとりざたされている。

古代律令期、早良平野内には太宰府から西に延びる官道、西海道が通り、それに付設された駅家が『延喜式』に額田駅家としてあり、その場所は特定されていないが、当遺跡の西側、室見川対岸の野方もしくは橋本あたりではないかと言われている。早良郡衙も現在所在地が確定していないが、有田地区の第56次・57次・77次・78次・101次・107次調査区で確認されている、８世紀代の方形の区画溝に囲まれた大型掘立柱建物群は官道の道筋や駅家推定地に近いことから、郡衙などの官衙施設の可能性が強い。

中世には有田・小田部地区は小田部郷と呼ばれており、文永８年（1271）の飯盛宮社領坪付に記載が見られる。中世後半代には有力大名大内氏の筑前進出で、早良平野もその支配下に入り、早良郡代が置かれる。16世紀の天文年間の早良郡代であった大村興景は小田部に下中薗屋敷という知行地を与えられたとされ、台地北東部の小田部５丁目地区周辺にその地名が小字名として残っている。調査でもその周辺に該期の方形に巡る堀や溝などが検出されており、大村氏の居館があった可能性が強い。16世紀後半の戦国時代末期になると大友氏の被官であった小田部氏の里城といわれる小田部城が有田の地にあったと言い伝えられている。有田地区では幅５～10mを測る空堀が台地高所部を中心に200m四方の範囲に掘開されているのが確認されている。堀の中からは土師器、瓦質土器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、板碑類などが多量に出土している。遺物の時期は15～16世紀代の時期であり、これらの空堀が城館のものの可能性が強く、伝承に残る小田部城との関連が考えられる。

２．有田遺跡群関係文献一覧

『有田古代遺跡発掘調査概報』市報第１集、1967
『有田遺跡－福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告－』市報第２集、1968（２次）
『有田周辺遺跡調査概報』市報第43集、1977
「有田・小田部」現地説明会資料（孔版）、1977
『有田遺跡』（孔版）、1979
『有田・小田部第１集』市報第58集、1980
『有田・小田部第２集』市報第81集、1982
『有田・小田部第３集』市報第84集、1982
『有田七田前遺跡』市報第95集、1983
『有田・小田部第４集』市報第96集、1983
『有田・小田部第５集』市報第110集、1984
『有田・小田部第６集』市報第113集、1985
『有田遺跡群－第81次調査－』市報第129次調査、1986
『有田・小田部第７集』市報第139集、1986

『有田・小田部第８集』市報第155集、1987
『有田七田前遺跡の調査』九州文化史研究紀要32号、1987
『有田・小田部第９集』市報第173集、1988
『有田・小田部第10集』市報第212集、1989
『有田・小田部第11集』市報第234集、1990
『有田・小田部第12集』市報第264集、1991
『有田・小田部第13集』市報第265集、1991
『有田・小田部第14集』市報第266集、1991
吉良国光『小田部氏関係資料』福岡市博物館研究紀要創刊号、1991
『有田・小田部第15集』市報第306集、1992
『有田・小田部第16集』市報第308集、1992
『有田・小田部第17集』市報第339集、1993
『有田・小田部第18集』市報第340集、1993
米倉秀紀『那津官家？－博多湾岸における三本柱柵と大型総柱建物群－』福岡市博物館研究紀要第３号　1993
『有田・小田部第19集』市報第377集、1994
『有田・小田部第20集』市報第378集、1994

第３章　調査の記録

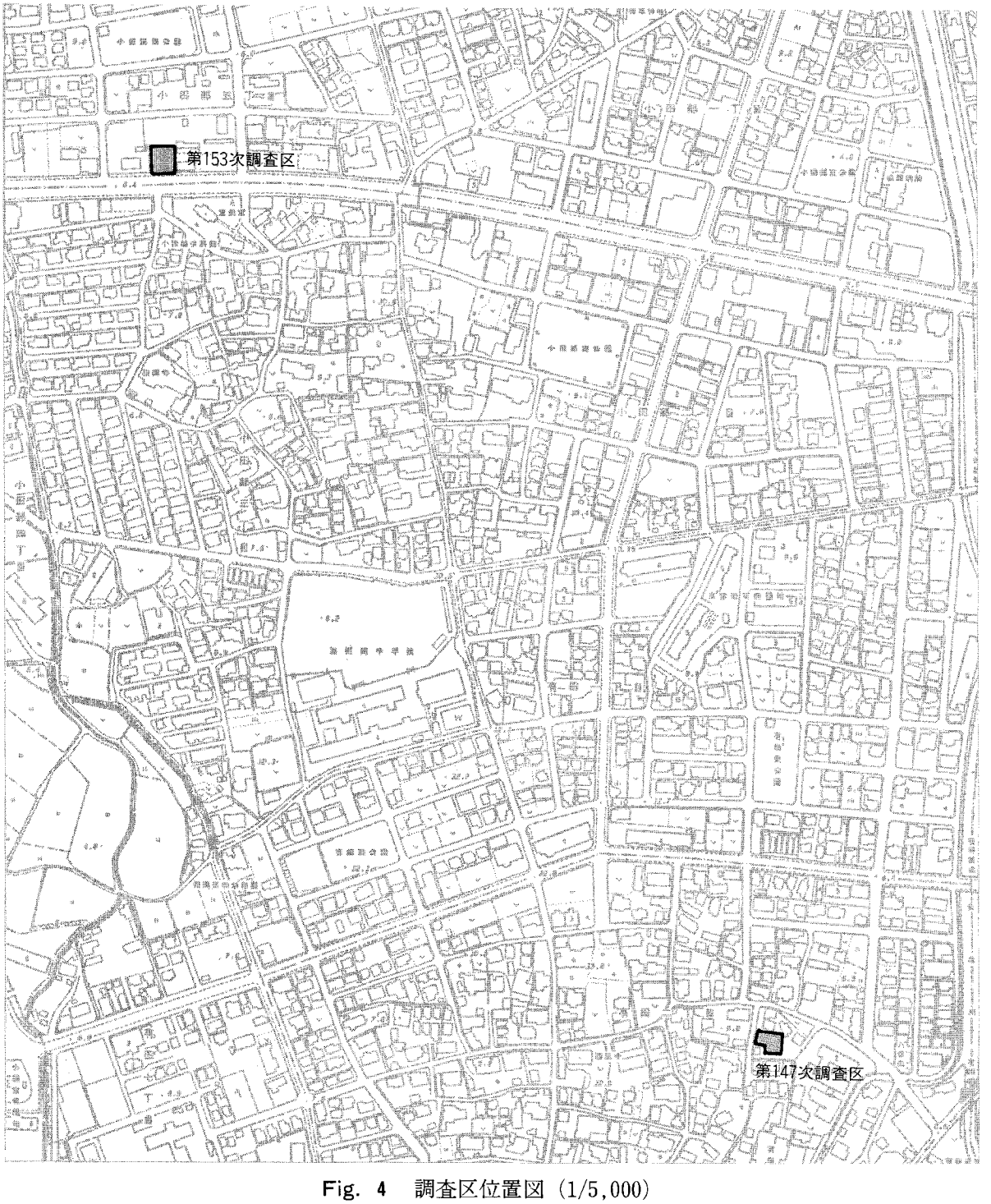


Fig. 4　調査区位置図（1/5,000）

1．第147次調査（調査番号8854）

1）調査区の地形と概要

調査区は早良区有田２丁目７－７に所在する。北に八つ手状に分岐して広がる有田・小田部台地の南端の東側斜面上に位置する。西が高く東に緩やかに傾斜する地形で、標高は遺構面で西が約7,3m、東側が７mを測る。現況は民家であった。

昭和62年度、埋蔵文化財課に事前調査願が地権者から提出され、これを受けて発掘調査を実施した。調査は平成元年１月24日～３月31日迄実施した。調査面積は申請面積739.60m²中228m²である。

調査区周辺では調査ヵ所は余り多くないが、西側で第43次調査、東側で第65次調査、南側で第42次、第74次調査区などがある。第43次調査区では中世末から近世初期にかけての石組井戸、不定形の土坑など、第65次調査区では古墳時代の土坑、第42次調査区では弥生時代のピットや中世の溝、第74次調査区では弥生時代から中世にかけての各時期の遺構が確認され、掘立柱建物群や土坑、井戸、溝などが検出されている。調査区一帯には常丸という字名が残り、この字名は青柳文書の中の飯盛行事役屋敷注文写のなかに見られるものである。また調査区の100m南側は小田部城推定地であり、東側には小田部城の外堀と言われる鬼丸ホゲがあったとされていた。

当地点の調査では、遺構は橙色のローム土上面で検出した。遺構面迄の深さは西側が表土10cm、東側が緩やかに傾斜し、北東側から浅い谷が入り込み深さは約1.2mを測る。遺構の残りは旧家屋のあった西側部分は撹乱・削平によって余り良くなかったが、東側斜面部は比較的良好であった。検出した主な遺構は弥生時代中期末頃の土器群、古墳時代頃の掘立柱建物３棟、土坑、溝などである。土器群は谷部から検出され、谷部には埋没した後、上面で掘立柱建物や溝などの遺構が確認された。

出土遺物は谷部の土器群を中心にパンコンテナで41箱ほど出土した。主な遺物としては弥生時代中期から後期の土器・石器、古墳時代土師器・須恵器、鳥形土製品などがある。

2）遺構と遺物

① 掘立柱建物

建物として確認したのは３棟である。ほかに柱痕跡を持つ柱穴があったが、狭い調査範囲や残りが悪いため建物としてはまとめえなかった。

SB01（Fig. 7、PL. 6）

調査区中央部で検出した長軸を東西方向のN－82°－Eにとる１×２間の建物である。東西の桁行方向全長3.1m、梁間全長3.1m、床面積は9.83m²を測る。梁間はスパンが広く、間に柱があった可能性があるがそれらしい柱穴は確認できなかった。柱穴は円形又は隅丸方形で、直径は38～56cmを測る。柱径は痕跡から15～20cm位であろう。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。形態的にみて本来は総柱建物の倉庫の可能性がある。

出土遺物（Fig. 10、PL. 12）　各柱穴から小量ずつ遺物が出土している。弥生土器から古墳時代の土師器・須恵器などが出土している。須恵器はあまり量は多くない。

１は初期須恵器で器台の小片か。外面に１条の凹線と波状文的に連続する半円状の沈線が上下相対応して２条巡る。色調は黒灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良い。Ｐ２（SP17）出土。17・18はＰ３出土の粘土塊、長さは17が2.9cm、18が4.1cmを測る。色調はにぶい橙色、胎土は砂粒を少し含む。

Fig. 5　調査区第１面遺構配置図（1/120）

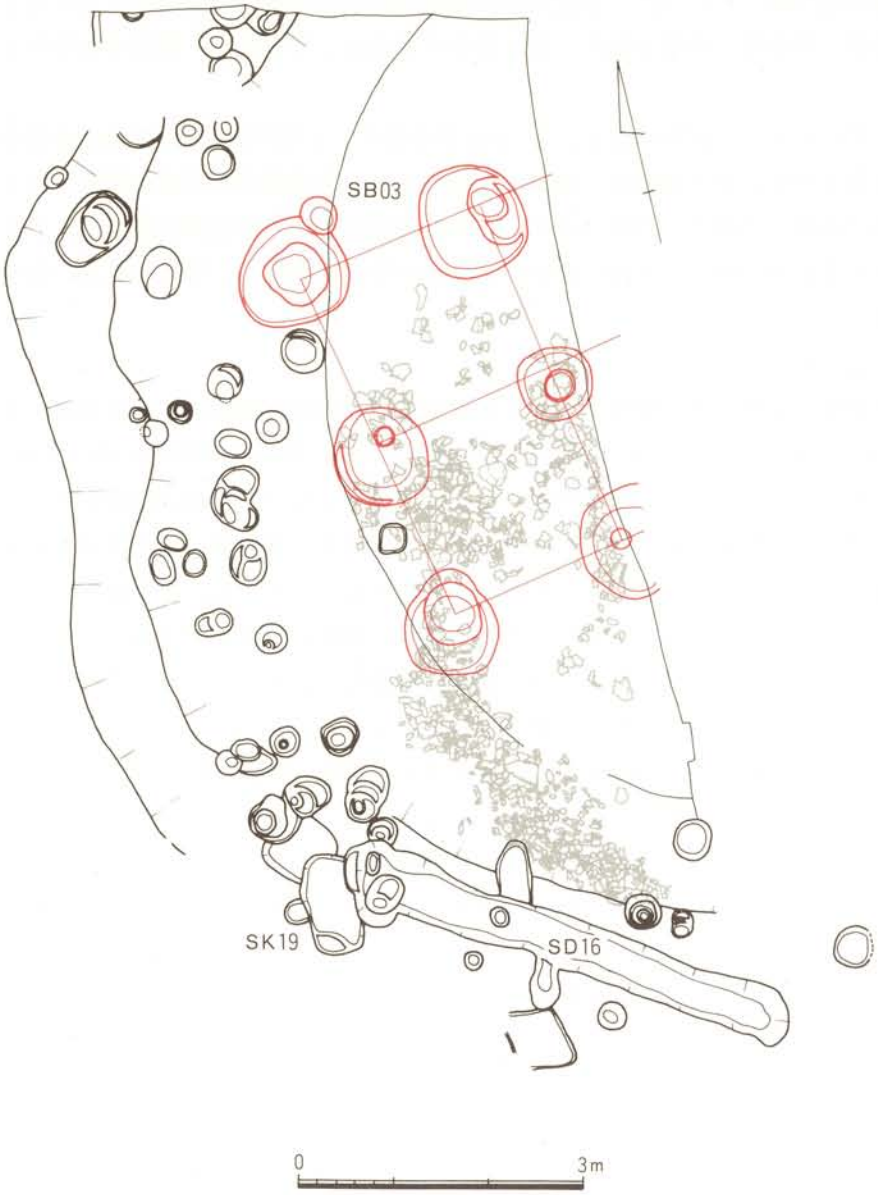


Fig.6　第2面・第3面遺構配置図（1/80）

SB02（Fig. 7、PL. 6）

調査区中央南側で検出した長軸をN－25°－Eに取る2×2間の建物である。桁行全長2.97～3.25m、梁行全長2.65m、床面積は8.14m²を測る。平面形は全体に歪み、柱筋は通らず、柱間隔も桁側南側が狭い。柱穴は円形から楕円形、隅丸長方形で、直径は60～100cm、深さは60～70cmを測り、大きく深い。柱径は痕跡から15cm位と予想される。埋土は暗褐色又は黒褐色粘質土を主体とする。形態的にみて倉庫的建物であろうか。

出土遺物（Fig. 10、PL.12）　各柱穴から遺物が出土している。量的にはそれほど多くないが弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石剥片、焼土塊などが出土しているが、種類では弥生土器が多く、須恵器は少ない。

2～4いずれもP2（SP86）出土。2・3は須恵器で、2は坏身1/5片で復元受部径13cm、口径11cmを測る。色調は灰色、胎土は精良、焼成は良好である。小田編年のⅣ期の形態である。3は坏蓋の小片。天井部は回転ヘラ削り、内面はナデ。ヘラ記号がある。外面色調は黒褐色、胎土は精良、焼成は普通。4は軟質土器の細片。外面に細かい格子目の叩き目を持つ。外面はにぶい橙色、胎土は精良、焼成は普通。

SB03（Fig. 8、PL. 7）

調査区北東側の谷部上面で検出した2×1間以上の長軸を南北方向にとる建物である。南北全長3.92m、東西全長1,99m以上を測る。柱間隔はほぼ均一である。柱穴は円形から隅丸方形で直径は80～120cmを測り大きいが、深さは25～50cmで残りはそれほど良くない。柱径は痕跡から40cm位か。埋土は黒褐色または暗褐色の粘質土を主体とし、全体によく締まる。形態的にみて総柱の倉庫であろうか。

出土遺物（Fig. 10、PL. 12）　各柱穴から土器片が出土している。包含層上にあるため、出土遺物の量は多い。種類としては弥生土器が大半で須恵器、黒曜石の剥片が少量出土している。

5はP1（SP203）出土の須恵器の坏身の細片。口縁部の立ち上がりが内傾する形態であり、Ⅳ期位の時期か。色調は灰色、胎土は精良、焼成は良い。6・8・9・19はP3（SP206掘り方、SK18）出土。6は軟質土器の甑の底部の小片。蒸気孔が2ヵ所残る。外面に粗い刷毛、内面はヘラ削り。色調はくすんだ橙色、胎土に砂粒と金雲母の細粒を含む。8・9は土師器。8は鉢口縁部1/6片、復元口径10cmを測る。内外面磨滅がひどく調整不明。9は壺の小片、復元口径約10cm。磨滅がひどく、調整は不明。8・9とも色調は浅黄橙色、胎土は精良で赤色粒子を含む。焼成はやや不良。19は杓子形土器の把手部分。全面指おさえ痕が残る。色調にぶい橙色、胎土は砂粒の細粒を多く含む。7はP4（SP204）掘り方出土。須恵器の坏蓋細片。口縁部が直立し、天井部の境に明瞭な段を持つ。色調は黒灰色、胎土は精良、焼成は良い。10はP5（SP180）掘り方出土の弥生土器の小型壺1/2片。口縁が大きく開く形態で、復元口径13.2cm、器高11.0cmを測る。外面は粗いタテ刷毛、内面は刷毛と指おさえ痕が残る。色調は灰黄色、胎土は砂粒を多く含む。11・12はP6（SP207）掘り方出土の弥生土器片。11は高坏の脚筒部片で外面磨滅するが、細かい刷毛、筒部内面にしぼり痕が残る。色調は橙色、細砂粒を多く含む。12は器台底部1/2片。外面は削りのち撫で、内面はしぼり痕が残る。色調はにぶい橙色、胎土に粗砂粒を多く含む。20はP3（SK18）出土の石鏃。基部の先端が欠損する。黒曜石製で長さ3cmを測り、大型である。

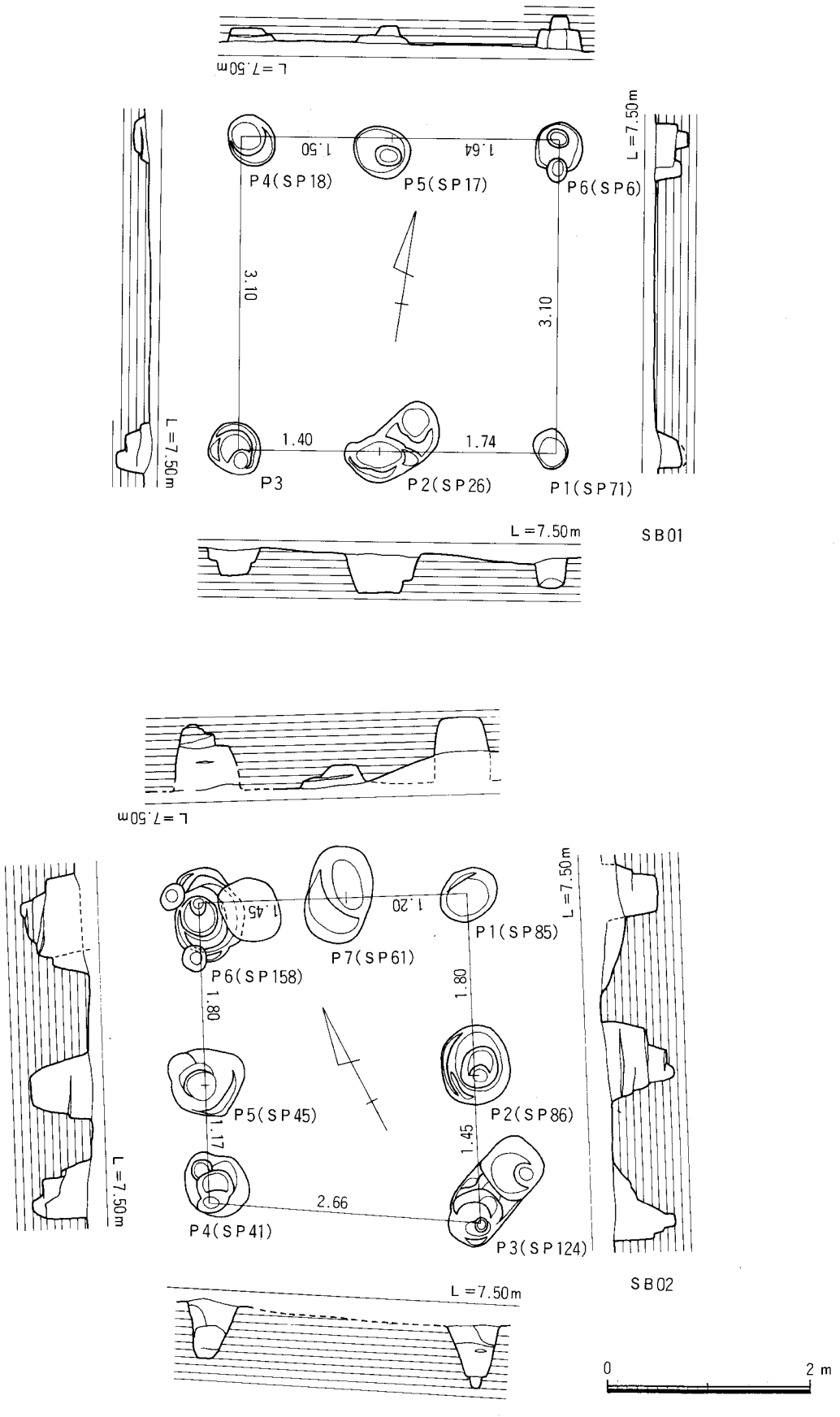


Fig. 7　SB01・02 (1/60)

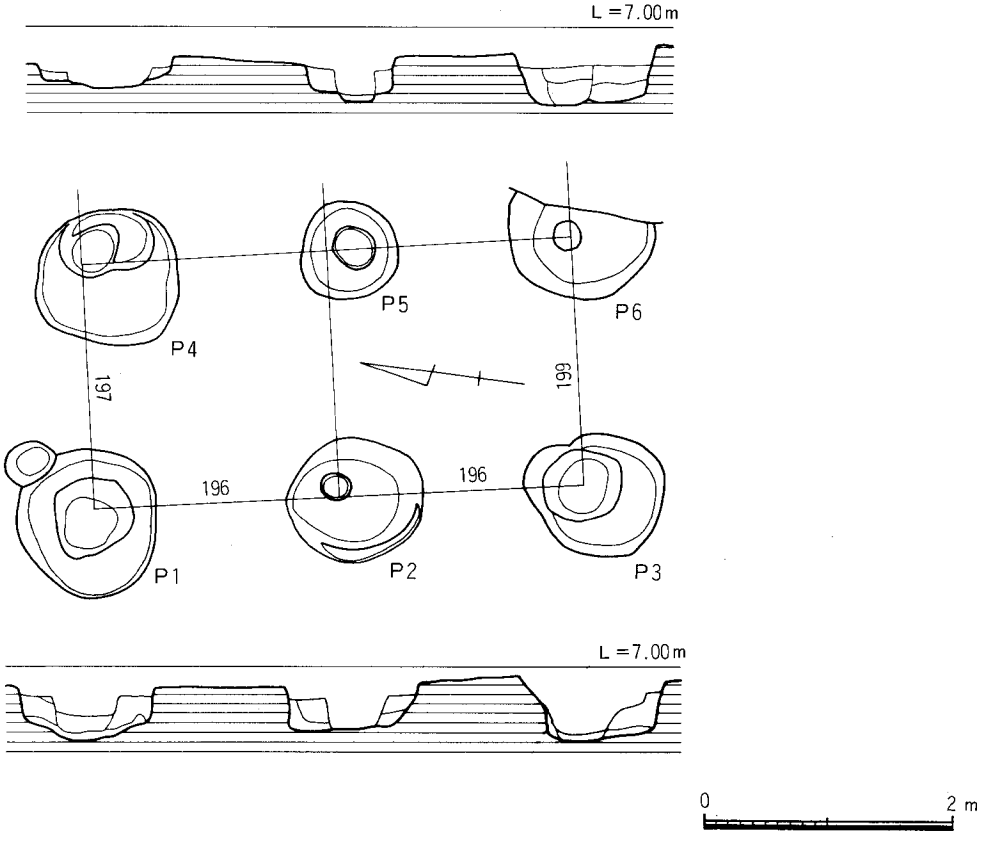


Fig. 8　SB03（1/60）

②　土坑

土坑番号を付したのは９個である。そのうちSK18はSB03の柱穴である。

SK03（Fig. 9、PL. 8）

調査区北西側包含層上で検出した円形の土坑。直径は88～92cm、深さは26cmを測る。土坑の断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色粗砂混粘質土でマンガン粒子を含む。土坑の性格は不明。

出土遺物（Fig.10）　弥生土器から土師器、須恵器の破片を少量含むが、大半が細片である。他に黒曜石の石核や瓦質土器片らしき破片も１点含む。

13は須恵器の坏蓋小片、復元口径9.8cm。内面に断面三角のかえりがつく。色調は灰色で、胎土は精良、焼成も良好。

SK04（Fig. 9、PL. 8）

調査区北壁際で検出した方形の土坑である。規模は長辺118cm、短辺104cm、深さ66cmを測る。底面は西側と南側に狭いテラスを持ち、底面中央には円形で直径28×38cm、深さ12cmのピットを持つ。埋土は暗褐色から黒褐色の粘質土を主体とし、地山ロームブロックを混入する。土層断面には柱痕跡が認められ、また形態的にみてもSB03と軒を揃えるような建物の柱穴の可能性が強い。

出土遺物（Fig. 10）　弥生土器から土師器片が比較的多く出土した。他に須恵器、焼土塊、不明石

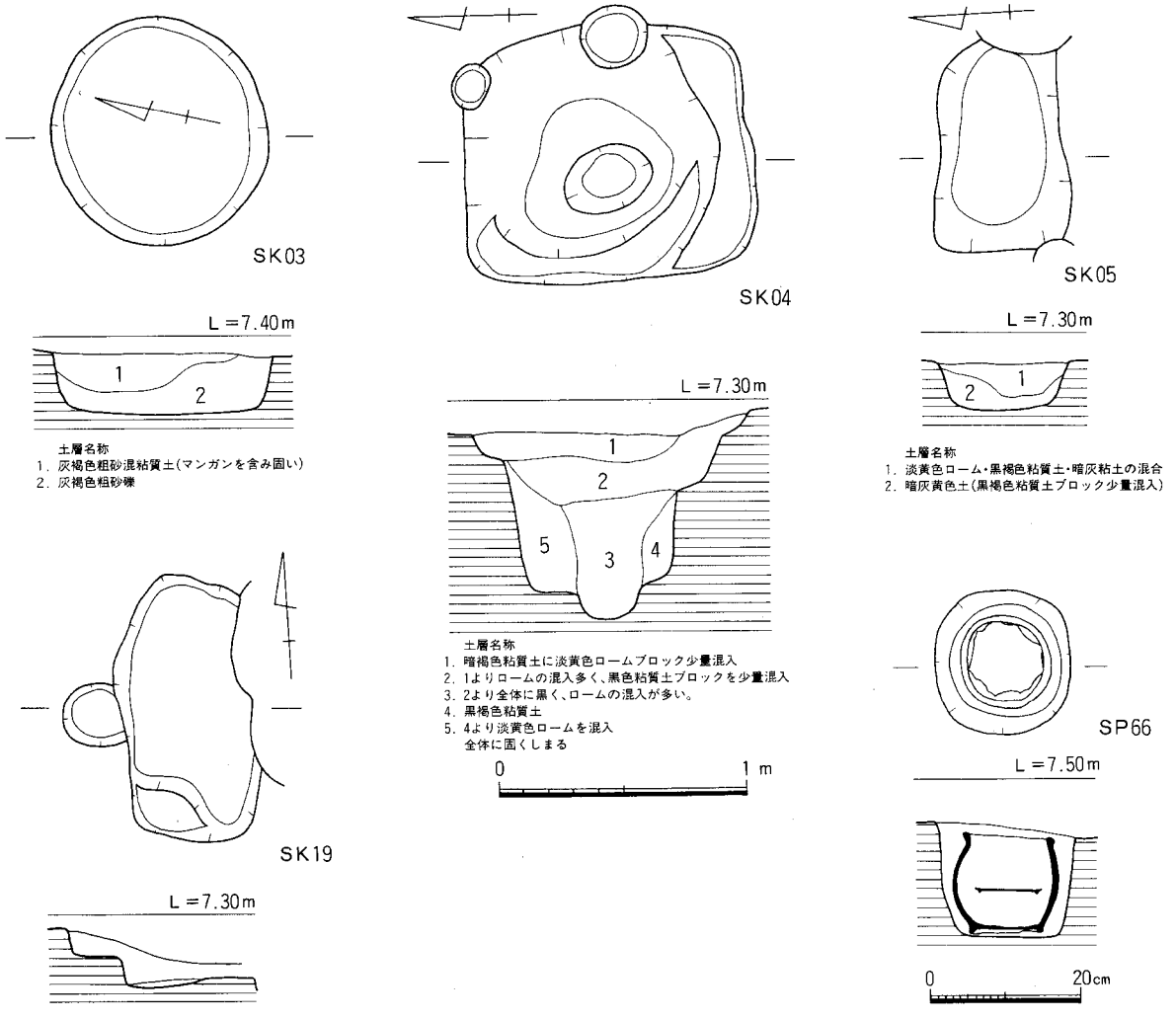


Fig. 9　土坑・SP66（1/30）

製品が出土している、弥生土器のなかには夜臼式土器を1点含む。

14は須恵器の坏蓋天井部細片。ヘラ記号がある。色調は橙色、胎土は精良。

SK05（Fig. 9、PL. 8）

調査区北壁際SK04西側で検出した長軸をほぼ東西にとる長方形状の土坑である。規模は長辺86cm、短辺54cm、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面は中央部が僅かに深くなる。埋土は淡黄色ローム、黒褐色粘質土、暗灰黄色土の混合土が主体である。遺物は少なく、遺構の性格は不明。出土遺物は少なく、土師器らしき細片が6点ほど出土している。

SK07

包含層上で検出した不定形状の浅い土坑。遺構の性格はわからないが上面からの撹乱の可能性が強い。

出土遺物は弥生土器を中心とする小片が90点程出土している。その内須恵器、土師器の細片が各1点ある。

SK08

調査区南東隅で検出した土坑であるが、一部が調査区外で全容は不明。現状では不整楕円形状を呈す。規模は長辺で1.7m、深さ約20cmを測る。底面は南側が一段高くテラス状を呈す。埋土は黒褐色粘

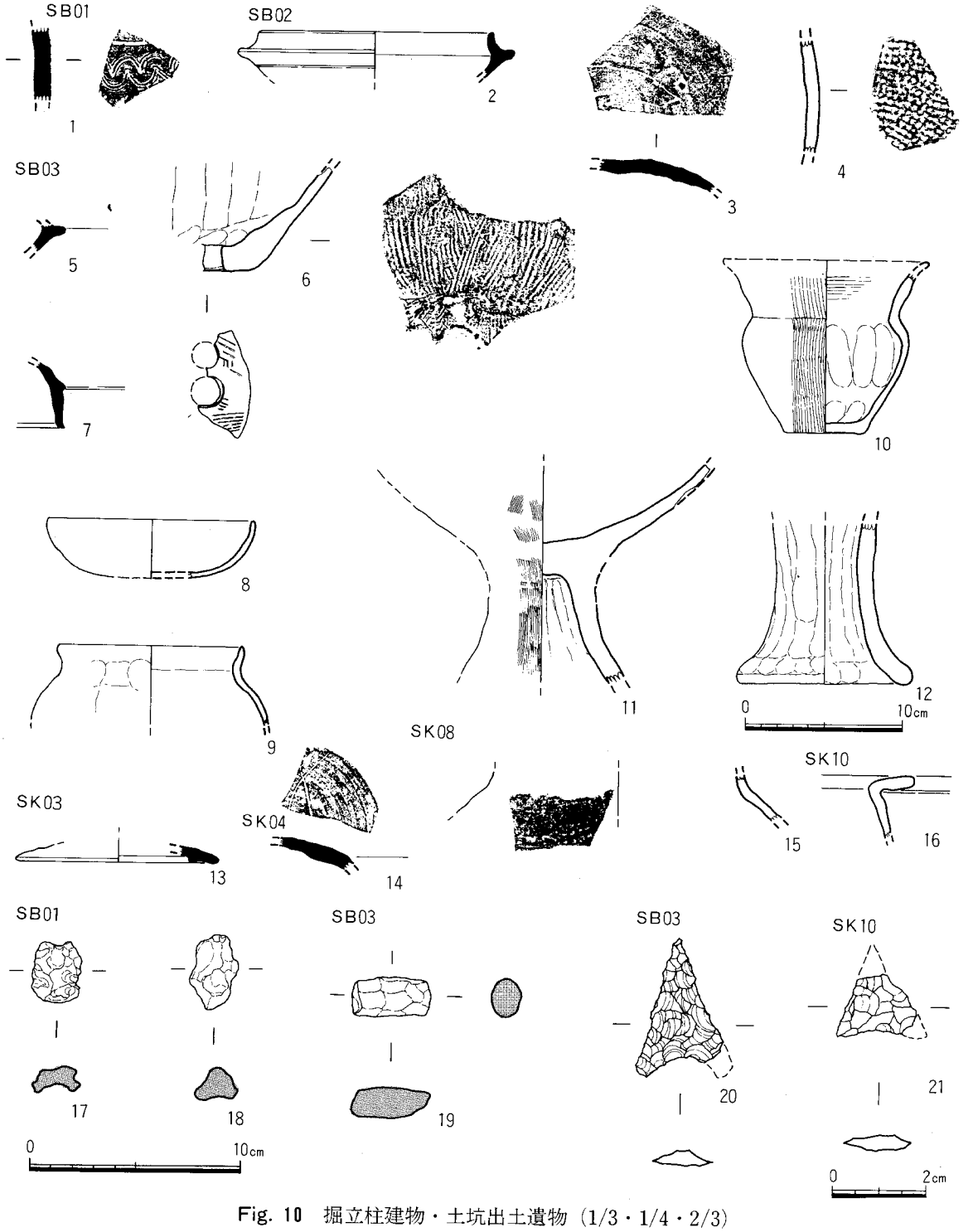


Fig. 10　掘立柱建物・土坑出土遺物（1/3・1/4・2/3）

質土で地山ローム土のブロックを混入する。

出土遺物（Fig. 10、PL. 12）　弥生土器を主体とするが、他に土師器、須恵器の細片や黒曜石片を僅かに含む。土坑の時期は古墳時代後期であろう。

15は軟質土器の肩部片、全面磨滅が著しいが外面には格子目の叩きがある。色調は橙色、胎土に赤

色粒子を少量含む。

SK10

調査区北東隅、包含層上で検出した土坑状の落ち込み。SB03柱穴のSP171・174・175の上面で検出した。埋土は黒褐色粘質土に黄灰色ロームの混入土を主体とするが、遺構の性格はわからない。

出土遺物（Fig.10、PL. 12）　弥生土器片が多いが、他に土師器・須恵器片、黒曜石剥片・石核も少量含む。

16は弥生土器の甕の口縁部小片。色調はにぶい橙色、胎土は精良。中期後半である。21は石鏃の破片。凹基の形態で先端と基部の一部を欠損する。暗灰色のサヌカイト製。全体に磨滅する。

SK13

包含層上層下面で検出した不定型の浅い土坑状の落ち込み。埋土は包含層上層土と同じで、遺構では無い。

出土遺物は弥生土器片が大半であるが、土師器・須恵器・軟質土器の細片も少量含む。他に黒曜石の剥片がある。

SK14

SK13北側で検出した不定型の浅い土坑状の落ち込みで、SK13と性格は同じ物であろう。

出土遺物は弥生土器片が大半であるが、他に土師器・須恵器の細片を含む。

SK19（Fig. 9）

調査区南東隅、SD16の西端で検出した隅丸長方形を呈する土坑で、SB02・SD16に切られる。規模は長辺110cm、短辺54cm以上、深さは15～19cmを測る。底面には南側に部分的にテラス状の高まりを持つ。埋土は黒色粘質土と黄白色ロームブロックの混合土を主体とする。遺構の性格は不明。

出土遺物は弥生土器の細片などが5点出土している。

③　溝状遺構

確認したのは8条。いずれも溝幅は小さく、深さも浅い。そのうちSD11・12・17はSD01・02を掘り下げた面で確認した浅い溝である。

SD01（PL. 7）

調査区北東隅、包含層上面で検出した主軸を略北に取る小溝、幅は50～120cm、深さ約10cmを測る。溝は南東隅で消滅する。溝断面は浅い皿形を呈し、埋土は暗褐色土で固く締まる。埋土から見て中世以降であり、西側の平行する小溝から考えて、道路や農地などの区画の溝であろうか。

出土遺物（Fig.11、PL. 12）　遺物の量は比較的に多い。弥生土器の小片が圧倒的に多いが、他に古墳時代の土師器・須恵器片を少量含む。また染付・高取焼の陶器の細片、黒曜石の剥片も各1点ずつ含む。

22は須恵器の坏蓋1/6片。復元口径11cmを測る。天井部は回転ヘラ削りでその他は撫で。口縁内面に断面三角のかえりがつく。色調は暗灰色、胎土は砂粒を多く含む。23は瓦質土器の鉢1/6片。復元口径19.4cmを測る。口縁は玉縁状を呈す。磨滅が著しいが、内面刷毛がかすかに残る。色調は黒灰色、胎土は精良。

SD02（PL. 7）

SD01の西側に平行して検出された小溝である。確認長5.8m、幅35～50cm位を測り、深さは約4cmを測り浅い。埋土は暗褐色土を主体とする。SD01と同じような区画の溝であろうか。

出土遺物（Fig. 11）　量的にはそれほど多くない。弥生土器や土師器・須恵器、陶器の細片が大半

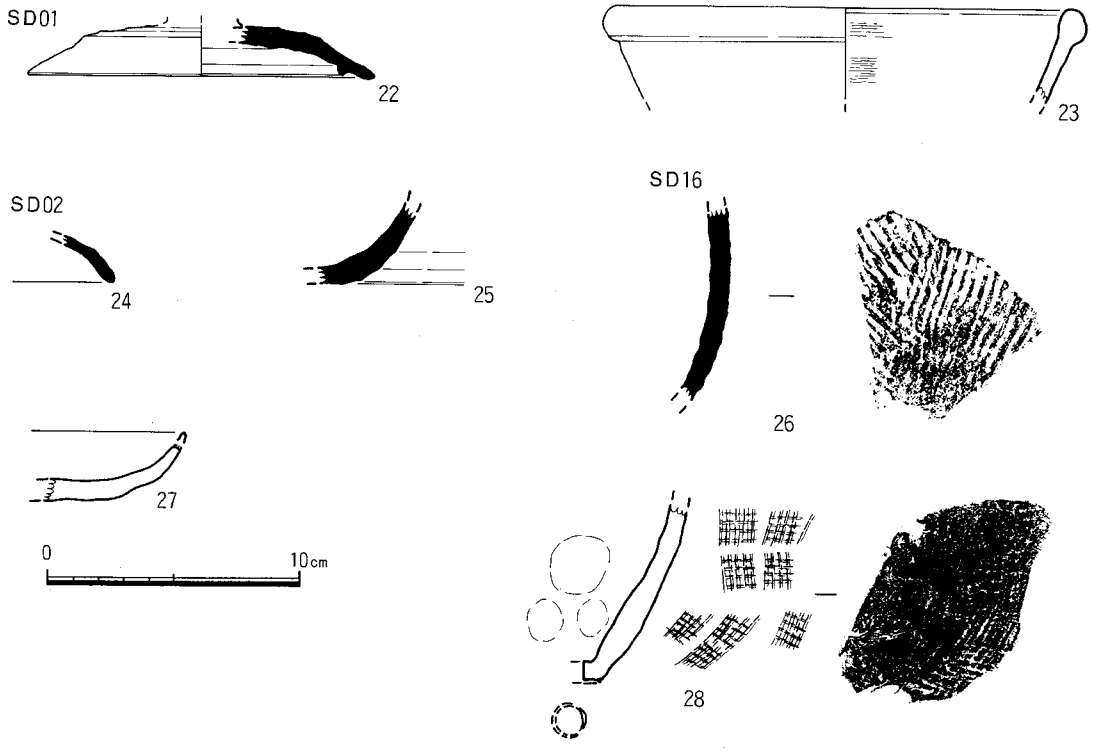


Fig. 11　溝出土遺物（1/3）

であり、陶器片から近世であろうか。

24・25は須恵器。24は坏蓋の細片、色調は暗赤褐色、胎土は精良、25は大型の坏の底部細片。外面ヘラ削り。色調は灰褐色、胎土は細砂粒を含む。

SD16（PL. 8）

調査区南東側に検出した北西から南東に延びる小溝。西端はSB02の柱穴に切られるが、規模は長さ4.3m、幅50～55cm、深さ30cm前後を測る。溝断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色粘質土に地山ロームブロックを混入する。包含層上面では確認出来ず、ある程度掘り下げた段階で確認している。

出土遺物（Fig.11）　弥生土器や土師器片が中ビニール袋2袋ほど出土しているが、大半が弥生土器でしかも細片が多く、図化しえたものは少なかった。

26は須恵器の甕の胴部細片。外面は重なる平行の叩きを施し、内面はあて具の痕跡らしき凹凸が残る。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良。27は土師器の鉢か坏の細片。磨滅が著しいが、外底部に板状の圧痕が残る。色調はにぶい橙色、胎土は精良で赤色粒子を含む。28は土師器か軟質土器の甑底部細片。直径1.2cmの円形の蒸気孔が残る。器表はやや磨滅するが、外面は木目直交の叩き。

④　包含層・谷部の調査（Fig. 12、PL. 9～11）

調査区の北東隅に北から入り込む幅10.5m、最大深さ1.2mを測る谷を検出し、包含層とその中に大量の土器を伴った土器群、上層には竪穴住居址ものと思われる焼土の痕跡、掘立柱建物などが検出された。この谷は北東方向にだらだらと深くなっていき、包含層の堆積状況は大きく6層に分けること

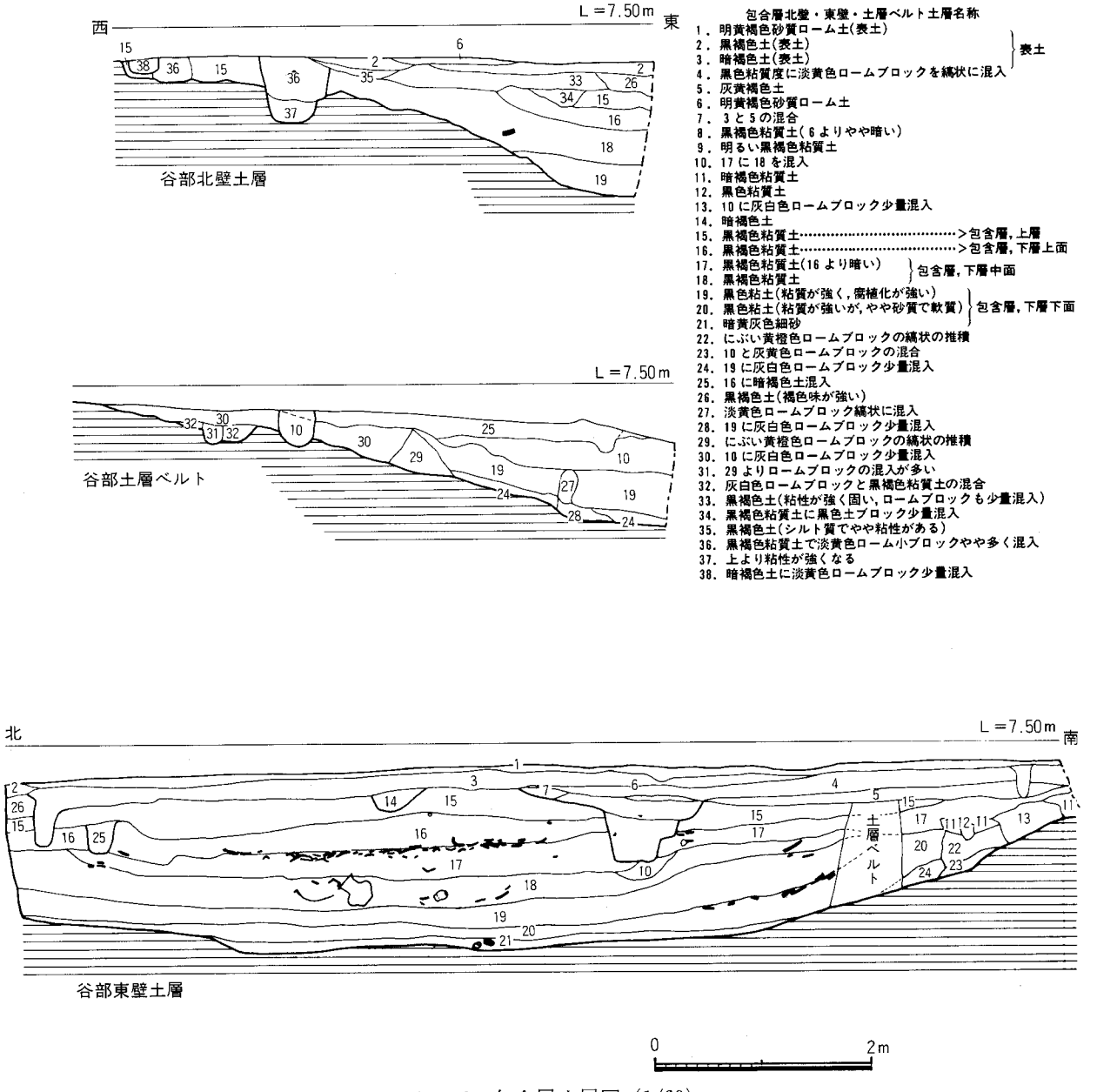


Fig. 12　包含層土層図（1/60）

が出来た。上から下へ黒褐色粘質土（10YR3/2)、やや明るい黒褐色粘質土（10YR2/3)、やや赤みのある黒褐色粘質土(7.5YR2/2)、黒褐色粘質土(10YR2/2)、黒色粘土(10YR2/2)、黒色粘土(10YR1.7/1)でやや砂質となり、底面には暗黄灰色細砂が薄く沈澱する。包含層で検出した遺構は第1層と第2層の上面で検出している。遺物は第3から第6層にかけて多く含まれており、断続的に流れこんだ状況を示している。第1層は古墳時代の須恵器・土師器、朝鮮系の軟質土器、鳥形土製品などが出土しており、古墳時代の5世紀代の層であるが、2層以下は弥生時代中期後半から後期前半位の遺物を含む。

出土遺物（Fig.13～19・36、PL. 13・14）　29～38は第1層（包含層上層）出土。29～33は須恵器。29・30は高坏。29は有蓋高坏の坏部1/3片で、復元受部径15.6cmを測る。外面は櫛状工具による施文、

その他はヨコ撫で、内底は不整方向撫で、色調は暗灰色、胎土は精良。30は高坏1/3片で口径11.9cmを測る。口縁部は内傾し端部を丸く収める。外底部は静止ヘラ削り。色調は灰色、胎土は精良。31～33は坏蓋小片。31は小片で口縁のかえりは直立し、天井部は回転ヘラ削り、その他はヨコ撫で。色調は灰白色、胎土は精良。32は天井で中窪の扁平な撮みがつく。天井はヘラ削り、その他は撫で、色調は灰色、胎土は精良。33は天井部細片、天井は回転ヘラ削り、その他は撫で。天井部に火襷（ひだすき）というわらを上にかぶせて焼かれたような痕跡が残る。色調は赤褐色、胎土は精良、焼成は良い。34～36は土師器。34・35は高坏の脚部片。34・35は脚部がラッパ状に大きく開く形態。35は1/2片で端部を欠損する。復元脚端径12.4cmを測る。脚端部が外折する形態である。磨滅がひどいが、外面は指押さえ痕が、内面にしぼり痕が残る。色調は34・35まで橙色、胎土は34が細砂粒を多く含むほかは精良。焼成はいずれも良い。36は飯蛸壺の1/2片。復元口径4.0cm、器高9.7cm、最大胴径6.2cmを測る。胴部上部に直径1.2cmの円形孔が１ヵ所ある。全体に磨滅がひどいが撫でか、内面に指押さえ痕が残る。色調は黄橙色、胎土は精良だが、赤色粒子を大きく含む。37・39は朝鮮系軟質土器の細片。いずれも外面細かい格子目の叩き、37は内面に黒色顔料が塗られる。色調は37が橙色、38が暗黄橙色、胎土はいずれも精良。

39～48は第２層（下層上面）出土。39は土師器の高坏坏部1/4片で復元口径17.4cmを測る。全体に磨滅がひどいが撫でか。坏部の外は刷毛目が残る。色調は明橙色、胎土は細砂粒を多く含むが精良。40～44は甕。40・41は口縁部で、40は1/4片で逆Ｌ字形の口縁で、復元口径30cmを測る。口縁部はヨコ撫で、内面はナナメの刷毛。41は1/4片でく字状に外反する口縁部である。復元口径28.6cmを測る。色調は40が橙色、41が淡橙色を呈し、胎土は40が精良、41が粗砂粒を多く含む。焼成はややあまい。42～44は底部、42は1/２片で、全体に磨滅がひどいが外面粗い刷毛、内面は不明。43は底部はやや上げ底、外面は粗いタテ又はナナメの刷毛、内面に指押さえ痕が残る。44は底部は安定した大きな平底、外面はタテ、ナナメの粗い刷毛、内部・底部は撫で。色調は42・44が橙色、43が明橙色である。胎土は42・44が石英・長石の粗砂粒を多く含み、43は金雲母を含むが精良。45は蓋1/2片で直径16.0cmを測る。外面丹塗りで研磨、内面は撫で。縁辺に２個一対の直径５㎜の円孔が有る。46・47は器台。46は脚部1/2片。器壁が比較的薄く、くびれ部が口縁直下にあり、脚部が内湾して外に開く器形。復元脚径12.8cmを測る。外面は細かい刷毛、内面は撫でで脚裾にヨコ刷毛で指押さえ痕が残る。47は脚部3/4片で、脚径12.8cmを測る。円筒状で脚部が屈折して外に開く形態。外面は指押さえのち撫で、内面しぼり痕が残る。脚裾部は磨滅・剝落がひどい。色調は46が橙色、47が黄橙色を呈し、胎土は46が細砂粒を少量、47は多く含む。48は鉢の1/2片で、復元口径は14cm、器高は5.7cm位である。内外磨滅がひどいが丹塗り研磨、内面に指押さえ痕が残る。色調は赤褐色、胎土に細砂粒を含むが精良。

49～80は第３・４層（包含層下層中間）出土でいずれも弥生土器。49～51は壺。49はほぼ完形。口径23.3cm、器高28.3cmを測る。口縁部は直立気味に外反し、胴部最大径は上半にある。内外面撫で、外面は底部近くはタテ刷毛のち撫で。胴部には黒斑が２ヵ所ある。頸部内面は指押さえ痕が残る。色調は橙色、胎土は精良。50・51は底部片で外面丹塗り。50は外面はタテのヘラ研磨。内面は撫でで工具痕が残る。51は磨滅がひどく、丹は剝げている。内面は撫でで底部近くに指押さえ痕が残る。色調はいずれも赤褐色、胎土は精良。52～64は甕。52～58は口縁部である。52～54は鋤先状口縁を持つ。52は大型の甕の1/4片で復元口径41.4cmを測る。口縁から５cm程下に１条の三角突帯が付く。磨滅がひどく調整は不明だが内面に指押さえ痕が残る。53は1/4片で復元口径30.4cmを測る。磨滅がひどいが、外面タテ刷毛、口縁内外はヨコ撫で、その他は撫で。内面に指押さえ痕が残る。口唇部に刻み目が付く。54は中型の甕の1/5片。復元口径31.6cmを測る。口縁下に１条の三角突帯が付く。外面やや磨滅するが、タテ刷毛、口縁部は刷毛後撫で、内面は撫で口縁部には指押さえ痕が残る。色調は52・53は橙

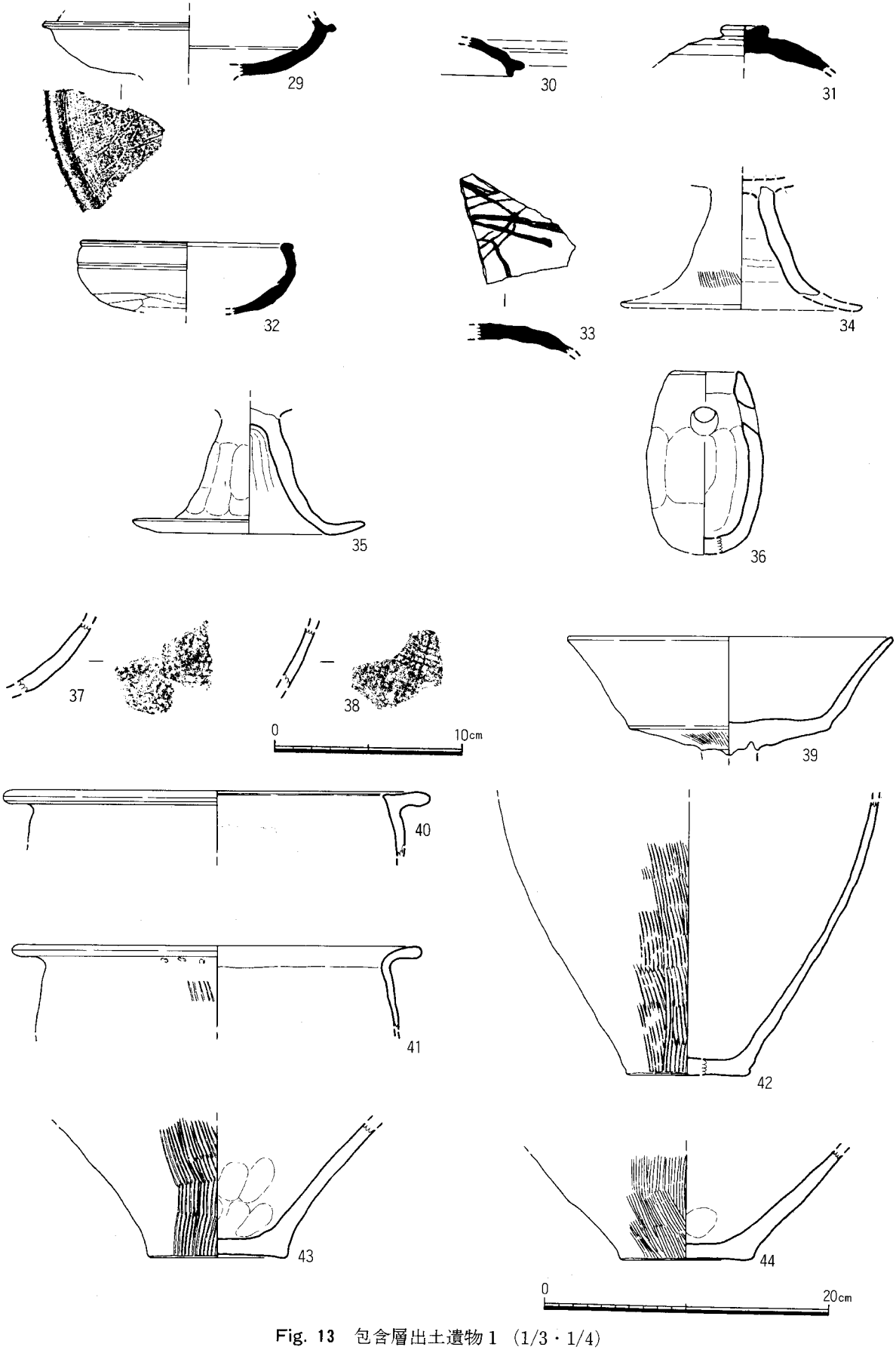


Fig. 13　包含層出土遺物1（1/3・1/4）

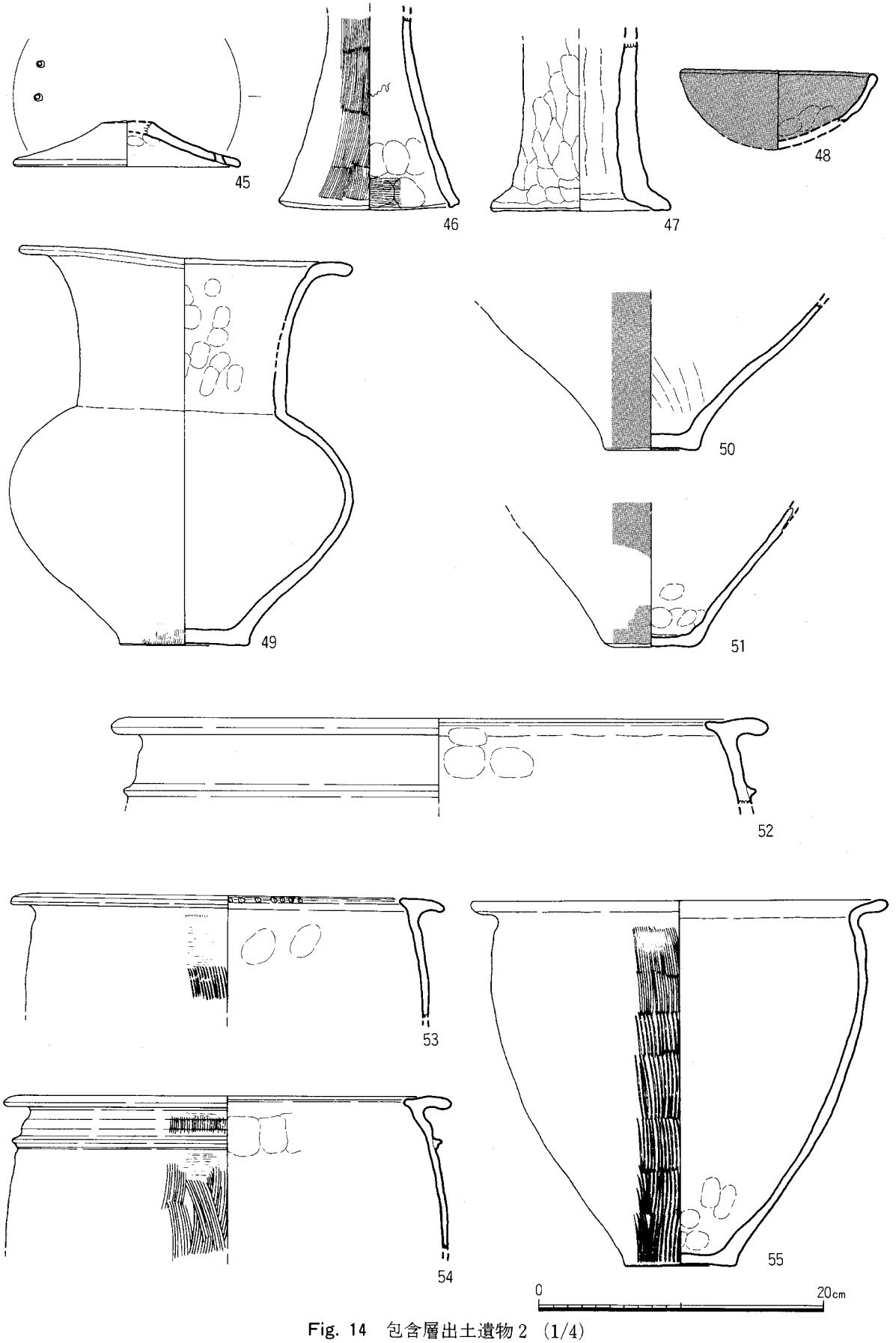


Fig. 14　包含層出土遺物２（1/4）

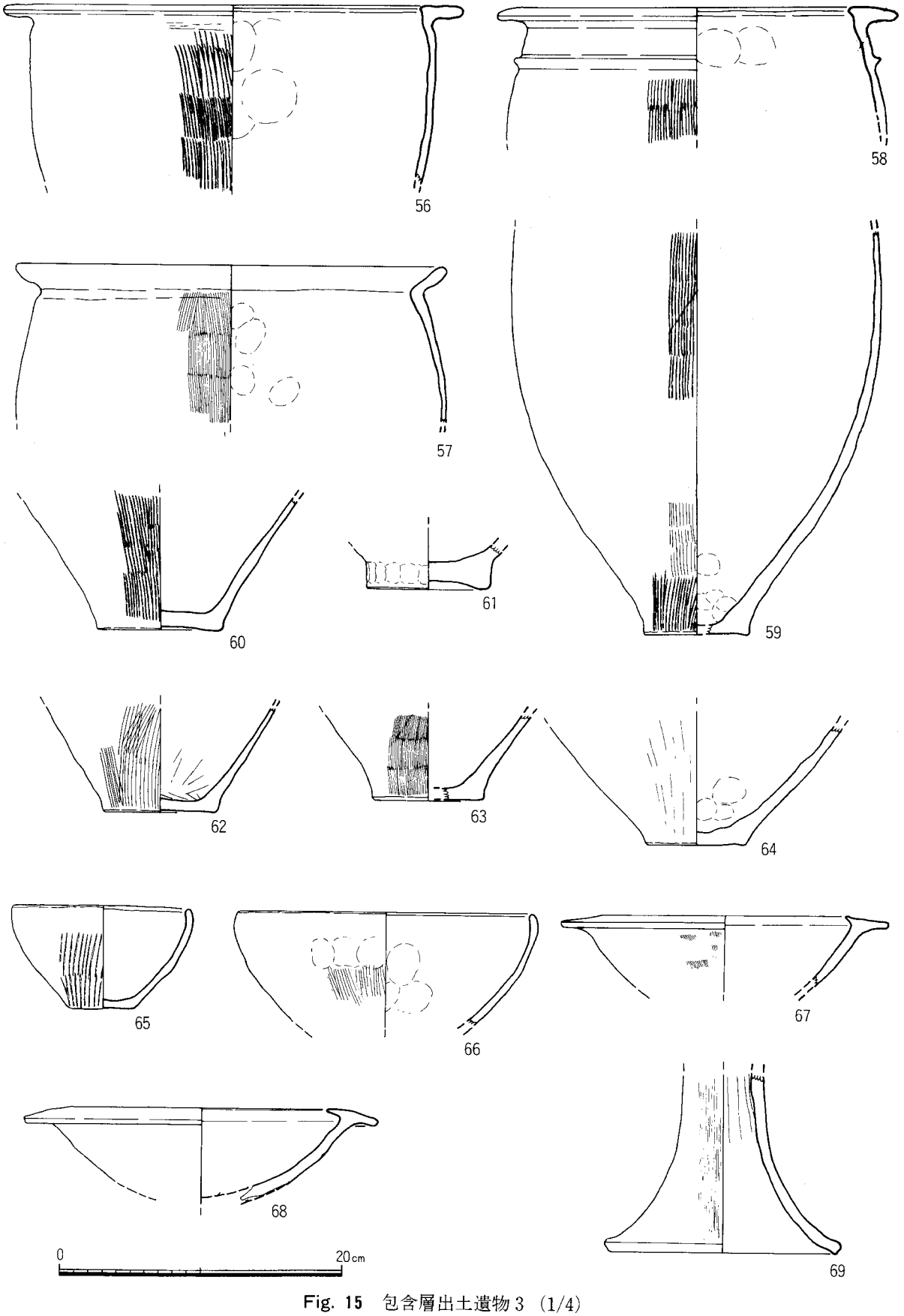


Fig. 15　包含層出土遺物3（1/4）

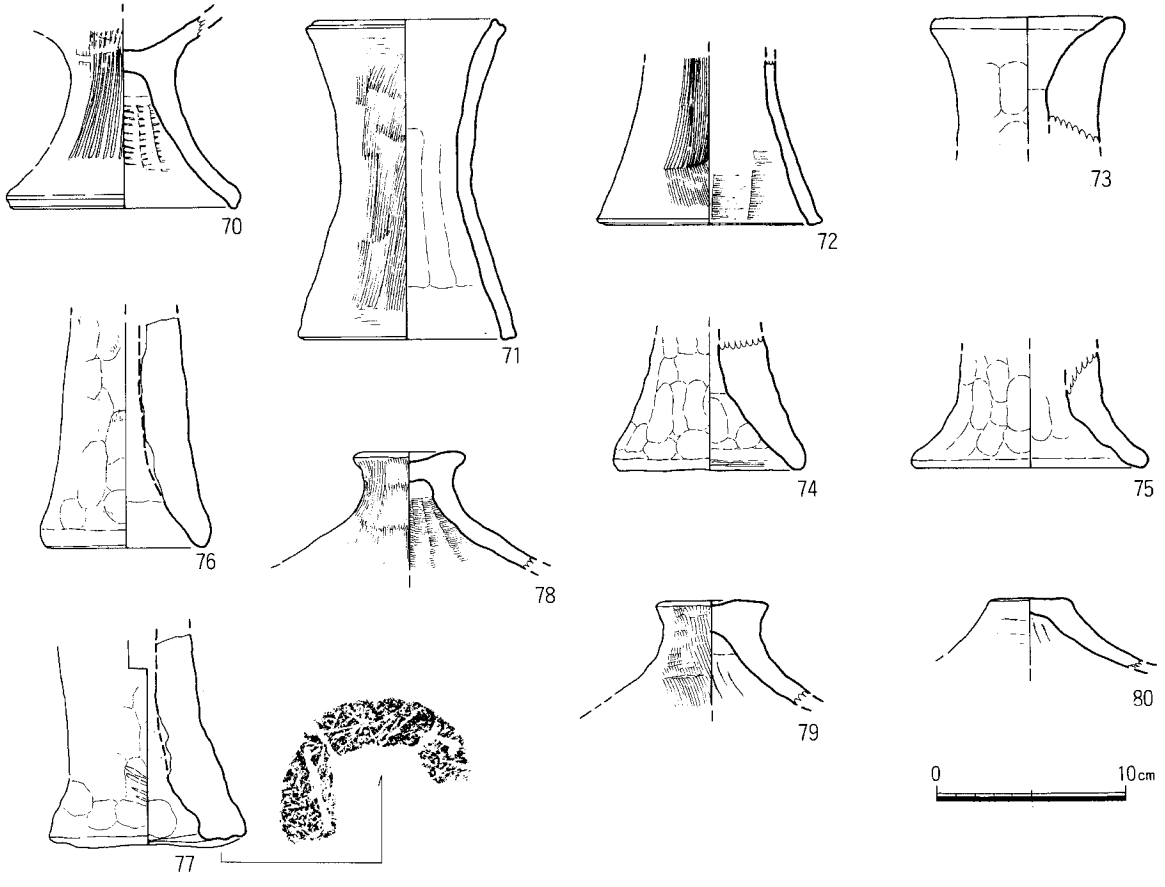


Fig. 16 包含層出土遺物４（1/4）

色、54はにぶい橙色。胎土は52が精良、53が細砂粒を含むが精良、54は細砂粒を多く含む。55は1/4片で、復元口径29.4cm、器高25.9cmを測る。口縁はく字状を呈し、やや内湾する。外面は磨滅するがタテ刷毛、内面は撫で、下半に指押さえ痕が残る。色調は灰褐色、胎土は砂粒を多く含む。56・57は逆Ｌ字形の口縁を持ち、57は口縁下に１条の三角突帯を持つ。56は2/3片でやや歪むが口径32.4cmを測る。外面はタテ刷毛、口縁部内外はヨコ撫で、その他は撫で。57は1/4片で復元口径28.4cmを測る外面はタテ刷毛、口縁部はヨコ刷毛、その他は撫で。色調は56が黄橙色、57が橙色。胎土は56が砂粒を少量、57が多く含む。58は1/6片で、復元口径30.2cmを測る。外面タテ刷毛、内面は撫で。外面黒斑がある。色調は橙色、胎土は砂粒を多く含む。59～64は底部片。59は胴部1/4片で復元胴径26.2cmを測る。外面はタテ刷毛を撫で消し、内面は磨滅するが撫で、内底に指押さえ痕が残る。色調は橙色、胎土は精良で金雲母を少量含む。60は1/2片で復元底径8.8cm、外面は粗いタテ刷毛、内面は剝離、磨滅がひどく調整は不明。61は夜臼式土器の鉢か、やや歪むが底径8.7cmを測る。内外面撫で、底部には指押さえ痕が残る。外底部は雑な撫で。色調はいずれもにぶい橙色、胎土はいずれも石英・長石粒子を多く含む。62～64も底部片。62は1/2片、外面はタテの粗い刷毛、内面は撫でで工具痕跡が残る。底部は丁寧な撫で。63は1/2片。外面はやや磨滅するが細かい撫で、底部は撫でで煤が付着する。64は外面タテのヘラ撫で、内面は撫でで指押さえ痕が残る。色調はいずれもにぶい黄橙色、胎土は62・63が石英・長石粒子を多く含み、64は精良である。焼成は64が良好。65・66は鉢で、65は復元完形。口径12.4cm、器高9.3cmを測る。外面粗いタテ刷毛、口縁はヨコ撫で、その他は撫で。色調は橙色、胎土は石英・長石粒

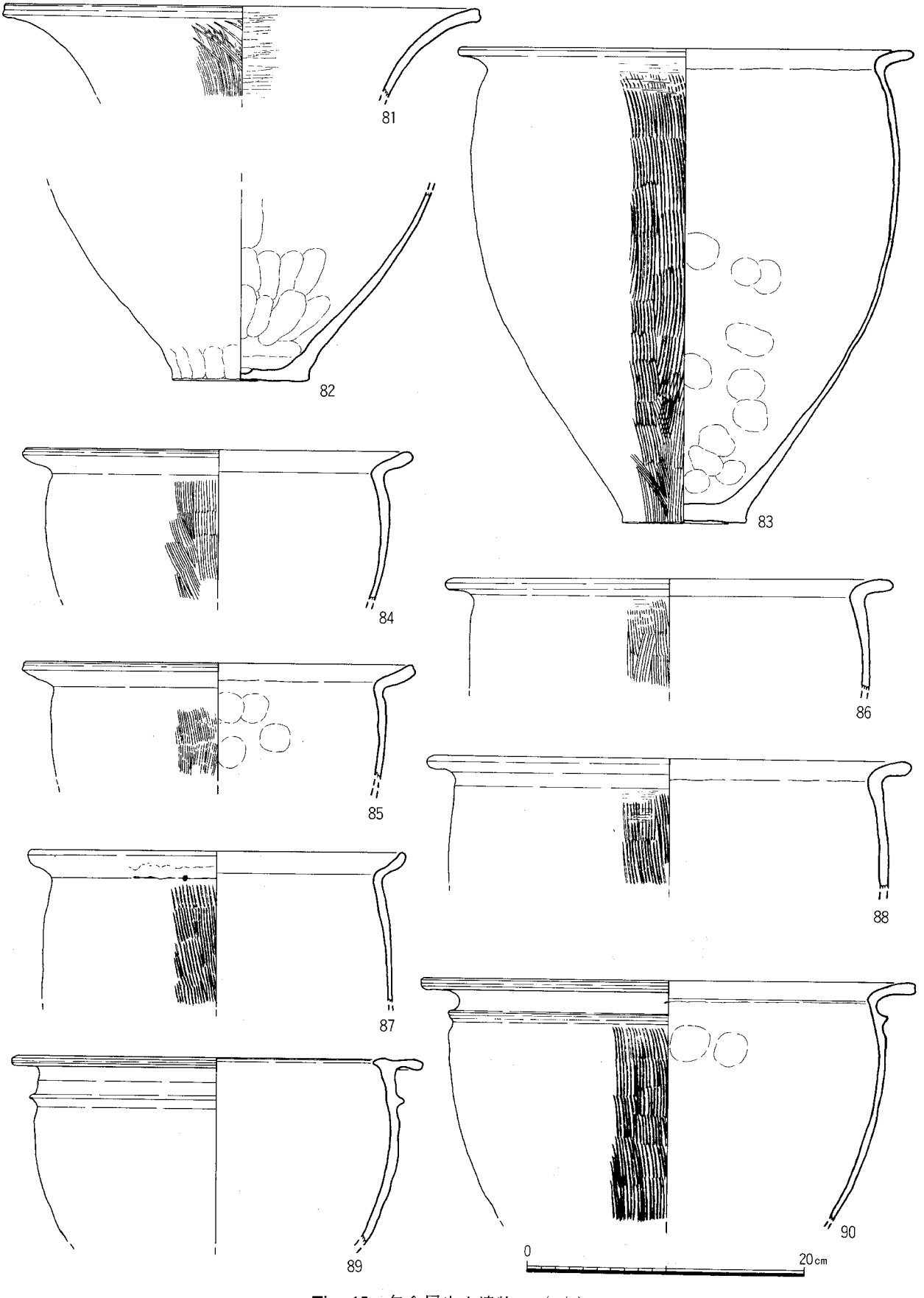


Fig. 17　包含層出土遺物5（1/4）

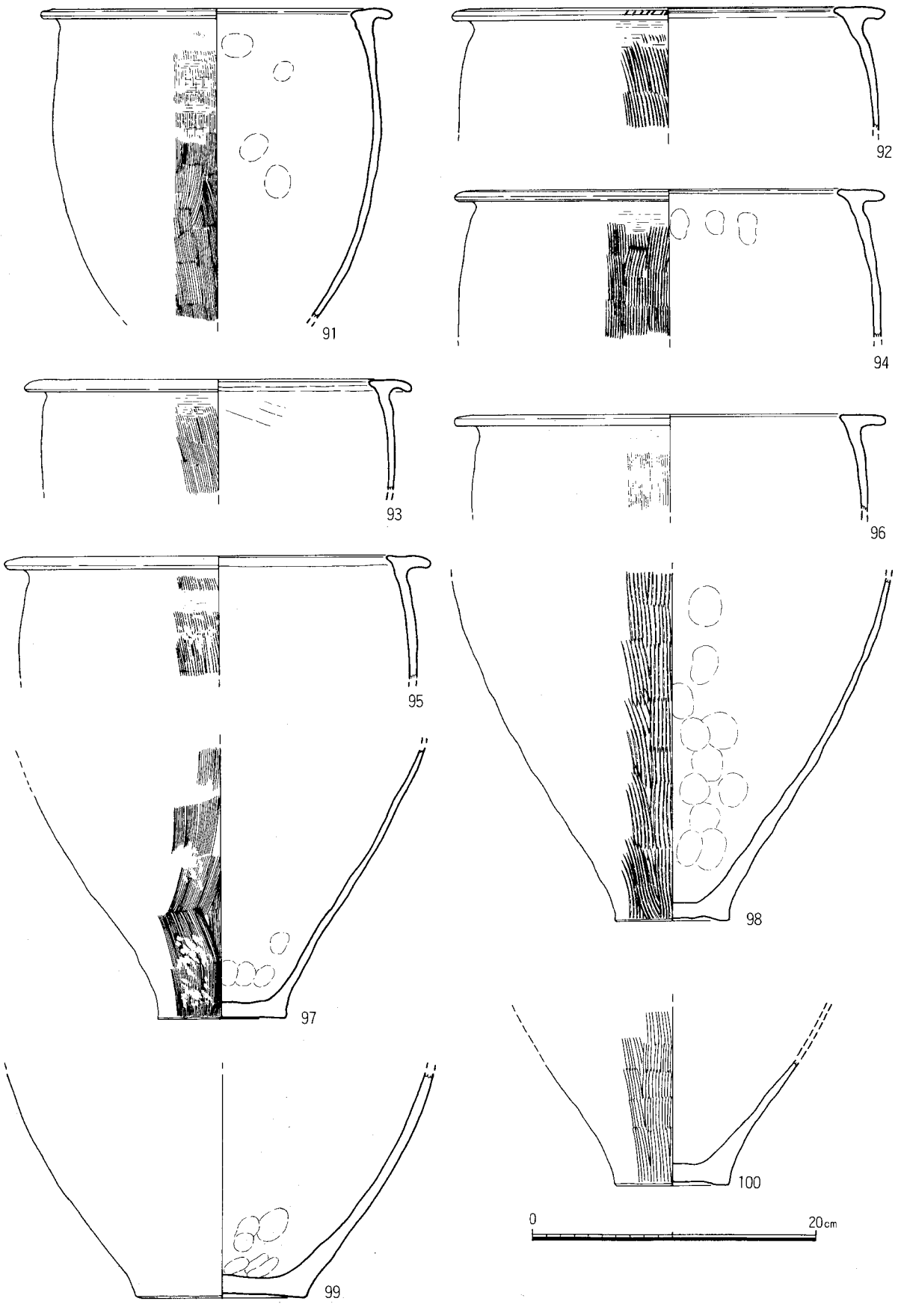


Fig. 18　包含層出土遺物６（1/4）

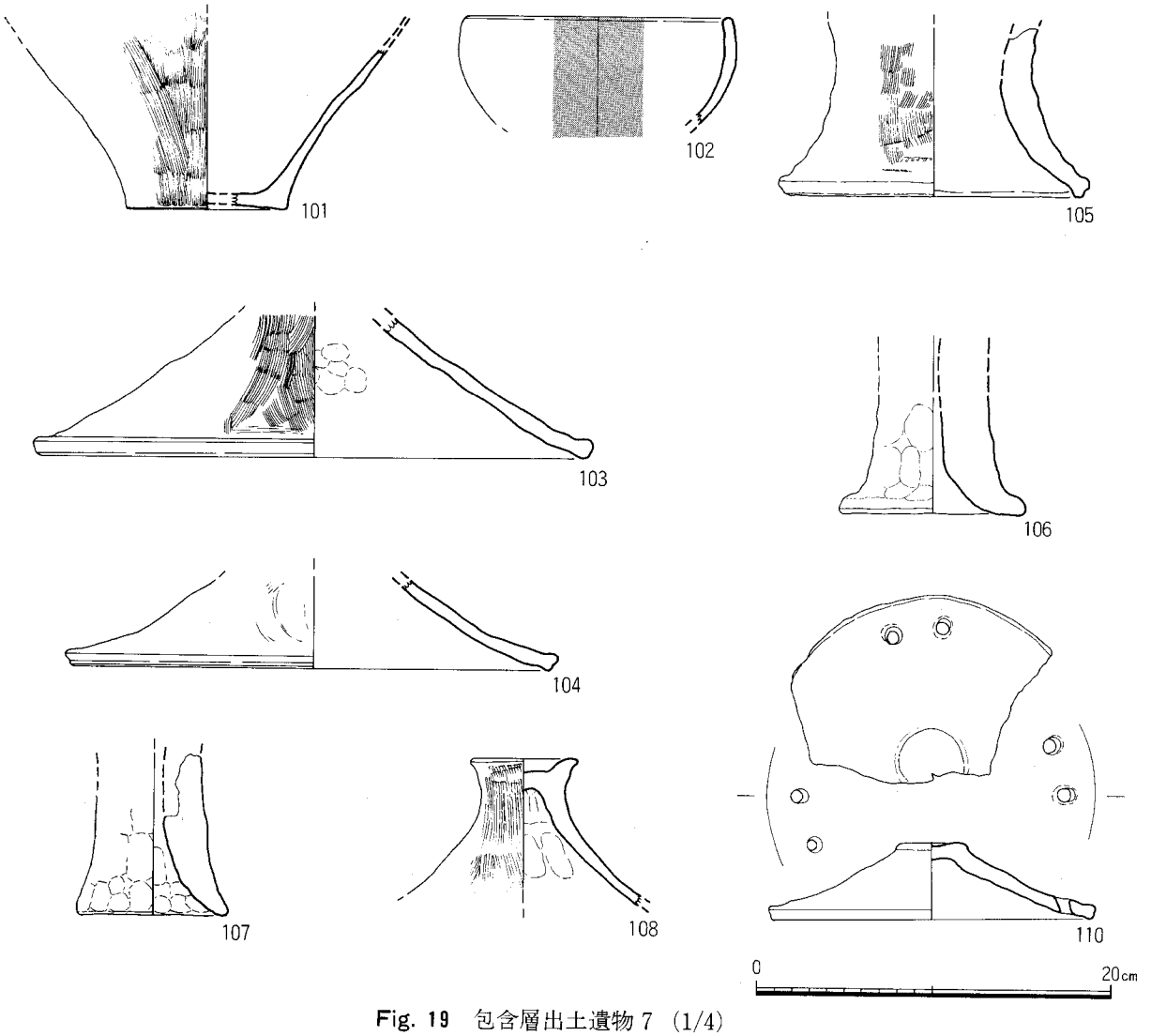


Fig. 19 包含層出土遺物７（1/4）

子を多く含む。66は口縁1/4片。復元口径20.8cmを測る。全体に磨滅するが外面下半はタテ刷毛のち撫で、内外指押さえ痕が残る。67～70は高坏。67は鋤先状口縁をもつものの1/4片。復元口径は67が23.2cmを測る。内外面丹塗り、外面に刷毛目が残る。68は1/2片で復元口径25.0cm測る。磨滅がかなりひどいが丹塗り。脚部はさし込み式である。69は脚部1/2片、復元脚径16.8cmを測る。外面は丹塗りでヘラ研磨、内面は撫ででしぼり痕が残るが、赤色顔料が付着する。色調は橙色、胎土は精良。70は脚部1/4片。復元脚径12.4cmを測る。外面はタテ刷毛、内面はヨコ刷毛と撫で。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。71～76は器台、器壁が薄く、くびれ部を中央に持つもの71･72（Ⅰ類）、器壁が厚く指押さえ痕を内外面に残し、くびれ部も中央にないもの73～76（Ⅱ類）に分かれる。71は1/2片で復元口径10.6cm、器高17.0cm、復元脚径11.6cmを測る。外面はナナメとタテ刷毛、内面しぼり痕が残る。72は脚部片で復元脚端径12.0cmを測る。外面から脚部内面は刷毛、内面は丁寧な撫で。脚部端部には工具痕が残る。色調は71は浅黄色、72はにぶい橙色。胎土は71・72いずれも精良。73～76はⅡ類。73は口縁部1/2片で、復元口径10.4cmを測る。74･75は脚部1/2片･1/3片で復元脚径は10.2cm、12.6cmを測る。脚部内面には刷毛がかすかに残る。76も脚部1/2片で復元脚径9.0cmを測る。比較的細身の器形で、支脚の可能性もある。外面刷毛目が残る。色調は73～75が橙色、76は黄橙色を呈し、胎土は

73・74・76が精良、75が細砂粒を多く含む。77はとび口状の支脚の脚部片。手づくねで内外面指押さえ痕が残る。内面剥落がある。脚端部は平坦で圧痕が残る。色調はくすんだ橙色、胎土は砂粒を多く含む。78～80は蓋。78･79は天井に撮み状のくびれを持つもの。78は1/2片。いずれも外面は刷毛、内面は78がヨコ刷毛、79が撫ででヘラ状工具の痕跡が残る。80は平坦な天井部のもの。磨滅がひどいが内外面は撫で。色調は78が黄橙色、79・80がにぶい橙色。胎土は78～80まで精良。

81～109は第５～７層（包含層下層）出土ですべて弥生土器。81・82は壺。81は口縁部1/6片。復元口径34.0cmを測る。口端部は浅い凹線が巡り、内外面ヘラ撫でで丹塗り、外面ヘラによる暗文が入る。82は底部片で、復元底径13.8cmを測る。磨滅がひどく外面は調整不明だが、内面は指押さえ痕が残る。底部付近は撫で。外面には黒斑がある。色調は81が赤褐色、82が橙色。胎土は81が最大６㎜の粗砂粒を含み、82が精良。83～101は甕。83～88はく字状の口縁部を持つもの。83は1/2片。復元口径33.0cm、器高34.3cmを測る。調整は外面が胴部がタテ・ナナメの刷毛、口縁部内外面はヨコ撫で、胴部内面はヨコ・ナナメの撫でで、指押さえ痕が残る。底部はやや上げ底で撫で。色調はやや暗い橙色。胎土は最大５㎜の粗砂粒を多く含む。84は1/6片で、復元口径28.0cm。全体に磨滅するが、外面はタテの粗い刷毛、内面は撫で。85は1/4片で、復元口径28.2cmを測る。口端部には浅く凹線が巡る。内外面磨滅するが、外面はタテ刷毛が残り、内面は指押さえ痕が残る。86は1/4片で、復元口径34.8cmを測る。外面はやや磨滅するが胴部はタテ刷毛、頸部は刷毛のち撫で、口縁部はヨコ撫で、胴内面は撫で。87は1/6片で、復元口径27.0cmを測る。口縁部はやや内湾する。全体にやや磨滅するが、外面はタテ刷毛、内面は撫で。口縁と頸部の境には粘土の接合痕が残る。88はやや外湾気味の1/4片。復元口径32.2cmを測る。外面はタテ刷毛、口縁部はヨコ撫で、内面は丁寧な撫で。色調は84がにぶい橙色、85が淡橙色、86がにぶい黄橙色、87が橙色、88が明赤褐色である。胎土は84が金雲母片を含むが精良、85が細砂粒を含む。86～88は砂粒を多く含む。89・90は頸部に１条の三角形の突帯を持つもの。89は口縁部は鋤先状を呈する4/5片で、口径29.6cmを測る。胴部内外面は撫で、口縁から頸部にかけてはヨコ撫で。90はく字状に外湾する1/6片で、復元口径35.6cmを測る。胴部外面は磨滅がひどいが粗いタテ刷毛、口縁部はヨコ撫で、胴部内面は丁寧な撫で。色調は89が灰白色、90が橙色。胎土は89・90とも細砂粒を少量含む。91～96は逆Ｌ字または鋤先状を呈す口縁部のものである。91は1/2片で、復元口径24.6cmを測る。口縁部はやや内傾する。胴部外面はタテ・ナナメの刷毛、胴部上半は刷毛のちヨコ撫で、口縁部はヨコ撫で、胴内面は丁寧な撫でで指押さえ痕が残る。外面黒斑があり、黒塗りの可能性がある。92は小片で、口縁はやや歪むが、復元口径30.5cmを測る。全体に磨滅するが、胴部外面はタテ刷毛、上半はヨコ撫で、口縁部はヨコ撫で、内面は撫で。口端部には１部に７個のナナメの刻み目が入る。93は口端部が下にややさがる口縁部片で、口径27.5cmを測る。胴部外面はナナメの刷毛で上半は撫で消す。口縁部はヨコ撫で、胴内面は上半ナナメの撫で、下半は丁寧な撫で。94は1/2片で復元口径30.4cmを測る。胴部外面は丁寧なタテ刷毛、上半は刷毛のち撫で、口縁部はヨコ撫で、内面は撫でで指押さえ痕が残る。95は1/3片で、復元口径は30.5cmを測る。外面は磨滅するが胴部はタテ刷毛、口縁部内外はヨコ撫で、内面は撫で。96は1/3片で、復元口径は30.2cmを測る。口縁部はやや下傾する。胴部外面はやや磨滅するがタテ刷毛、上半は撫で消す。口縁内外はヨコ撫で、胴内面は撫で。胴部外面に黒斑がある。色調は91はにぶい橙色から黒褐色、92は黄灰褐色、93は煤がつくがにぶい、94はくすんだ橙色、95はにぶい橙色、96は橙色。胎土は91が細砂粒で金雲母を多く含み、92・93は砂粒を多く含み、94・96は砂粒をやや含み、95は細砂粒を含むが精良。97～101は底部。97底径9.1cmを測る。底部はわずかに上げ底。胴部外面は磨滅がひどいが細かいタテ刷毛、内面は撫で、内底近くは指押さえ痕が残る。外底は雑な撫で。98は胴底部1/2片で、復元底径8.0cmを測る。胴外部は粗いタテ･ナナメの刷毛、

内面は撫でで粘土帯接合の為の指押さえ痕が残る。外底部はやや上げ底で撫で。99は広めの底部1/2片、復元底径12.2cmを測る。やや磨滅するが、胴部外面は丁寧な撫で、内面は撫でで指押さえ痕が残る。外底部は丁寧な撫でだが周縁は磨滅する。100は1/2片、復元底径8.0cmを測る。胴部外面は細かい丁寧なタテ刷毛、内面は煮炊きによるものか、器壁の剝落が著しく調整は不明。外底はやや丁寧な撫で。101は1/2片で、復元底径8.9cmを測る。底部はやや上げ底。内外面やや磨滅するが、外面は細かい丁寧なタテ・ナナメの刷毛、内面は撫で。外底は丁寧な撫で。色調は97はにぶい黄橙色、98・100はにぶい橙色、99・101は橙色。胎土は97・98は粗砂粒を含み、99は精良、100・101は砂粒を多く含む。焼成は97・99が良好。102は椀形の鉢1/4片で、復元口径15.2cmを測る。内外面磨滅がひどいが丹塗りでヘラ研磨。色調は赤褐色、胎土は砂粒を少し含む。103・104は高坏の脚部。いずれも外へ大きく開く器形。103は1/2片で、復元脚径31.5cmを測る。外面細かいナナメ・タテの刷毛、内面は撫でで指押さえ痕が残る。脚部端部はヨコ撫で。104は1/3片で、脚径27.7cmを測る。外面は撫でのち不整方向の刷毛、脚裾周辺はヨコ撫で。内面は丁寧な撫で。色調はにぶい橙色で赤色顔料が残る。103・104とも橙色。胎土は精良で金雲母をやや含む。105～107は器台の脚部。105は1/2片、復元脚径17.4cmを測る。外面は細かいタテ刷毛のち撫で消しで工具痕が残り、脚部周辺はヨコ撫で、内面は撫で。脚部近くに黒斑がある。上下逆の可能性もある。106・107は脚部がわずかに外反し、筒部が直立する細身のもの。106は1/2片で、ややいびつだが脚径は推定で10.6cm位。磨滅するが指押さえ仕上げ、107はいびつだが脚径は8.2～8.4cm位。指押さえ仕上げ。重くどっしりしている。色調は105がにぶい赤褐色、106・107がにぶい橙色。胎土は105が砂粒を多く含み、106は少量含む。107は精良。108・109は蓋。108は天井部周辺はくびれ、天井は内窪み丁寧な撫で。外面はタテ刷毛、内面は撫で、指押さえ痕が残る。109は1/3片、復元口径18.6cmを測る。天井部は平坦で内外面は磨滅するが撫で、周縁部に2ヵ所1対の紐通し孔がある。色調は108は橙色から黒褐色、109はにぶい黄橙色。胎土は108は精良、109は砂粒を多く含む。

土器群（Fig.20、PL. 10・11）

包含層内、台地縁辺から2m程内側で検出したものである。小片は調査時にはずして掘り下げを行った為、出土状況を厳密に表したものではないが、大まか4つのグループを見出すことが出来た。時期差を示すものかも知れない。出土した遺物は土器がほとんどで、甕、壺、高坏、鉢、器台などのすべての器種を含み、完形の小型のミニチュア土器や丹塗り土器など祭祀的遺物も多く、祭祀遺構の可能性もある。一応南側から図（Fig.20）のようにA～D群に分けて説明を行う。

出土遺物（Fig.21～35、PL. 13～17）　110～124は上面で出土した土器で土器群の遺物と接合するものもある。

110～117は古墳時代のもので、110は椀形の鉢でやや歪むが完形。口径13.8cm、器高5.5cmを測る。外面ヨコ・ナナメの粗い刷毛のち撫で、内面はナナメの撫でで指押さえ痕が残る。色調は橙色、胎土は細砂粒を多く含む。111～115は高坏で5世紀前半代のもの。113を除いて、坏部片。111は口径14.1cmを測る。外面はタテ・ナナメの刷毛。その他は撫でとヨコ撫で。112は2/3片で、復元口径17.0cmを測る。全体に磨滅がひどいが、底部との境は刷毛がわずかに残る。113は脚部1/2片で、復元脚径12.2cmを測る。内外面撫で。114は1/4片、復元口径15.6cmを測る。坏部の深い形態である。全体に磨滅するが、外面はナナメの刷毛、内面は撫でで指押さえ痕が残る。115は1/6片、復元口径15.8cmを測る。全体に磨滅がひどく調整不明。色調は111・113・114は橙色、112は灰黄色、115はにぶい橙色を呈し、胎土は113が精良のほかは、111・115が砂粒を多く含み、112・114が少量含む。116は朝鮮系軟質土器の胴部小片で器形ははっきりしない。外面格子目の叩き、内面はヘラ削り。色調はくすんだ橙色、胎

1．第147次調査

Fig. 20 土器群出土状況図（1/40）

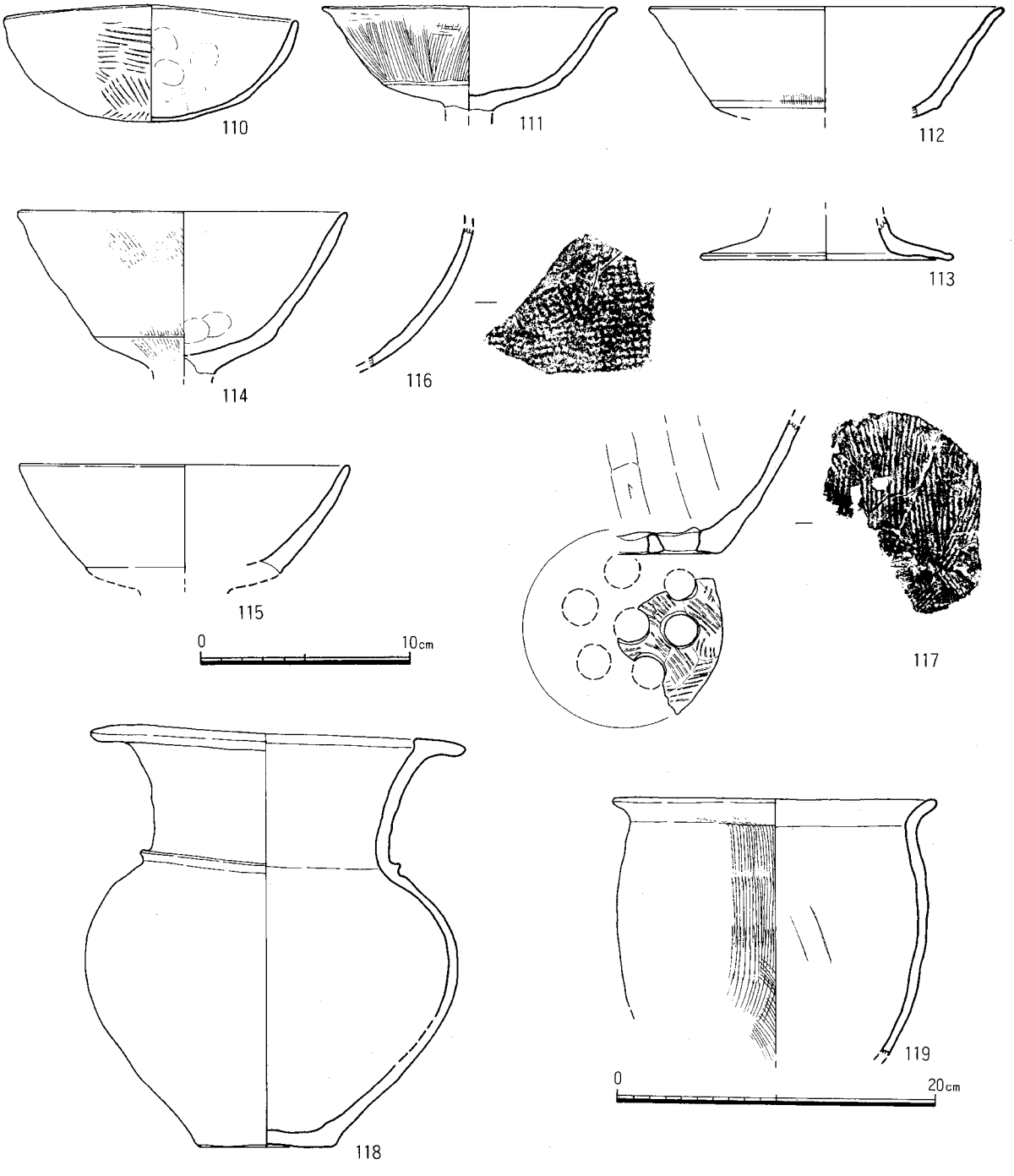


Fig. 21　土器群上面出土遺物１（1/3・1/4）

土は細砂粒を含む。117は土師器か軟質土器の甑の底部小片。底部に７個の蒸気孔がある。胴部外面は粗い平行叩き、内面はヘラ削り。色調は黒色から黒褐色を呈し、胎土は細砂粒を少し含む。焼成は良い。118･119は弥生土器。118は口縁部を少し欠失するが、ほぼ完形。口径23.5cm、器高26.5cm、最大胴径23.4cmを測る。口縁は鋤先状を呈し、頸部に１条の突帯が巡る。全体に磨滅する撫で。胴部上半に黒斑がある。色調はにぶい橙色、胎土に石英・長石の粗粒を多く含む。119は1/2片。口径20.3cmを

測る。口縁部はく字状を呈し、胴外面は粗いタテ・ナナメの刷毛、内面は撫でで工具痕が残る。色調はにぶい橙色、胎土は精良。

120～124はＢ群、124はＡ群に所属する。120はミニチュア土器で1/2片。口径12、8cm.器高９.7cmを測る。器壁は全体に磨滅が著しいが、外面はタテ刷毛、内面は撫でで指押さえ痕が残る。121～123はく字状を呈す甕。121は復元完形で、口縁はやや内湾する。口径22.1cm、器高22.7cmを測る。やや磨滅するが、外面は粗いタテ刷毛、内面は撫で。122は2/3片で、胴部は丸みを持ち、底部は大きく凸レンズ状を呈す。外面はタテ・ナナメの刷毛、内面は撫で指押さえ痕が明瞭に残る。底部には籾痕らしきものが残る。124は1/2片の復元完形で、細長い形態。口径19.8cm、器高27.4cmを測る。全体に磨滅が著しく、外面にはタテ方向の粗い刷毛がかすかに残り、内面は撫で。外面には部分的に煤が付着する。124は高坏1/2片で、口径23.8cm、器高23、1cm、復元脚端径16.7cmを測る。坏部内外面と脚外面はヘラ研磨、内面は撫ででしぼり痕が残る。色調は120・122・124は橙色。121は橙色から黒褐色、123はにぶい橙色。胎土は120は精良、その他は砂粒を多く含む。

125～188はＡ群出土のもの。いずれも弥生土器。125～139は壺。125～128は短頸壺で、いずれも胴部外面はヘラ研磨、内面は撫でで指押さえ痕が残っている。底部は上げ底で撫で。125は1/2片で、口縁部が一部剥落する。復元口径11.2cm、復元器高９.3cm、最大胴径12.9cm、底径5.4cmを測る。126は一部欠損し、やや歪むがほぼ完形。口径15.0cm、器高14.2cm、最大胴径18.0cm、底径8.2cmを測る。胴部外面と内面上半は丹塗りである。底部は雑な撫で。127は口縁部を1/2欠失するがほぼ完形。口径19.0cm、器高16.8cm、最大胴径20.6cm、底径7.0cmを測る。口縁部はヨコ撫でで、２個一対の円孔がある。胴部外面には黒斑がある。128は口縁1/2片で復元口径13.8cmを測る。口縁部に２個一対の円孔がある。色調は125が赤褐色、126・127は橙色、128は赤褐色を呈す。胎土は125・126・128は精良。127は砂粒をやや含む。129は口縁が直立しわずかに外へ開く直口壺1/2片。復元口径10.5cm、復元胴部最大径16.6cmを測る。外面は丁寧な撫で、内面は撫でで指押さえ痕が残る。外面は黒斑がある。色調はにぶい橙色、胎土に砂粒を多く含む。130は小型壺の胴底部で底径7.2cm、最大胴径10.6cm、残存高14.3cmを測る。胴部中央には１条の突帯が巡る。外面は胴部上半が撫で、下半が刷毛のちタテ撫で、内面は撫でで指押さえ痕が残る。色調は橙色、胎土は細砂粒を少し含むが精良。131は鋤先状口縁の3/4片。口径17.8cmを測る。内外面撫で。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は精良。132は口縁部を欠失するが、大きく開く形態のもの。胴部中央と上半に２条の三角突帯が巡り、中央の突帯には幅広い刻み目がある。底部は高台状を呈す上げ底である。内外撫で調整で、外面胴部上半は丁寧な撫で、底部近くはタテのヘラ撫で。外面には黒斑がある。133は132と同形態と思われるが、口頸部を欠失する。復元底径4.6cm、最大胴径25.4cmを測る。胴部上半に最大径を持ち、断面M字の突帯が付く。外面は丹塗りで頸部にヘラ又は櫛状工具による暗文を施し、胴部はヨコ撫でかヘラ研磨。内面は頸部まで丹塗り、胴部は撫で。134は扁球状を呈す胴部片。胴部上半に２条のM字の突帯が付く。外面ヨコ撫で、内面は撫で。135は胴部1/3片で、肩が張る形態で131などと同じ形態か。胴部外面と頸部内面丹塗りヨコヘラ研磨、胴部内面は撫でで肩部内面はヘラ撫でで工具痕が残る。色調は132・135が赤褐色、133は灰黄色、134はにぶい橙色を呈し、胎土は133が精良、136･137は大型の壺の鋤先状を呈す口縁部片である。復元口径は136は66cm、137は42.4cmを測る。口端部には刻み目が入る。136の外面はヨコ撫でのちタテ刷毛、その他はヨコ撫でで工具痕が残る。口縁部には黒斑がある。137は丁寧な撫で、頸部下半はタテ刷毛のちヨコ撫で。色調は136が黄橙色、137はにぶい橙色、胎土は136は精良、137は石英・長石の細粒を少量含む。138・139は底部片。138はやや上げ底で、調整は丁寧な撫で、13９は1/2片で撫で調整、内面に指押さえ痕が残る。色調は138が黄橙色、139はくすんだ橙色を呈し、133・139の胎土は石英・長石の粗

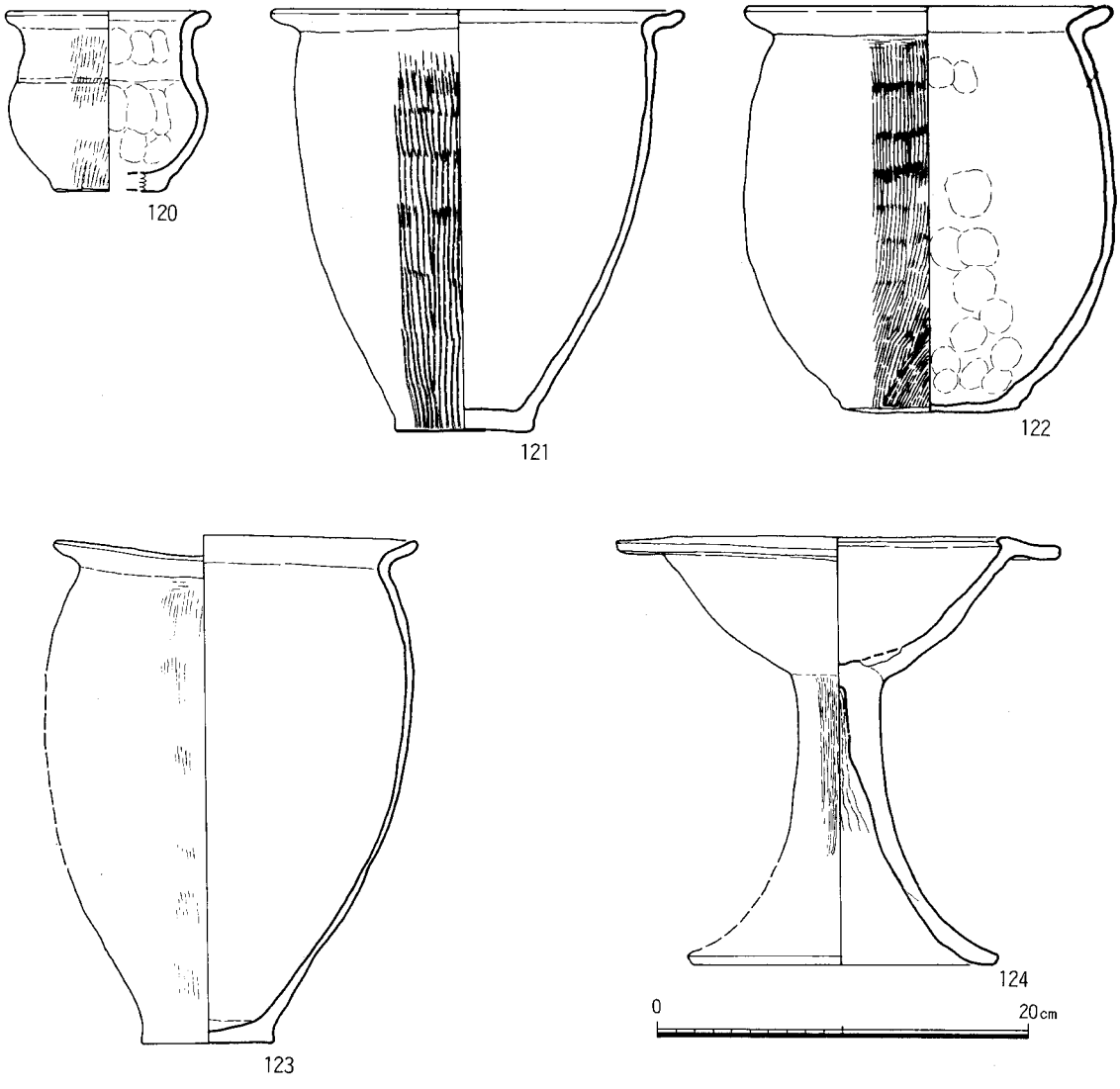


Fig. 22　土器群上面出土遺物２（1/4）

粒を多く含み、138は粗砂を多く含み、重量感がある。140～173は甕である。140は小型の甕1/2片。復元口径12.8cm、器高13.3cmを測る。胴部外面粗いタテ刷毛、内面は撫でで工具痕が残る。底部は上げ底気味で雑な撫で。色調は灰褐色、胎土に石英長石の粗砂粒を多く含む。141～161は口縁部から胴部片で、口縁部の頸部がやや締まり、逆Ｌ字又は鋤先状を呈す。口縁の形態から３類に分類する。Ｉ類は口縁部が内傾するもの。II類は水平のもの。III類は外傾するものである。Ｉ類は141～145である。141は1/3片、142は1/3片、143は1/3片、144は1/3片、145は2/3片で、復元口径はそれぞれ31.6cm、28.6cm、40.5cm、30.4cm、31cmを測る。調整は外面がタテ刷毛、内面は撫で、口縁部内外はヨコ撫で。141は口縁部内面直下に粘土接合痕が残り、142は胴部外面に黒斑があり、内面に指押さえ痕が残る。143は口縁直下に１条の三角突帯が巡り、内面丁寧な撫で、144の外面は一部剝落する。色調は141・143・145がにぶい黄橙色、142が灰黄褐色、139は橙色である。胎土は141・143は精良、142・144は石英・長石粒子を多く含む。145は細砂粒を少量含む。II類は146から150まで。146は1/3から2/3片、147は底部を欠失する。148～150は1/3片。復元口径は146が29.4cm、147は29.6cm、148は31.6cm、149・150が31.0cmを測る。調整は胴部外面がタテ・ナナメの刷毛、内面は撫で、口縁部内外はヨコ撫で。146の内面

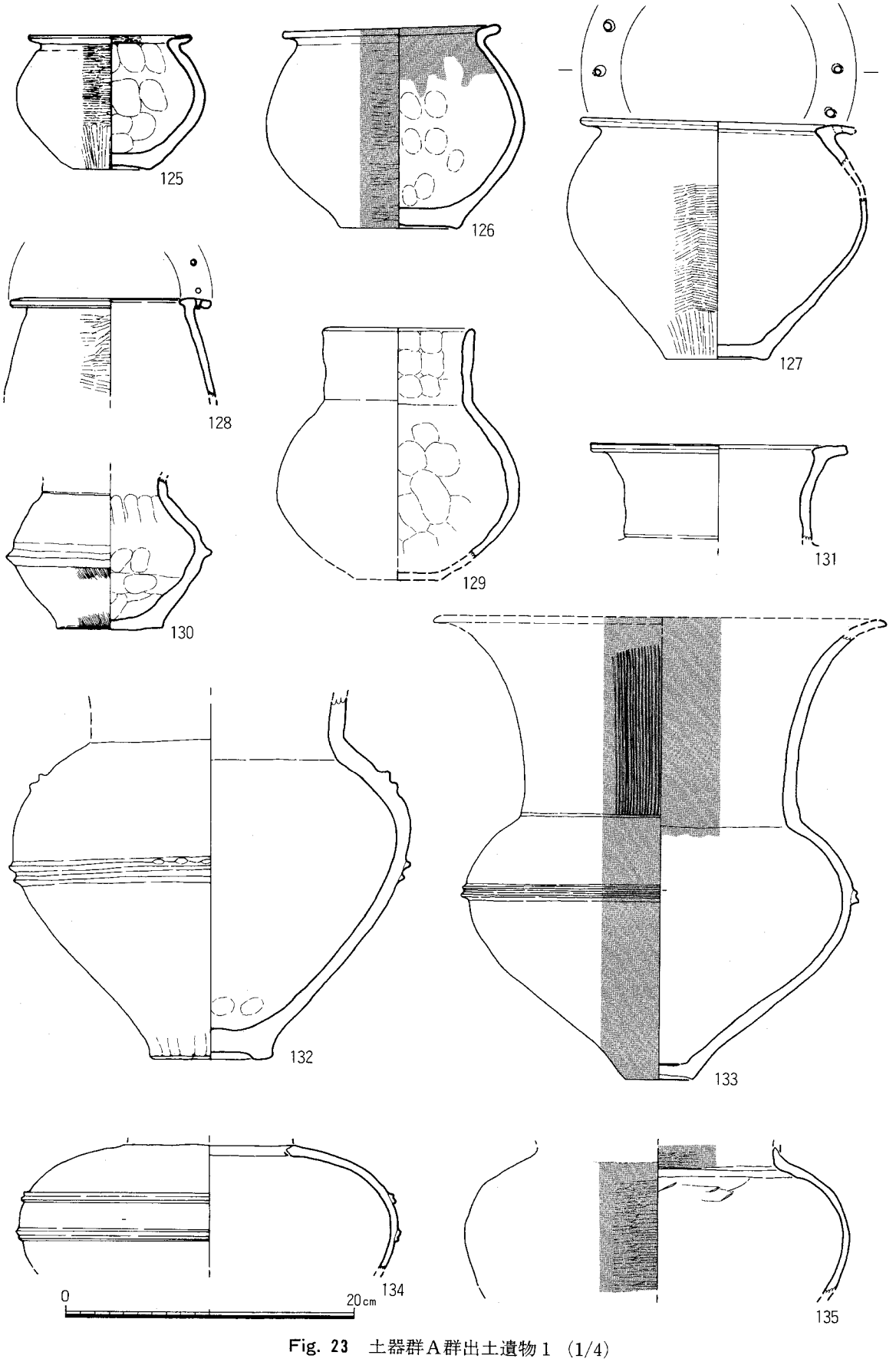


Fig. 23　土器群A群出土遺物1（1/4）

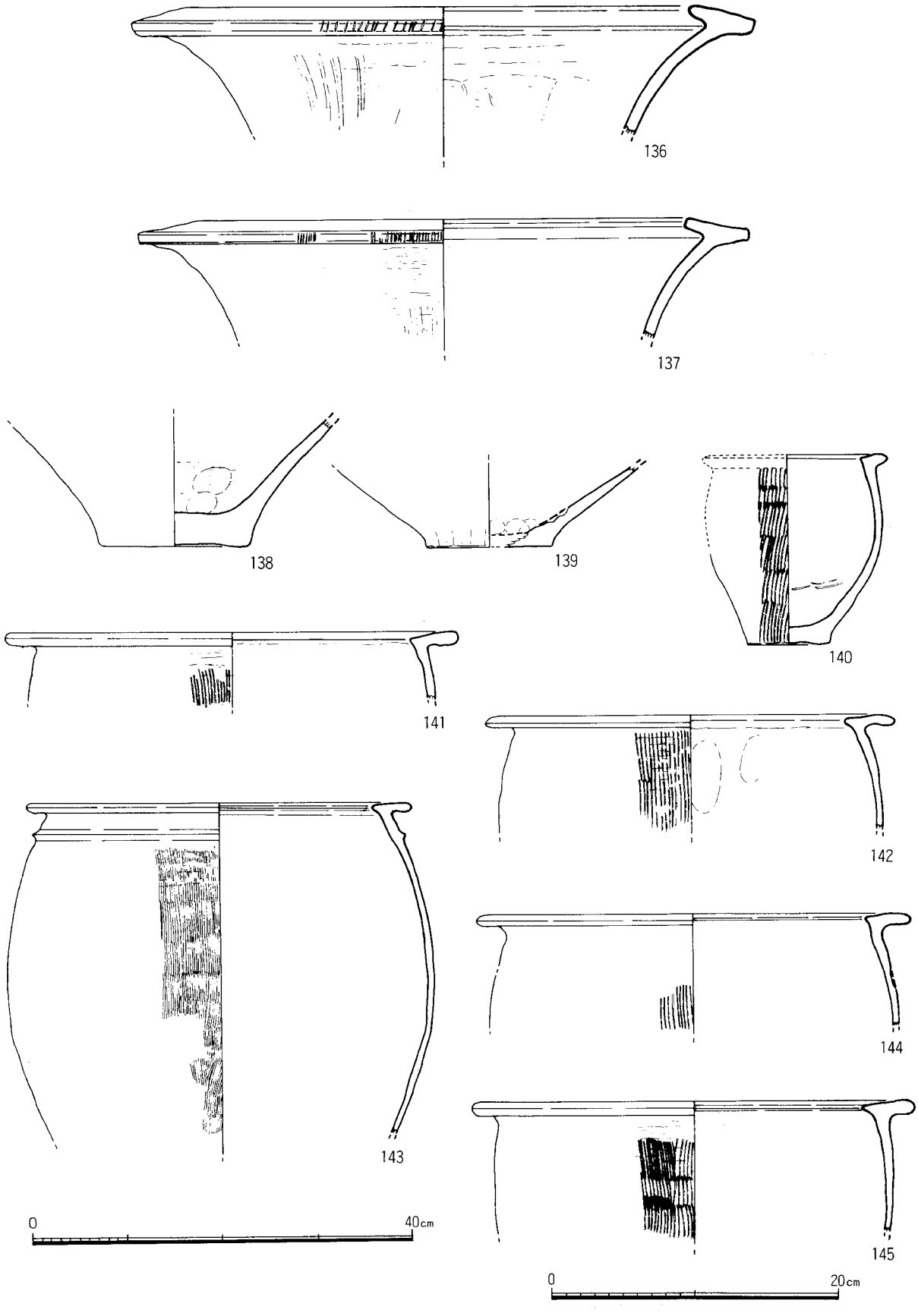


Fig. 24　土器群A群出土遺物2（1/4・1/6）

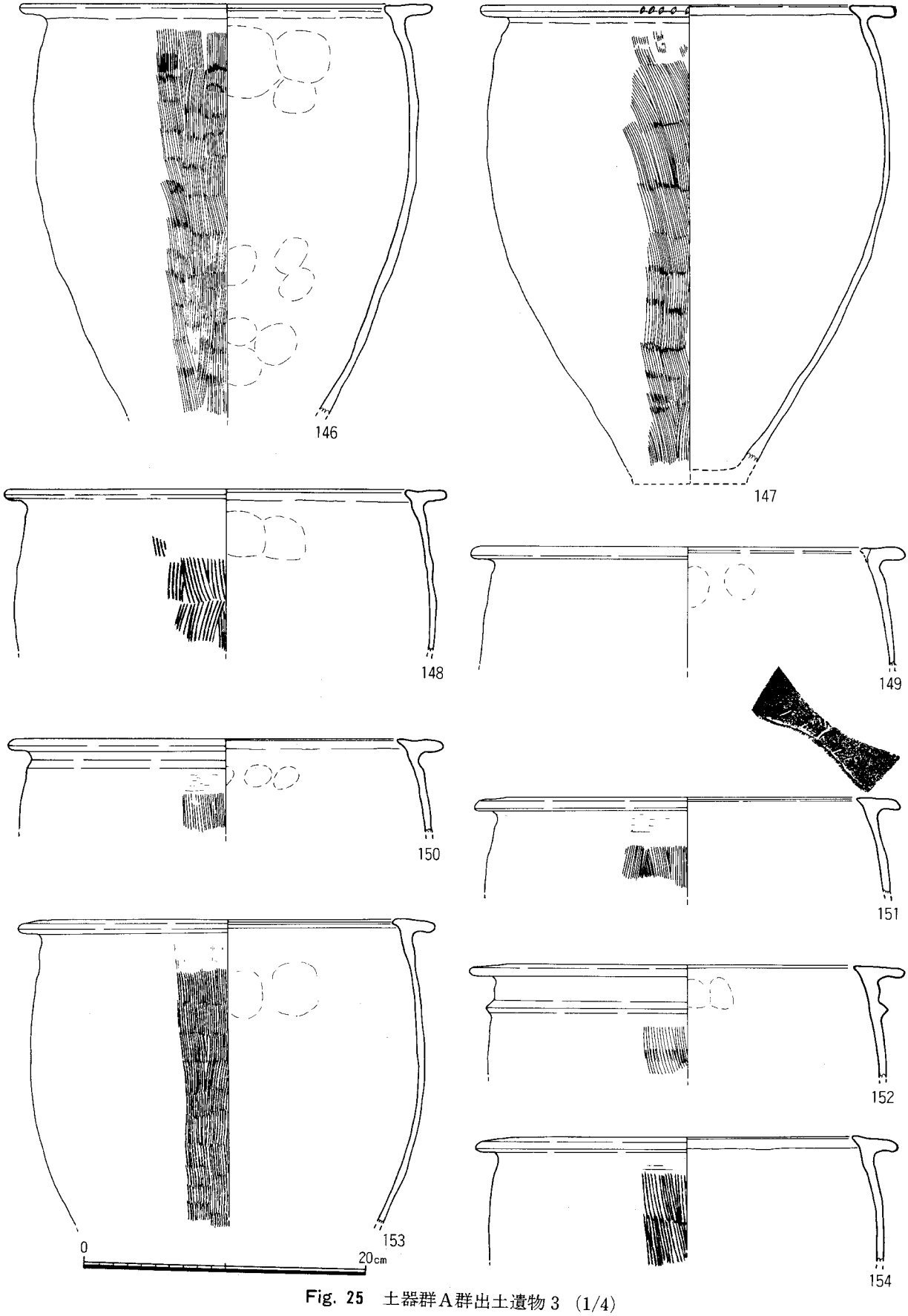


Fig. 25　土器群A群出土遺物３（1/4）

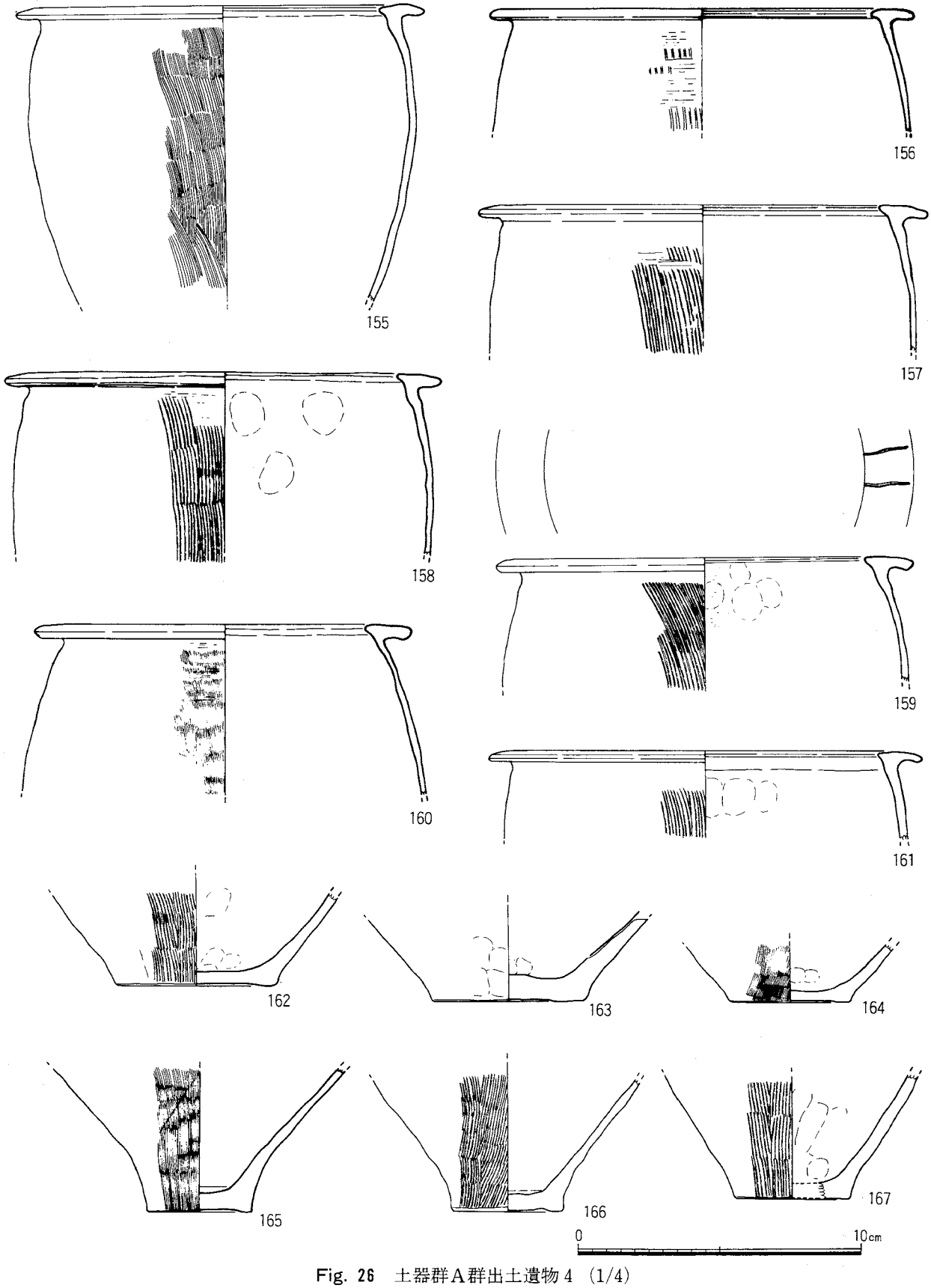


Fig. 26　土器群A群出土遺物4　(1/4)

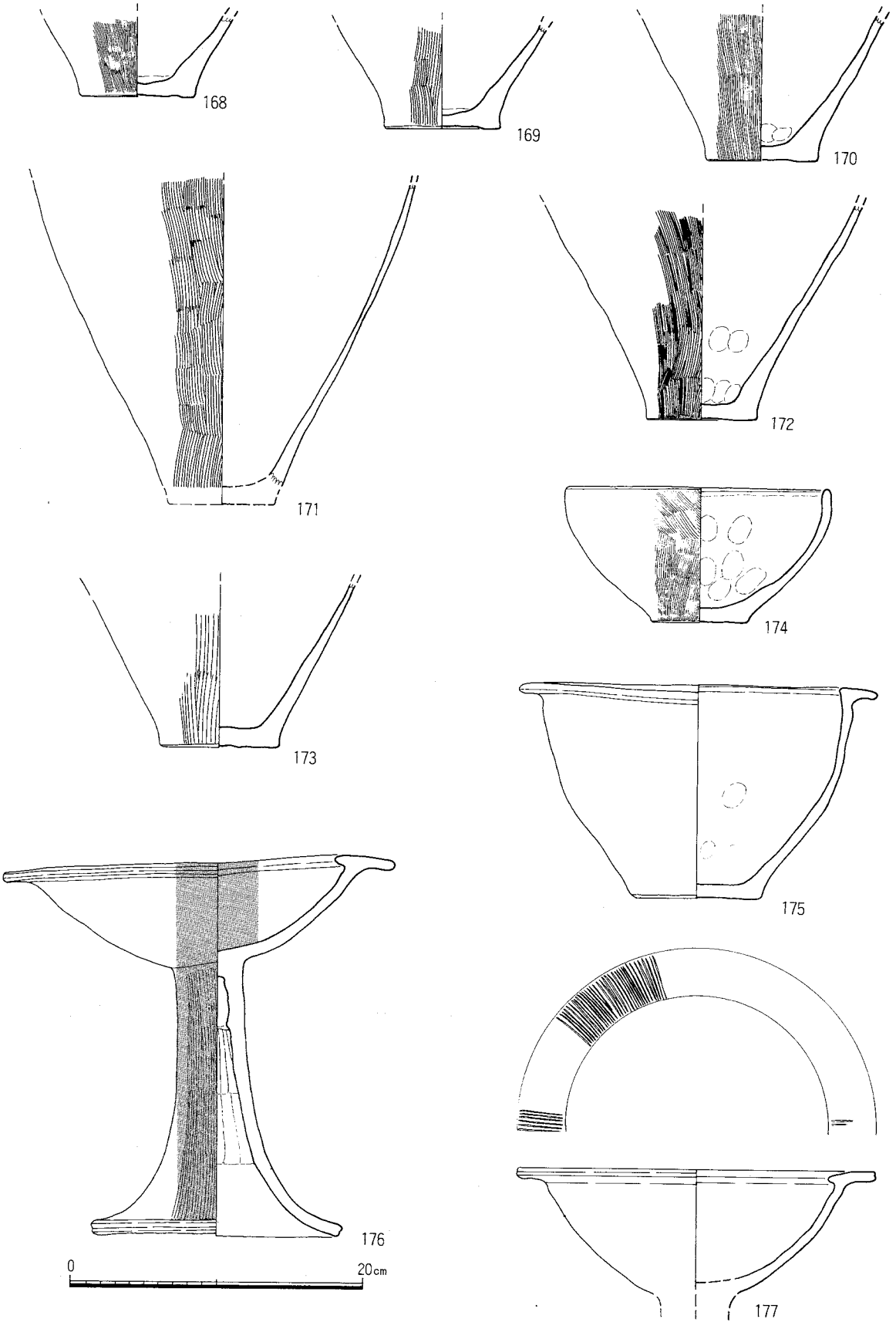


Fig. 27　土器群A群出土遺物５（1/4）

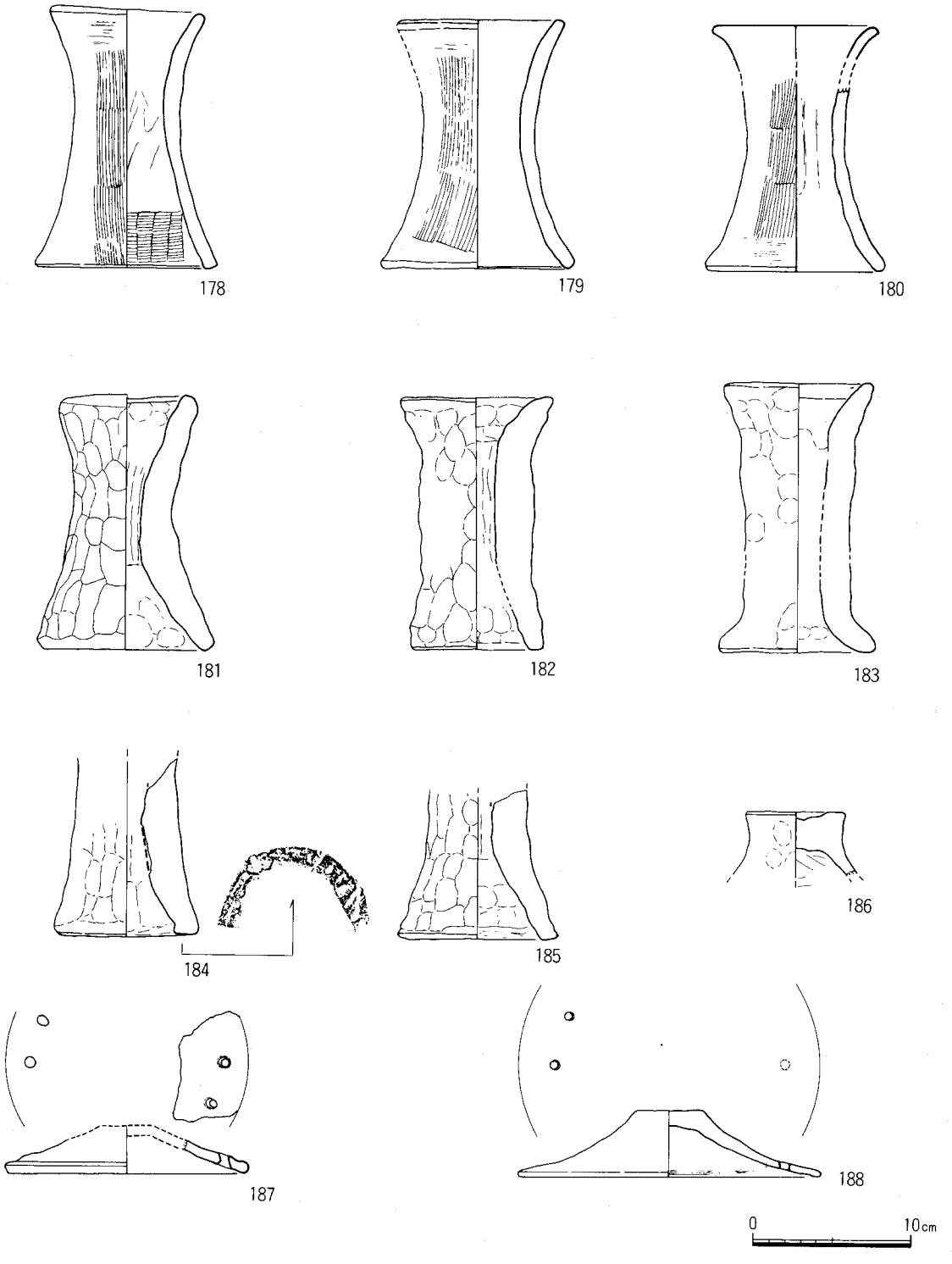


Fig. 28　土器群A群出土遺物6（1/4）

には指押さえ痕が明瞭に残り、外面は煤が付着する。147は器壁がやや磨滅し、外面に黒斑が残る。148は口縁はやや歪み磨滅がひどい。149は磨滅がひどく調整不明。150も磨滅がひどく、内面に指押さえ痕が残る。色調は146は暗褐色、147･148はにぶい橙色、149は淡橙色、150は橙色である。胎土は146･147が砂粒を多く含み、148は細砂粒を含む。149は精良。150は粗砂粒を多く含む。Ⅲ類は151～161ま

で。残存状況はそれぞれ2/3片、1/3片、1/4片、4/5片、1/4片、1/3片、4/5片、口縁部全周、2/3片、1/2片、1/3片。口径は151が30.4cm、152が復元で29.8cm、153は復元で30.8cm、154が復元で29.6cm、155は28.8cm、156は30.2cm、157は32.0cm、158は30.8cm、159は30.0cm、160は26.6cm、161は30.8cmを測る。調整は胴部外面がタテ・ナナメの刷毛、内面が撫で、口縁部はヨコ撫で。151はやや磨滅し、口縁部の平坦面に8筋の刻み目が入る。153は口縁下に1条の三角突帯が巡る。154は口縁内面上半は細かい刷毛のようなヨコ撫で。156は胴部外面上半はタテ刷毛のちヨコ撫で、口縁部には黒斑がある。157は胴部上半が刷毛のち撫で。煤が付着する。158は内面に指押さえ痕が残る。159は磨滅するが、口縁部の平坦面には2条のヘラがき沈線が残る。160は細かいタテ刷毛、161はやや磨滅するが、内面指押さえ痕が残る。色調は151は暗橙色、152は褐色、153・154は橙色、155はにぶい橙色から黒褐色、156・158・160はにぶい橙色、157は淡橙色、159・161は橙色を呈す。胎土は151～153・156・160は砂粒を多く含み、154・157・159はやや含む。155・161は精良、160・161は雲母片を含む。162～173は底部片。162・163は底部の直径が大きく、11.5cm、10.9cmで、162の外面はタテ刷毛、内面は撫で、163は内外面撫でで指押さえ痕が残り、内面は剝落する。164～172は底径が8cm前後のもので底部はわずかに上げ底気味である。外面は刷毛、内面は撫でで指押さえ痕が残るものもある。164は1/3片で、復元底径8.6cmで、外面は細かいナナメ刷毛で工具痕が残る。165は底径7.4cm、外面は細かい刷毛で工具痕が残る。166は底径7.9cm、内面は器壁の剝落が著しい。167は外面は粗い刷毛で黒斑がある。168は底径7.8cmで、外面は細かいタテ・ナナメの刷毛。169は1/2片で、復元底径8.0cm、内面は黒化し剝落が著しく、煮炊きに用いたものか。170は底径7.6cm、外面細かい刷毛、外底に楕円形状の圧痕が有る。171は底部を欠失する。全体に磨滅がひどいが、胴部は粘土帯接合時の凹凸がある。外面は粗い刷毛。172は外面は粗い刷毛で、工具痕が残る。173は内外2次的加熱を受けたのか、器壁の黒化・剝落が著しい。色調は162・167・169・173が橙色、163・168・172がにぶい橙色、164・166・170がにぶい黄橙色、165が暗褐色、171が黒褐色である。胎土は172・163・166・168～172が砂粒を多く含み、164・165・167・173は精良、162・164・167・173は雲母片を含む。174・175は鉢でいずれも完形。174は口径18.0cm、器高9.3cmを測る。外面細かいタテ刷毛、内面は撫でで指押さえ痕が残る。175は口径24.4cm、器高14.8cmを測る。内外磨滅がひどく調整は不明。色調は174がにぶい橙色、175は橙色、胎土は砂粒を含む。176・177は高坏で口縁部が鋤先状を呈す。176は口縁部1/4欠損で、口径26.9cm、器高26.5cm、脚径17.2cmを測る。坏部内外は丹塗り、脚部外面は丹塗りでヘラ研磨、内面は脚裾が撫で、その上がヘラ削り。177は坏部2/3片で、口径24.5cmを測る。内外磨滅が著しいが撫でのようで、丹塗りの可能性がある。口縁部の平坦面にはヘラによる暗文が入る。色調は176は明赤褐色、177は橙色を呈し、胎土はいずれも精良。178～185は器台。形態から2種類に分類する。Ⅰ類は器壁が比較的薄く、筒形で両側にラッパ状に開くもの。Ⅱ類は器壁は厚く手づくねで、支脚状で両端が外に開くもの。Ⅰ類は178～180で、178はほぼ完形、口径9.9cm、器高16.5cm、脚径11.4cm、179は復元口径10.5cm、器高15.6cm、脚径12.2cmを測る。180は脚部1/2片。復元脚径11.2cmを測る。外面は粗いタテ刷毛、内面は撫で、178の脚部近くは横の工具撫で。179はやや歪む。色調は178・179は橙色、180は黄橙色を呈す。胎土は178～180は雲母を含む砂粒を少量含む。Ⅱ類は181～185で181は完形で、口径8.6cm、器高16.0cm、脚径11.1cmを測る。中央部が締まる形態。182は1/2片で、口径9.4cm、器高15.8cm、脚径8.6cmを測る。183は1/2片で、復元口径9.4cm、器高16.9cm、脚径9.8cmを測る。184は脚部1/2片で復元脚径9.1cm、185は脚径10.0cmを測る。いずれも外面に指押さえ痕が明瞭に残り、内面にも指押さえ痕が残り、しぼり痕もある。184の脚部端部には植物の圧痕がある。色調は181・184がにぶい橙色、182は橙色、183・185は黄橙色を呈し、胎土は181・182は砂粒を多く含み、183～185は精良で、185は赤色粒子を含む。186～188

は蓋。天井部が中窪むもの186と平坦なもの187・188に分かれる。186は天井部片で雑な撫で、内面工具痕が残る。187・188は小型の短頸壺の蓋で2個一対の孔がある。187は1/6片で復元口径14.6cmを測る。調整は撫で。188は1/2片で、口径19.0cm、器高4.2cmを測る。全体に磨滅がひどいが撫で、口縁内面細かいヨコ刷毛、内面工具痕が残る。色調は187がにぶい橙色、188は橙色を呈し、胎土はいずれも精良。189～219はB群出土のもの。189～197は壺。189～192は小型の祭祀用のもの。189・190は口縁部が胴部より大きく開く形態で完形。法量は189が口径12.3cm、器高13.1cm、190が12.3cm、10.6cmを測る。外面は粗い刷毛、内面は撫でで指押さえ痕が残る。189は胴部下半に2.5×2.6cmの焼成後の穿孔がある。191は完形品で締まりの無い肩部から頸部が直立して口縁が外折して開く形態。口径9.8cm、器高10.5cmを測る。外面は粗い刷毛、内面は撫でで指押さえ痕が残る。192は完形でやや扁平な胴部から頸部が直立して口縁部が直角に外に開く口縁部である。口径12.1cm、器高10.7cm、最大胴径12.2cmを測る。外面は磨滅がひどいがタテの粗い刷毛、内面は指押さえ痕が残る。色調は189～192がいずれも橙色を呈し、胎土はそれぞれ砂粒を多く含む。193は無頸壺の口縁部1/2弱片、復元口径18.8cmを測る。口縁部は締まって外へ屈折して開く。外面丹塗りヘラ研磨、内面撫でで指押さえ痕が残る。色調は外面赤褐色、内面は橙色。胎土は精良、焼成は良い。194～197は大型品で口縁部が鋤先状を呈すもの。194は復元完形で、口径29.8cm、器高は31.3cm、最大胴径28.7cmを測る。頸部に1条の三角突帯が巡り、底部はわずかに上げ底。外面と口縁部内面は撫でで丹塗り、内面は撫で。195は同形態で194よりわずかに小さいが、ほぼ完形。口径28.5cm、器高28.7cm、最大胴径24.0cmを測る。内外面撫で。頸部内面に指押さえ痕が残る。196は口縁部片で口径27.0cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。197は口頸部1/4片で、復元口径35.2cmを測る。頸部は締まる。頸部外面はタテヘラ研磨のち撫で。内面は撫で。色調はいずれも橙色、胎土は194が精良、195は砂粒を多く含む。196は少量混入、197は砂粒・赤色粒子を多く含む。198～212は甕。口縁の形態から大きく2種類に分類する。Ⅰ類はく字状を呈すもの。Ⅱ類は鋤先状を呈すもの。Ⅰ類は198～204・206である。198～200は口径が18.6cm・21.8cm・23.1cmでほぼ完形。胴部外面はタテの粗い刷毛、内面は撫で。198の外面には黒斑が1ケ所あり、底部は丁寧な撫で。199は内面に指押さえ痕が残る。外面黒斑がある。200は全体に磨滅が著しいが、胴部内面に指押さえ痕が残る。色調は198がにぶい黄橙色、199・200は橙色、胎土は198は精良、199は砂粒を混入、200は多く混入する。201は幅広の底部を持ち、胴部がまるみを持つ形態で復元完形。口径24.4cm、器高26.1cmを測る。外面タテ刷毛のち撫で消し、内面は撫で。2ヵ所黒斑がある。202～204は口径が27.5cm・29.2cm・復元30.8cmを測る大きさのものである。202はほぼ復元完形で器高は27.0cmを測る。外面は粗い刷毛で底部近くは細かい刷毛、内面は磨滅がひどいが撫で。203は復元完形で器高は36.2cmを測る。口縁部は内湾する。磨滅がひどいが胴部外面は粗いタテ刷毛、内面は不明。204は1/2片である。胴部外面は磨滅し剝落するが、タテ刷毛、内面は撫でか。色調は201は灰黄色、202は黄褐色、203・204は橙色。胎土は201～204は砂粒を多く含む。205はほぼ復元完形で口縁は頸部から水平に外反する形態。口径は25.5cm、器高は36.2cmを測る。胴部外面はタテ・ナナメの刷毛、底部近くは工具痕が残る。口縁部はヨコ撫で、内面は磨滅するが撫で。206はⅠ類の1/4片で復元口径28.4cmを測る。外面タテ・ナナメノ刷毛、内面撫でで上半がナナメ刷毛のち撫で。色調は205がくすんだ橙色、206は橙色を呈し、胎土はいずれも砂粒を多く含む。207・208はⅡ類。207は1/2片で復元口径29.4cm、208は1/4片で復元口径30.4cmを測る。206の胴部外面は丁寧な細かいタテ刷毛、上半は刷毛のちヨコ撫で。口縁内外はヨコ撫で。内面は撫で。粘土帯接合による凹凸が残る。208は口縁部はヨコ撫で。色調は207がくすんだ橙色、208が赤褐色を呈し、胎土はいずれも精良で、208は金雲母を含む。209～212は甕の底部。209は底径8.6cm、210は1/2片で復元底径9.5cm、211は底径7.3cm、212は5.8cmを測る。209～212までわずか

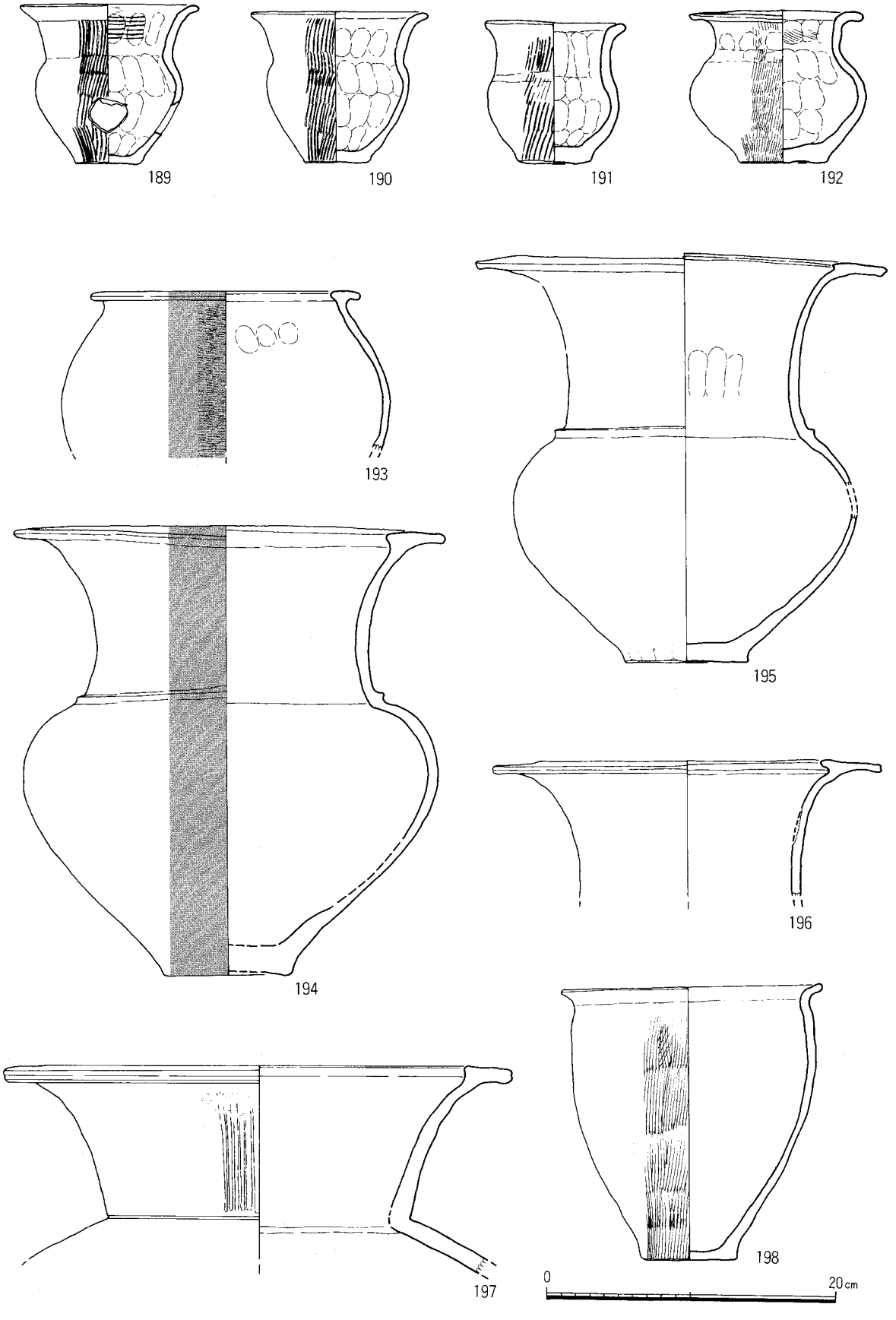


Fig. 29　土器群Ｂ群出土遺物１（1/4）

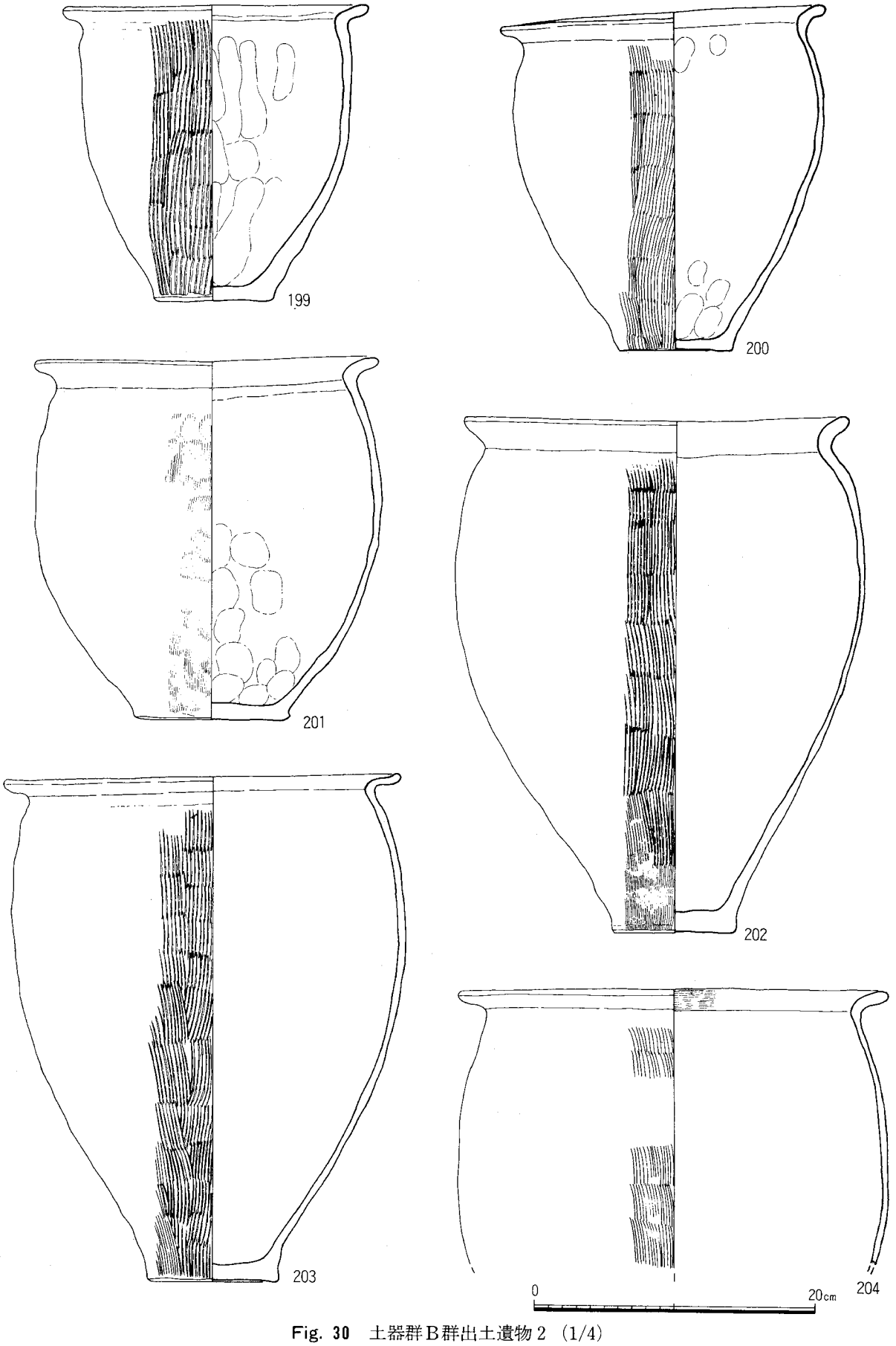


Fig. 30　土器群B群出土遺物2（1/4）

に上げ底。209は胴部外面は磨滅し調整不明、内面は撫でで、指押さえ痕が残る。210は外面磨滅し調整は不明、内面は撫でで底部にわずかに指押さえ痕が残る。211は外面細かい刷毛、内面は撫で。212は小型品で外面ナナメの刷毛。色調は209が淡橙色、210が黄灰色、211はくすんだ橙色、212は黄橙色。胎土は209～211が砂粒を含み、212は精良。213～215は高坏。213は坏脚部片。坏部口径26.0cmを測る。坏部は磨滅が著しいが撫でか。脚部は外面磨滅がひどいがタテヘラ研磨、内面は撫ででしぼり痕が残る。脚部外面には丹塗り痕があり、坏部も丹塗りであろうか。214･215は脚部片。213は外面丹塗りでタテヘラ研磨。内面工具痕が残る。215は磨滅が著しいが、外面は細かいタテ研磨か。内面はいずれもしぼり痕が残る。色調は213は橙色、214は明赤褐色、215はにぶい黄橙色。胎土は213･214は精良、215は雲母を含む砂粒を多く含む。216・217は器台。216は1/2片、217は2/3片で、法量は216は口径が6.8cm、器高15.4cm、復元脚径10.0cm、217が口径8.8cm、器高15.8cmを測る。216・217とも器壁は厚く、指押さえ痕が明瞭に残る。216の内面中央には芯の痕跡が等間隔に凹凸状に残る。色調はいずれも橙色、胎土はいずれも砂粒を多く含む。218・219は蓋の天井部部分。天井部径は6.0cm、6.2cmを測る。外面はタテの刷毛、内面は撫で、天井は雑な撫で。色調は218は淡黄色、219はにぶい橙色。胎土は218は精良、219は砂粒を多く含む。

220～233はＣ群出土。220～222は壺。220は小型品でほぼ完形。口径11.8cm、器高10.0cmを測る。器壁は磨滅が著しいが、外面はナナメ刷毛、内面は撫でで指押さえ痕が残り、口縁内面はヨコ刷毛。221は袋状を呈す口縁部で、口径14.2cmを測る。全体に磨滅が著しいがナナメ刷毛のち撫で、内面は撫で。222は頸部が締まる完形の壺。口径11.9cm、器高25.0cm、最大胴径19.8cmを測る。外面はタテ･ナナメの刷毛で、黒斑がある。内面は撫で、口縁部はヨコ撫で、内面に指押さえ痕が残る。色調は220は橙色、221は黄橙色、222は淡黄色を呈し、胎土は220が精良、221・222は砂粒を多く含む。223～229は甕。223～226は口縁部でく字状を呈すもの。223は1/2片で、復元口径21.8cm、復元器高22.8cmを測る。胴部外面はやや磨滅するが、タテ・ナナメの粗い刷毛、内面は雑な撫でで指押さえ痕が残る。口縁部はヨコ撫で。224は復元完形で、口径22.2cm、器高23.6cmを測る。胴部外面はタテの粗い刷毛、黒斑が２ヵ所ある。内面は撫でで指押さえ痕が残る。口縁部はヨコ撫で、底部は雑な撫で。225は丸みを持った形態で1/2片。復元口径19.3cm、器高22.2cm、復元胴径21.6cmを測る。胴部外面は細かいタテ･ナナメの刷毛、内面は撫で、口縁はヨコ撫で。胴部外面に２カ所黒斑がある。226は1/4片で、復元口径26.6cmを測る。外面はナナメの粗い刷毛、内面は撫で。外面には工具痕がある。227は大型の甕棺の口縁と底部である。復元口径44.8cmを測る。口縁は鋤先状を呈し、口縁下に１条の三角突帯が巡る。胴部外面はタテ・ナナメの細かい刷毛、黒斑がある。内面は撫でで工具痕が残る。口縁部内外はヨコ撫で。色調は223・224・227が橙色、225・226はにぶい橙色を呈し、胎土は223・225・226が砂粒をやや含み、224･226は多く含む。228・229は底部。底径はそれぞれ9.6cm、9.0cmを測る。228は外面は磨滅がひどいが所々刷毛が残る。内面は撫でで指押さえ痕が残る。外底は丁寧な撫で。229は外面が磨滅がひどいがナナメの細かい刷毛、内面は撫で内底に指押さえ痕が残る。色調は228は黄灰色、229はくすんだ橙色、胎土はいずれも砂粒を多く含む。230～232は鉢。230は大型のく字状に外反する1/3片で、復元口径29.2cmを測る。全体に磨滅がひどいが外面はタテ刷毛、内面は撫でか。外面に丹塗り痕が残る。231はややいびつで、口径15.2cm、器高7.3cm、底部4.7cmを測る。底部は上げ底。磨滅がひどいが内外面丹塗り。外底は雑な撫で。232は椀型の2/3片で、口径18.9cm、器高12.2cm、底径7.2cmを測る。全体の形はかなり歪む。外面はタテ・ナナメの粗い刷毛、内面は撫で。口縁部はヨコ撫で。色調は230・231が橙色、232は赤褐色を呈し、胎土は230･232が砂粒を多く含む。231は砂粒をやや含む。233は底部を一部欠失する器台。口径10.2cm、器高11.8cmを測る。外面指押さえのち撫で、内面撫でで、色調はに

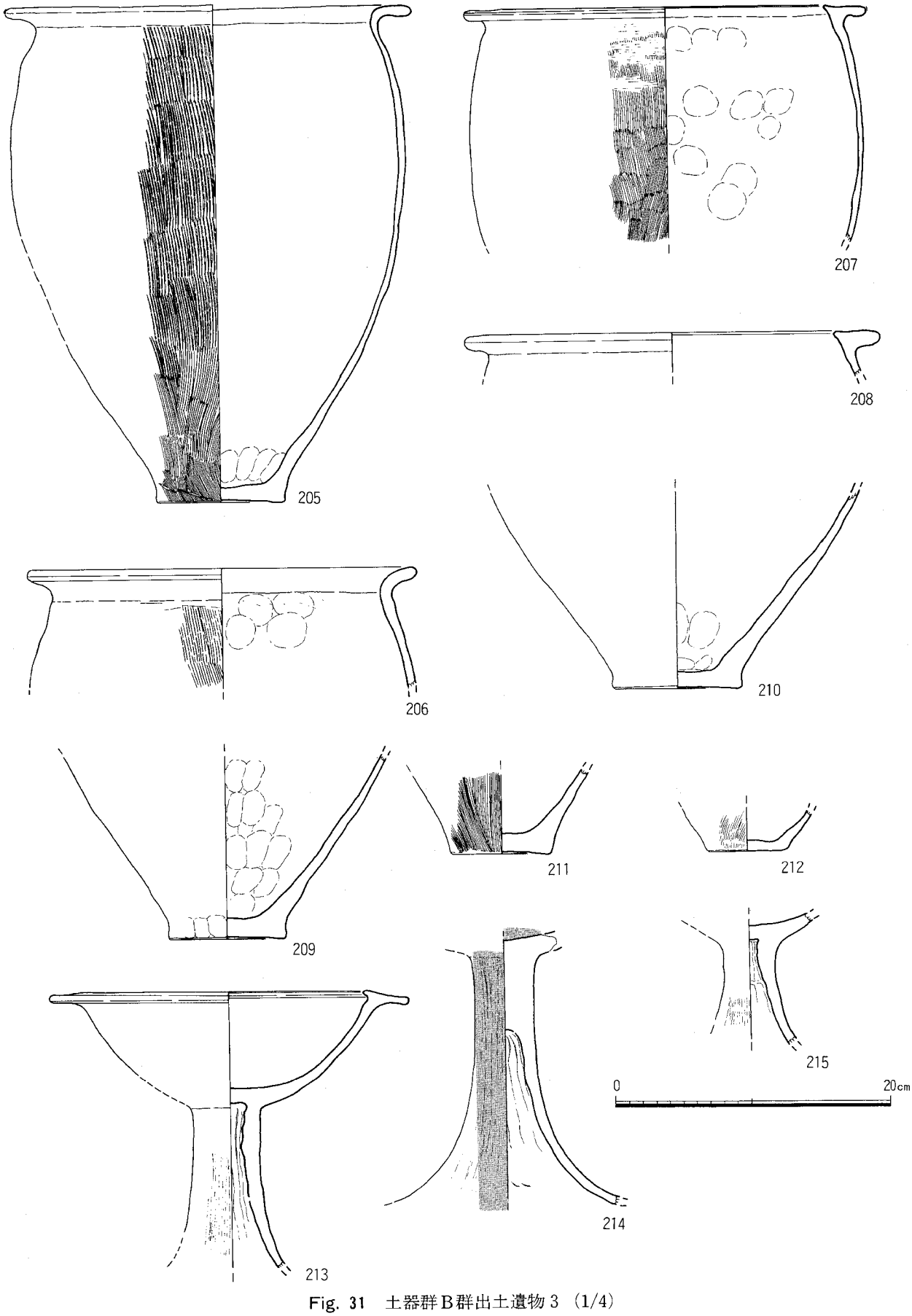


Fig. 31　土器群B群出土遺物3（1/4）

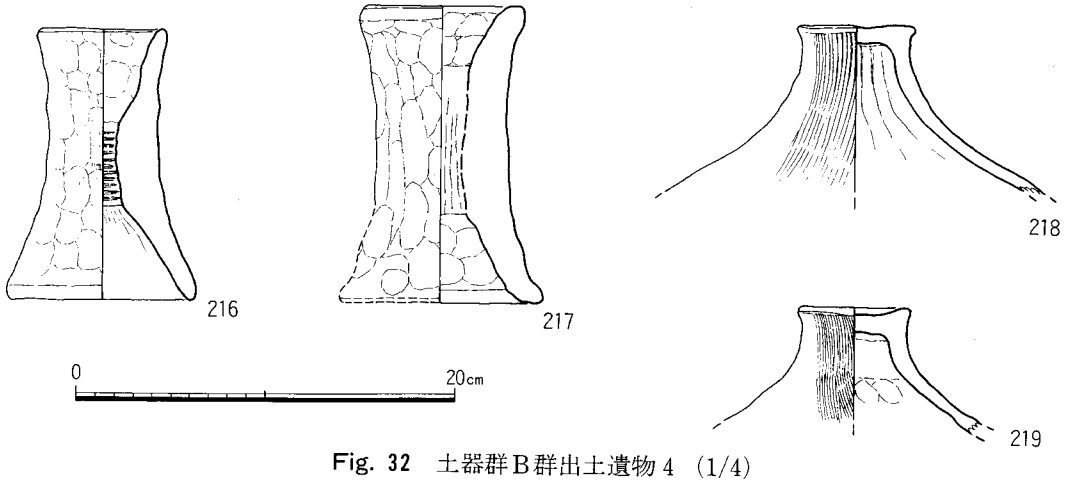


Fig. 32　土器群B群出土遺物４（1/4）

ぶい褐色。胎土は砂粒を多く含む。

234～238はD群である。234･235は壺。234は小型のミニチュア土器で完形品。口径11.0cm、器高12.0cmを測る。全体に磨滅がひどいが外面は細かいタテ･ナナメの刷毛で粘土帯の痕跡があり、内面は撫でで指押さえ痕が全面に残る。235は胴頸部1/6片。復元頸部形22.0cmを測る。胴部上半に１条の三角突帯が巡る。口縁はタテヘラ削りのちヨコ撫で。胴部はヘラ研磨のち丁寧な撫で。内面は撫で。236･237は甕。236はく字状を呈す口縁の1/3片。復元口径38.4cmを測る。口縁直下には1条の三角突帯が巡る。口縁内外はヨコ撫で、胴外面は細かい刷毛のち撫で、内面は撫で。237もく字状を呈す口縁部1/2片で、口縁はやや歪むが復元口径30.5cmを測る。外面はタテ刷毛、内面は撫で。238は高坏坏部。口径26.5cmを測る。磨滅がひどいが内外面丹塗りでヘラ研磨。色調は234が黄橙色、235がにぶい橙色、236が橙色、237がにぶい黄橙色、238がにぶい灰黄色。胎土は234・235・238が砂粒を多く含み、236が金雲母を少し含むが精良、237は砂粒をやや含む。

包含層・土器群出土のその他の遺物（Fig. 36、PL. 17）

239～243は土製品。239・240は投弾。平面形は紡錘形、断面は円形を呈し、全長3.7cm、4.3cm、最大径2.5cm、2.5cmを測る。239は丁寧な撫で、240は研磨仕上げ、残りは良好。色調はいずれもにぶい橙色で下半が黒色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。241は土器片利用の円盤。直径5.4×5.7cm、厚さ0.75cmを測る。縁片打ち欠き後研磨。色調は暗灰黄色で黒斑部分がある。胎土は砂粒を多く含む。242は土玉。扁球形で、直径8.5mmを測る。全面丁寧な磨き。中央に1mmの孔がある。色調は黒色、胎土は精良。243は鳥形土製品の頭部部分（図版扉）。水鳥を模しているようで、嘴は扁平で中身は中空である。残存長5.8cm、頭部長4.3cm、頭部幅3.5cmを測る。色調は橙色で、胎土に砂粒を多く含む。239は包第3・4層、240・241は土器群、242・243は包第1層出土である。

244～250は石器。244･245は磨製石器の欠損品。244は刃部片で残存長9.7cm、幅7.0cmを測る。研磨調整であるが、敲打痕が残る。245は残存長8.0cm、幅7.0cmを測る。研磨調整で敲打痕が残る。いずれも石質は頁岩で、色調は灰色。246はほぼ完形の扁平片刃石斧で、全長5.1cm、幅2.6cm、厚さ1.3cmを測る。全面研磨調整で刃部に使用痕が残る。石質は頁岩で、色調は明灰色。247は叩き石。最大長14.5cm、幅12.6cm、厚さ5.7cmを測る。上面に使用痕が残る。石質は玄武岩で色調は灰色。248は砥石。長

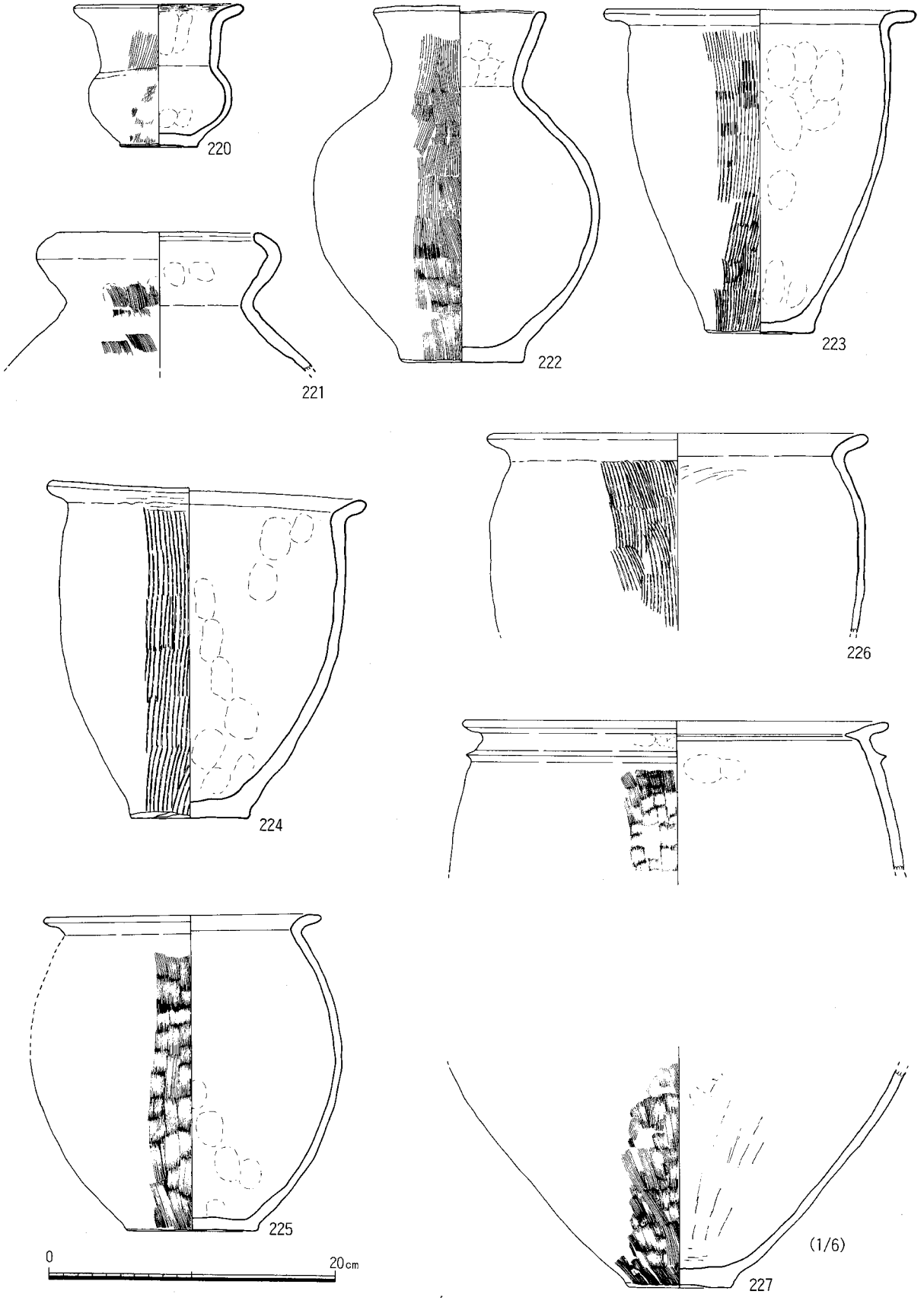


Fig. 33　土器群C群出土遺物1（1/4・1/6）

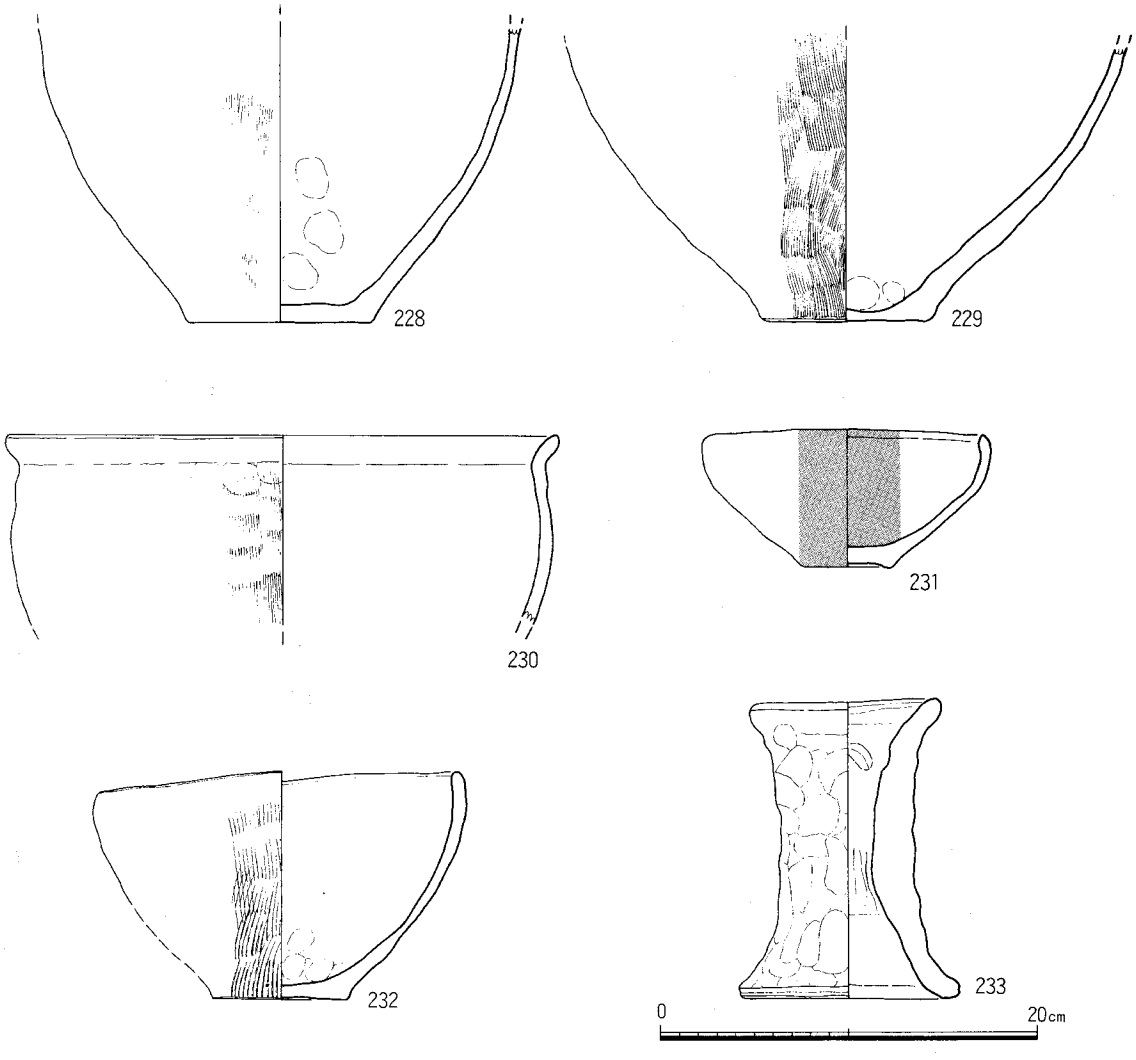


Fig. 34　土器群C群出土遺物２（1/4）

楕円形の形態で先端が欠損する。全長9.3cm、最大幅5.8cmを測る。上下両面に砥面があり、周縁は雑な敲打調整である。石質は砂岩で色調は灰黄色である。249は外湾刃半月形の石包丁の破片。残存長6.7cmを測る。石質は粘板岩か。色調は暗青灰色。250は石匙で全長5.6cm、最大幅3.5cmを測る。石質はサヌカイトで、色調は黒灰色。250・251・255は包第3・4層、252は包第1層、254・256は包第２層出土である。

⑤　ピット・遺構面・その他の遺構

胞衣壺（Fig. 9、PL. 9・12）

調査区の北東側のSP66内で検出された。埋土は褐色土である。ピットの直径は20cm、深さは15cmを測る円形のものである。このなかに陶器の小型甕251が埋置されており、その中に縁辺を打ち割った中型の染付皿252が落とし蓋状に入れられていた。検出した場所は昔から民家が建っていた所であり、出産儀礼に伴う胞衣壺であろうか。

251は小型甕で完形品。口径12.8cm、器高13.2cmを測る。胴部中央に3条の沈線が巡り、口縁の一部は意図的に打ちかかれている。暗褐色からオリーブ色の釉が厚めにかかり、外面は釉が垂れ、ヘラに

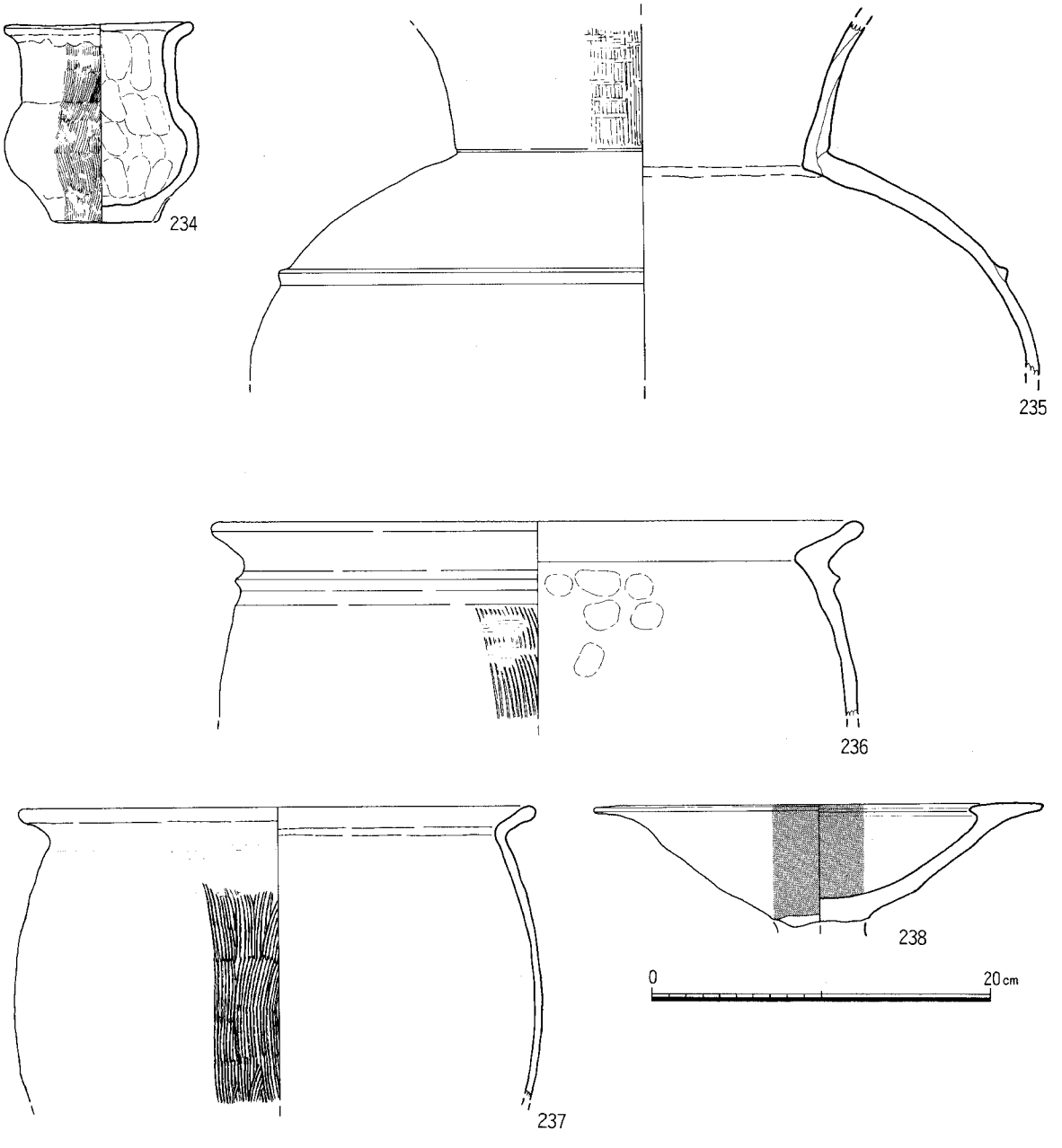


Fig. 35 土器群D群出土遺物（1/4）

よる釉の掻きとり、内底は雑なヘラ削り。底部は削りで露胎である。高取焼か。252は16輪花の染付の中型皿で蓋に使われたもの。縁を打ち欠いて蓋としていたため、口縁の2/3は欠損している。復元口径13.2cm、器高は3.2cmを測る。全面に白色の透明釉がかかるが、内底は釉を掻き取る。濃紺の呉須で模様を描くが、外面は唐草、内面は型紙刷りで花を描くが、暈して濃淡をつけている。19世紀後半以降のものか。

ピット出土遺物（Fig. 37・38、PL. 12）

調査区全域で検出されているが、西側は削平により残りが悪い。ピットの埋土は大きく4種類、黒褐色、褐色、暗褐色、暗灰褐色に分かれる。柱痕跡を残す柱穴らしきものもあるが、建物としては把握

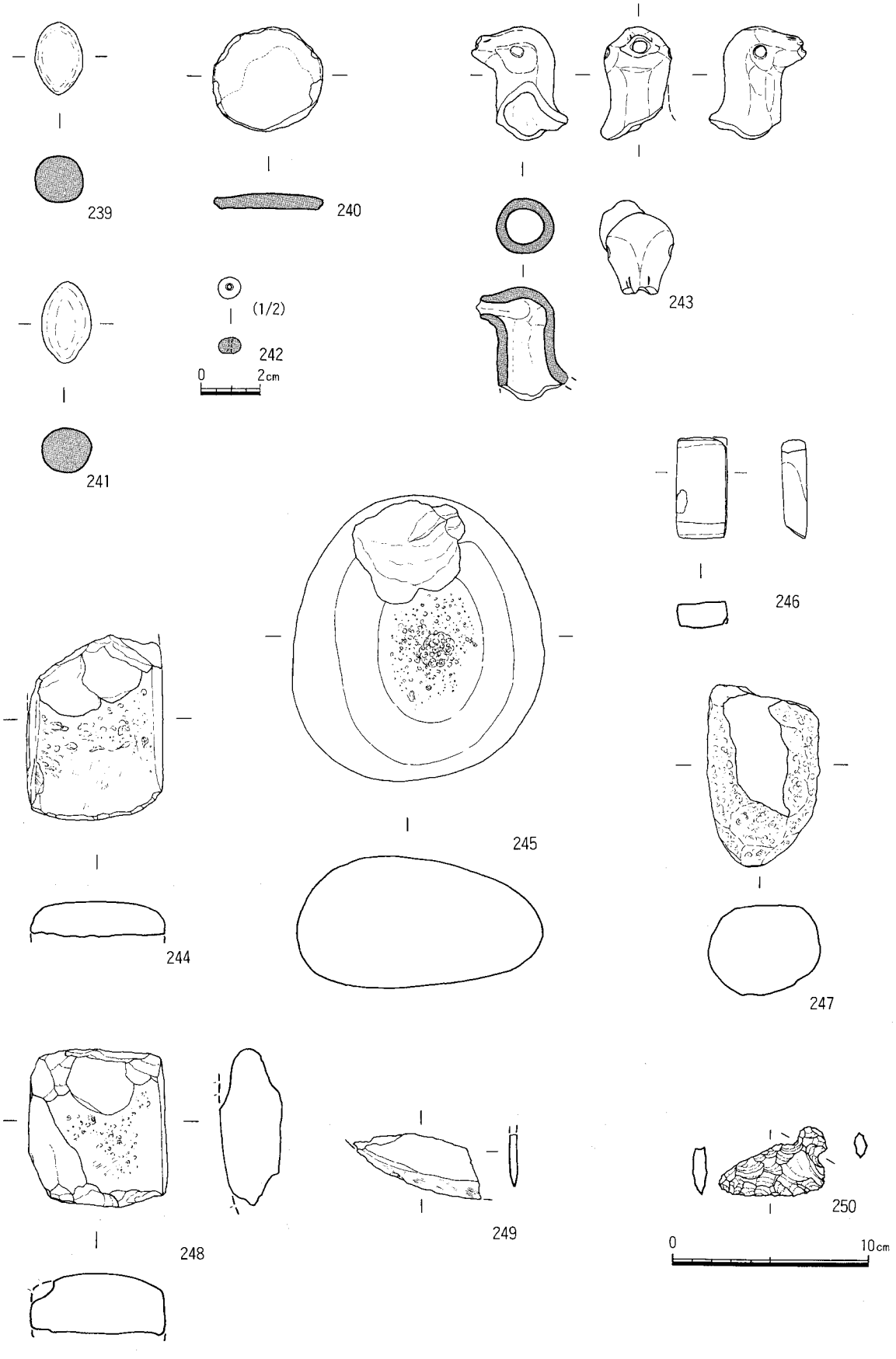


Fig. 36　包含層出土土製品・石器（1/2・1/3）

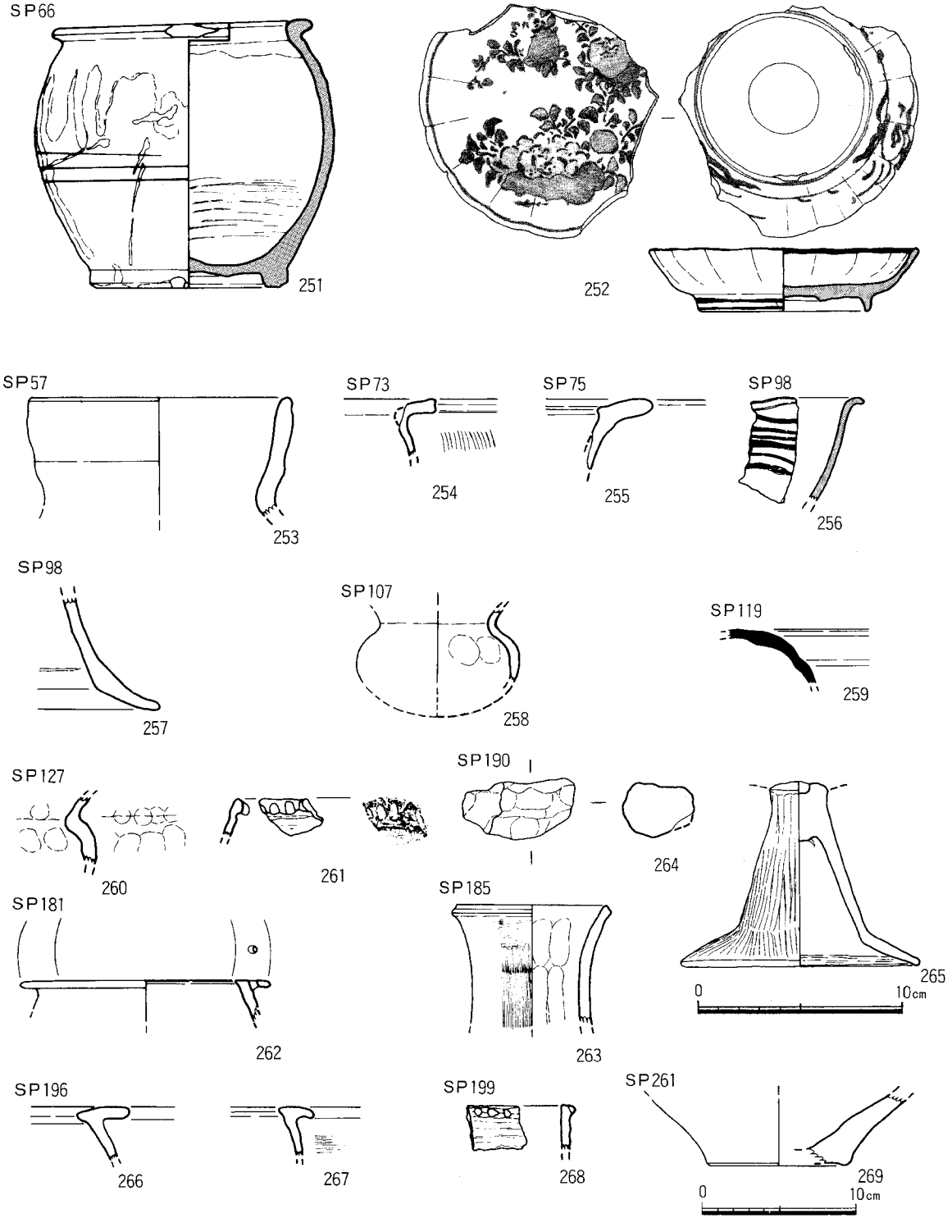


Fig. 37　ピット出土遺物1（1/3・1/4）

出来なかった。各ピットから遺物の出土は比較的多い。

253はSP57出土。土師器の壺口縁部1/4片で、復元口径13.2cmを測る。僅かに二重口縁状を呈す。外面には黒斑がある。色調は橙色、胎土は金雲母を含む細砂粒を少し含む。254はSP73出土の弥生土器の壺口縁部細片。磨滅がひどいが外面はタテ刷毛。色調は橙色、胎土は精良。255はSP75出土。弥生土器

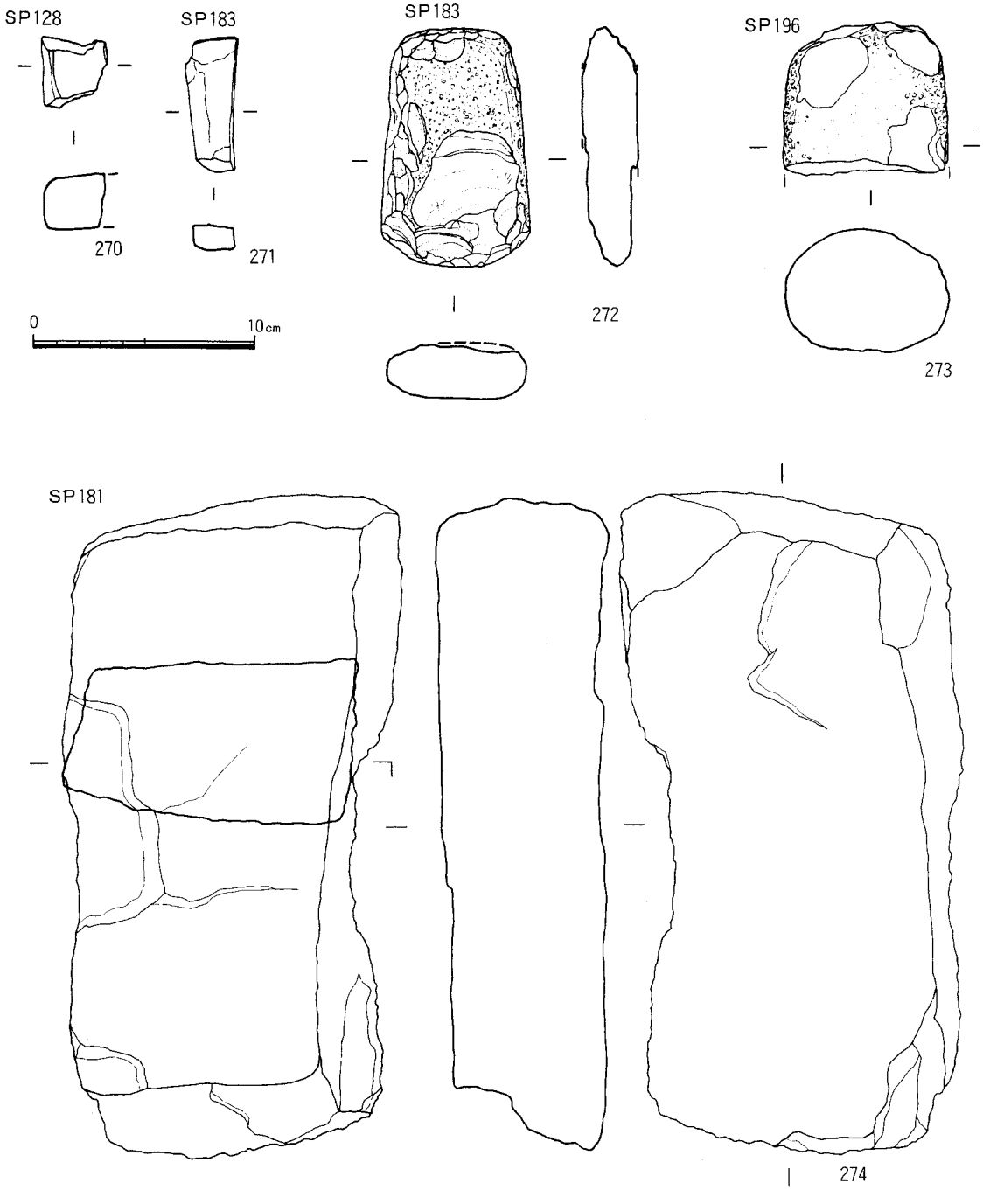


Fig. 38 ピット出土遺物２（1/3・1/4）

の口縁部細片。口縁は鋤先状を呈し、全体に磨滅がひどく調整は不明。色調は浅黄橙色、胎土は精良。256･257はSP98出土。256は陶器の碗の口縁部の細片で、内外白色粘土の刷毛目を施す。口縁はやや歪む。色調は内外面灰オリーブの灰釉がかかり、胎土は精良。257は柱芯出土の土師器の高坏脚部小片。磨滅がひどく調整不明。色調は橙色、胎土は砂粒を少量含む。埋土の色から256が時期を表すものか。258はSP107出土の土師器の小型壺胴部片、最大胴径は約８cm。内外磨滅がひどいが、内面指押さえ痕が残る。色調は明橙色、胎土は精良。259はSP119出土の須恵器坏蓋小片。天井は回転ヘラ削り、その

他は撫で。色調は灰色、胎土は精良、焼成は良い。260・261はSP127出土。260は土師器の壺細片。内外指押さえ痕が残る。色調は褐色、胎土は細砂粒を多く含む。262はSP181掘り方出土の弥生土器頸部口縁部1/6片。復元口径は16.2cmを測る。口縁には焼成前穿孔の径0.5cmの穴がある。色調は丹塗りでにぶい橙色、胎土は精良。263はSP185掘り方出土。器台の口縁部か脚部の1/3片。復元脚径は10.4cmを測る。外面細かいタテ刷毛、内面は指押さえ痕が残る。色調は橙色、胎土は精良。264・265はSP190出土の土師器。264は差し込式の把手で、指おさえ仕上げ。色調は浅黄橙色、胎土は細砂粒を少し含むが精良。271は高坏脚部1/3片。復元脚径11.8cmを測る。外面は粗いタテ刷毛とヘラ削り、内面は磨滅がひどいが底部はヨコ刷毛が残る。色調は黄橙色、胎土に細砂粒を少量含む。266・267はSP196出土の弥生土器の口縁部小片。276は壺か、外面は丹塗り研磨で赤褐色、胎土は精良、焼成は良い。207は甕で磨滅がひどい。色調はにぶい黄橙色、胎土は精良。268はSP199出土の夜臼式土器の甕口縁部細片、口縁部に棒状工具による刻み目突帯が付く。外面は条痕調整、内面は撫で。色調は橙色から黒色。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良い。269はSP261出土の弥生土器壺底部1/4片。磨滅がひどく調整不明。色調は黄橙色、胎土に砂粒を多く含む。

270はSP128出土の砂岩製の砥石の破片。目の細かい仕上げ砥石。色調はにぶい橙色、残存長は3.4cmを測る。271・272はSP183出土の石斧の欠損品。灰白色の頁岩。全長6.2cm、幅2.5cmを測る。272は磨製石斧で敲打調整痕が残るが、全面に使用による欠損が著しい。全長11.0cm、最大幅6.9cmを測る。形態的に見て縄文時代のものか。色調は灰色、石質は玄武岩製である。273はSP196出土の今山産の磨製石斧頭部片。全面研磨調整であるが敲打調整痕が残る。残存長7.0cm、幅7.5cm、厚さ5.6cmを測る。石質は灰色の玄武岩。274はSP181から出土した長方形の根石である。表面は雑に仕上げられやや風化している。石材は花崗岩で、最大長30.6cm、幅15.6cm、厚さ7.9cmを測る。

3）小　結

以上調査の概要について述べたが、ここではそれらを整理して若干のまとめとしたい。当地点で検出された遺構の時期は、弥生時代中期後半から近代までの各時代にわたる。弥生時代の遺構は包含層の土器群の遺物である。遺物は中期後半から後期前半位までの遺物を含み、時期の幅がある。土器のまとまりとしては4群ほどあり、廃棄された時期差を表すものであろう。段落ち際に近いA群が古く、D群が一番新しい、これは堆積する土層の状態からも認められる。小型の土器や丹塗り土器などの祭祀的色彩の強い遺物で、完形の遺物も多いことから、祭祀を意識して廃棄された土器群であろうか。有田遺跡で谷部の包含層に多量の弥生土器が廃棄されている状況は未報告ではあるが、第137次地点にもある。谷部自体遺物は上層に古墳時代の5世紀代のものを含み、その時期までに埋没したのであろう。上層から出土した水鳥形土製品は頭部だけであるが、形態・成形・成形の具合から容器の一部であろう。時期としては谷が埋没した時期のものであろう。水鳥を含む鳥形の土製品の周辺での出土例は少なく、比恵第49次地点で土製品[註1]、丸隈山古墳で水鳥形埴輪[註2]、前原市の東下田遺跡[註3]では竪穴住居址から水鳥形土製品が出土している。時代はいずれも古墳時代である。

古墳時代の遺構は掘立柱建物群が該当する。時期的には小片が多く時期を決めうる遺物が少ないため断定しかねるが、時期的には7世紀前半迄の物を含む。上限がそのころであろうか。当遺跡群では古墳時代末から奈良時代にかけての大型建物群が、台地北西部の小田部５丁目地区、台地中央部の小田部２丁目、有田１丁目・２丁目地区を中心に３カ所の地点で確認されている。今回の確認は台地南側の当地区では初めてのものであり，該期の大型建物が台地南部にも存在していたことが確認された。しかし、１棟だけの確認であり、今後の周辺の調査に期待したい。

註１．福岡市教育委員会『比恵遺跡群15』市報401集　1995
註２．福岡市教育委員会『丸隈山古墳II』市報146集　1986
註３．前原市教育委員会『伊都―古代の糸島』

2．第153次調査（調査番号8960）

1）　調査区の地形と概要

調査区は早良区小田部5丁目70･71に所在する。北へ八手状に分岐して大きく広がる台地の北西側、北東に谷部を臨む斜面上に立地する。現況は荒れた空地であった。

平成元年度に事前調査願いが提出された。これを受けて発掘調査を実施した。調査は平成元年11月15日から同月30日迄行なった。調査面積は申請面積330m²中263m²である。

調査区周辺は小田部地区としては、調査が良く行なわれている地域で、西側に隣接する第142次･143次調査区では、弥生時代から古墳時代の住居址を中心に、多くの遺構が検出された。

今回の調査では50cm前後の表土下の、黄橙色ローム土上面で遺構を確認した。遺構面は南が高く（標高約7m）、北が一段段落する。段差は60cm前後を測る。その段落際は昭和40年代の区画整理事業以前迄の旧道があったらしく、黄灰色粘土に粗砂を混じえた土で、固くしまっていた。遺構は主に調査区の北側で検出した。主な遺構は古墳時代前期の竪穴式住居址1棟、溝2条である。出土遺物は弥生土器から近世迄の遺物がある。総量はコンテナで2箱である。

2）遺構と遺物

①　竪穴住居址

SC02（Fig. 41、PL. 19）

北側段落部境界で検出した、北西から南東に主軸を取る住居址である。大半は調査区外の為、全容は不明だが、ベッド状遺構を持つ長方形の住居址と考えられる。確認長南西壁4.30m、南東壁2.38m、深さ35cm前後を測り、遺構の残りは比較的良い。壁下とベッド際には、小溝が巡る。ベッドの周壁溝は、板材を打ち込んだような細いスジ状の溝である。ベッド状遺構は明黄褐色粘土を貼付けしている。焼失家屋と考えられ、埋土下層や床面には多くの炭化物・炭化材があった。遺物は床面に密着して出土した。ベッド上面には作業台石があった。

出土遺物（Fig. 42、PL. 20）　遺物の出土量は多い。土師器が大半で、弥生土器や黒曜石の剥片などを小量含む。

1～9は土師器。1・2は小形丸底壺。1は球形の胴部から口縁部が内湾気味に外へ開く器形。復元口径は12.5cm、器高14.0cm、胴部最大径12.0cmを測る。胴部最大径は上半にある。底部には黒斑があり、刷毛目がわずかに残る。2は口径が胴部最大径より小さい。復元口径12.6cmを測る。口縁内面は磨滅が著しいが、内面は刷毛のち撫で。頸部には指おさえ痕が残る。3・4は高坏である。3は接合部、4は脚裾部である。脚端径は12.0cmを測る。外面は細かい刷毛、内面はヨコ刷毛である。5～9は甕。いずれもほぼ同様の口縁の形態である。復元口径は5が17.0cm、6が16.2cm、7が19.4cm、8が17.0cmを測る。5～7の外面は撫で。胴部内面はヘラ削りを加える。8の外面は刷毛のち撫で。内面はヘラ削り。9は胴底部片で、8と同一個体と思われる。底部はやや尖り気味の丸底。胴外面は細かいヨコ又はタテ刷毛。内面はタテヘラ削り。煤が付着する。10は作業台石。玄武岩製である。長さ21.6cm、幅18.3cm、最大厚さ7.9cmを測る。

②　溝状遺構

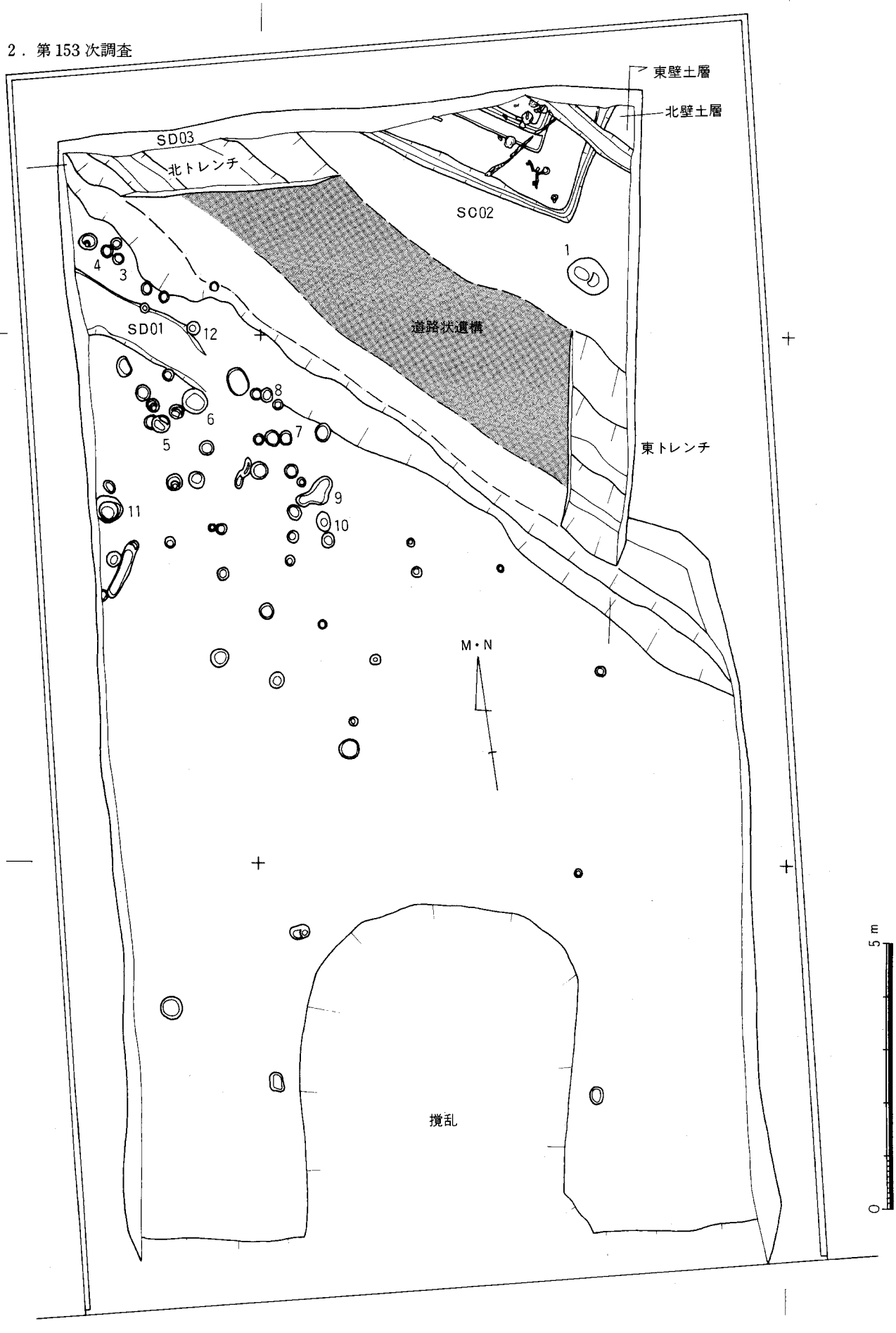


Fig. 39　第153次調査遺構配置図（1/100）

Fig. 40　第153次・142・143次遺構配置図（1/200）

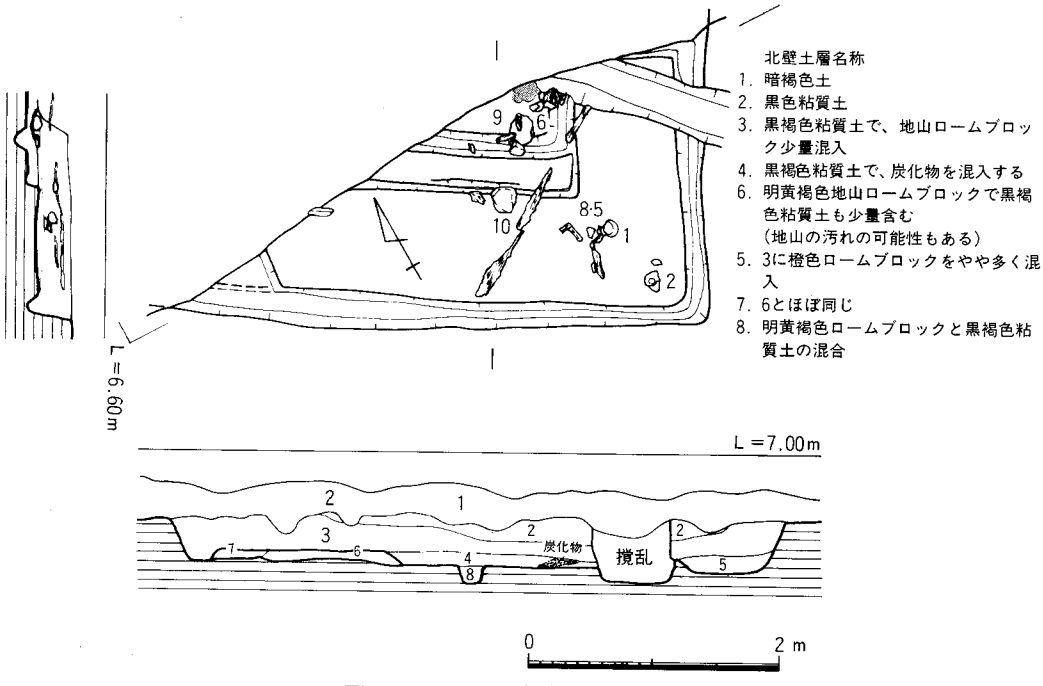


Fig. 41　SC02 (1/60)

SD01

北西から南東に走る溝で、第142次調査区から続く溝である。残りは悪く、当調査区で消滅する。確認長3m、幅0.8m、深さは2～7cmを測る。底面は北側に向かって少し深くなる。埋土は黒褐色粘質土が主体で、地山ロームブロックを少量混入する。

出土遺物　弥生土器の細片が4点出土した。

SD03 (Fig. 43、PL. 20)

台地段落下を巡る溝。南東から北西に延び、第142・143調査区検出の溝と同一のものである。区画整理前の道路下で確認した。確認長15m、幅3m、深さ70cm前後を測り、溝断面は浅いV字形を呈す。時間の都合上、完掘出来ず、トレンチを両壁に設定し調査を行った。埋土は2段落に分ける事が出来るが、基本的には黒褐色から黒色粘土を主体とする。底に近い程粘性は強くなる。

出土遺物 (Fig. 44、PL. 20)　弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器から、近世の陶器の擂鉢、磁器、瓦、黒曜石の剥片などが出土している。量はそれ程多くない。

11は白磁の碗底部片。高台径4.0cmを測る。見込み・高台畳付きは露胎。施釉部分は青白っぽい色調を呈す。12は染付け碗底部片。高台径4.0cmを測る。畳以外はくすんだ白色透明釉がかかる。外底部には呉須による3条の圏線、高台内にはくずれた銘が入る。13は陶器の擂鉢体部1/8片。復元底径12.4cmを測る。体部と底部の境界はヘラ削り。内面には7本単位の条線が入る。

③ピット・その他の遺物 (Fig. 44、PL. 20)

弥生土器・土師器・須恵器などが各ピットから少量ずつ出土した。

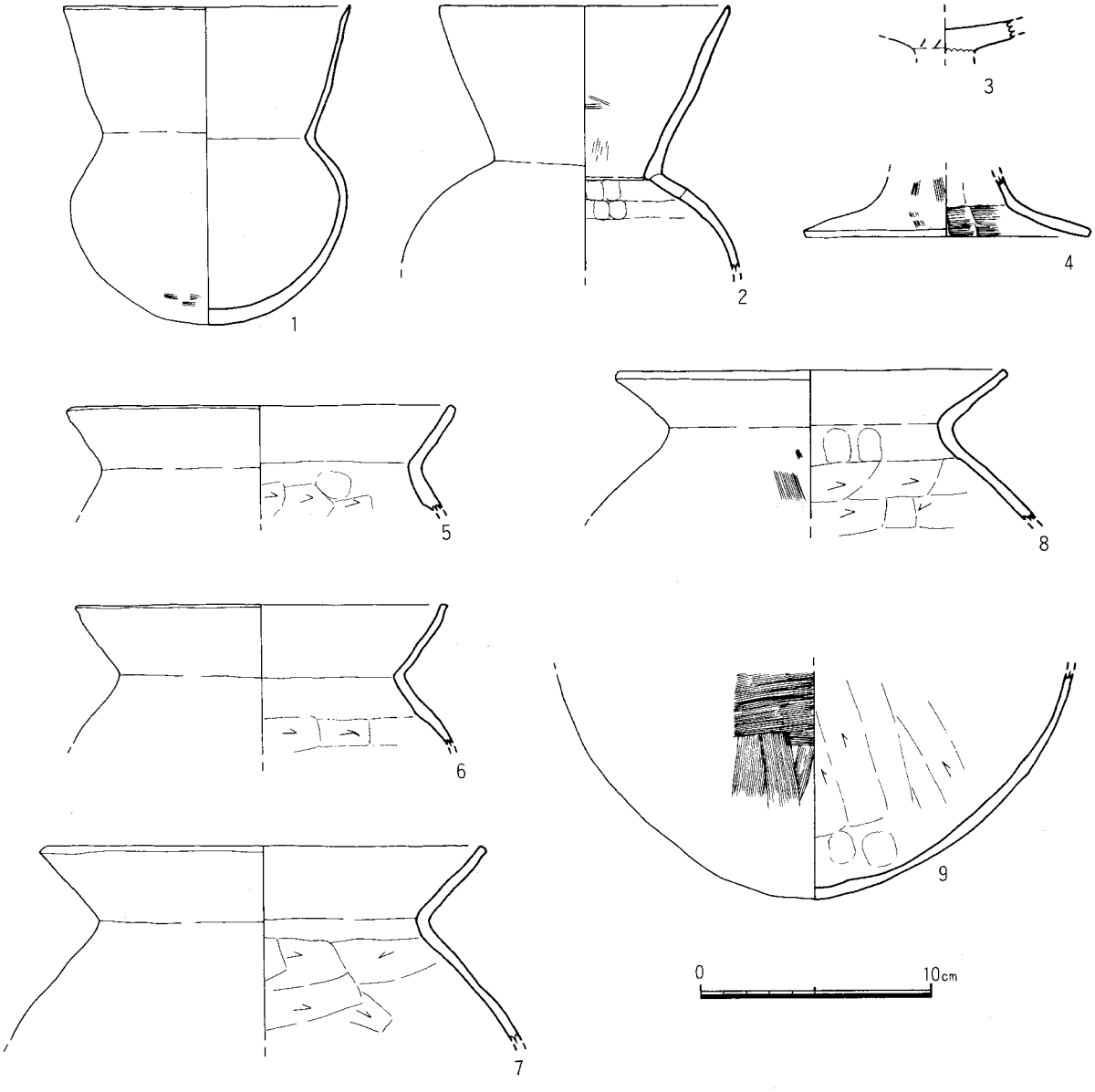


Fig. 42　SC02出土遺物（1/3）

14はＳＰ03出土。白磁碗の口縁部小片。小さな玉縁を持つ器形である。灰色の胎土にうすい透明釉がかかる。

3)　小結

以上調査の概要について述べたが、ここでは隣接して調査した第142･143次調査の成果[註1]とあわせて考察する。当調査区で検出した遺構は古墳時代と近世の時期である。古墳時代の遺構はＳＣ02が該当する。時期は出土遺物から前期の布留式土器並行の時期である。この竪穴住居跡は床面に炭化材が残っており、焼失家屋の可能性がある。第142・143次調査区では古墳時代の竪穴住居跡が建て替え分の含めて12棟確認されている。前期のものは3棟で、ここの分も含めれば4棟となる。建物の主軸が同一方

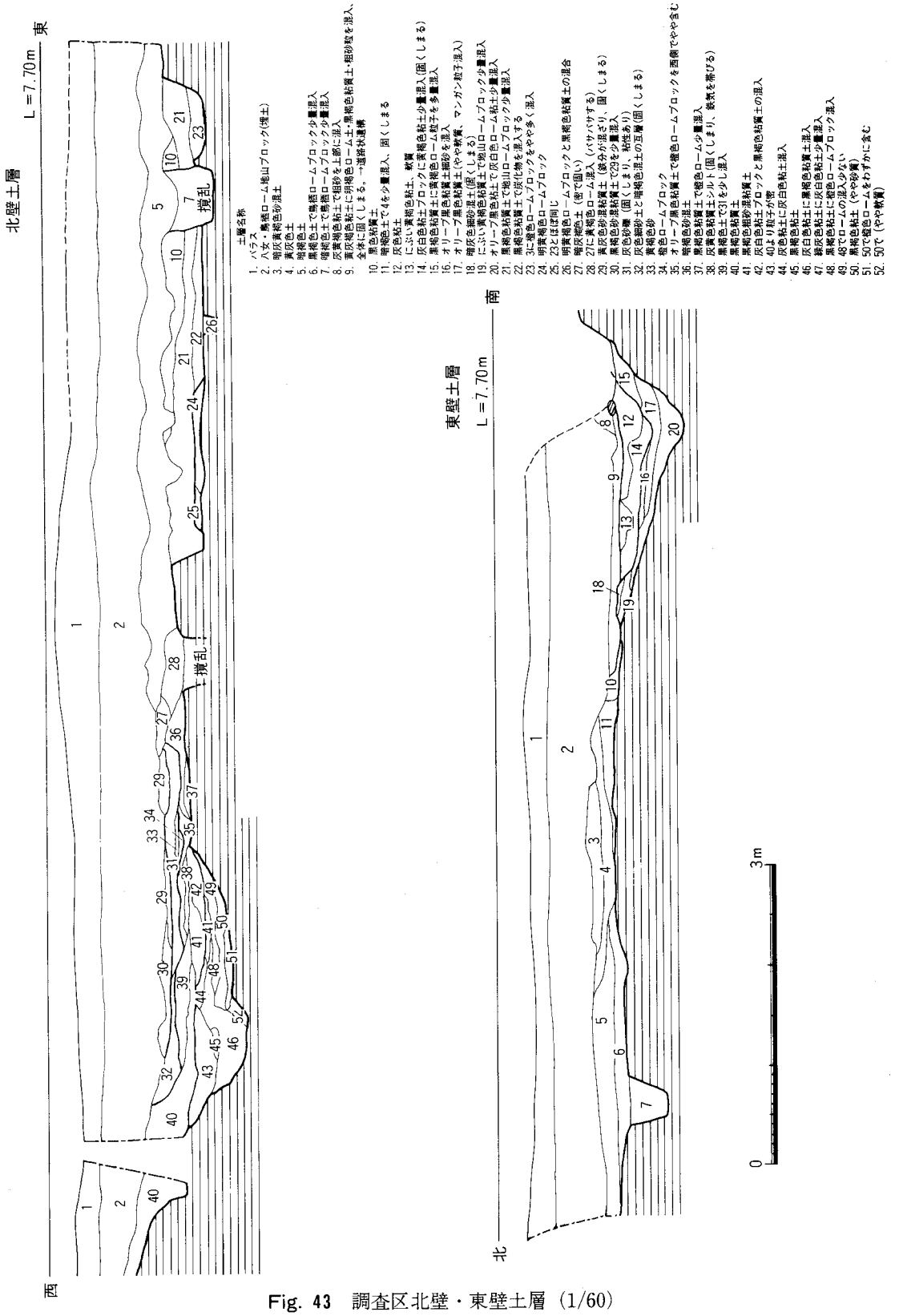


Fig. 43　調査区北壁・東壁土層（1/60）

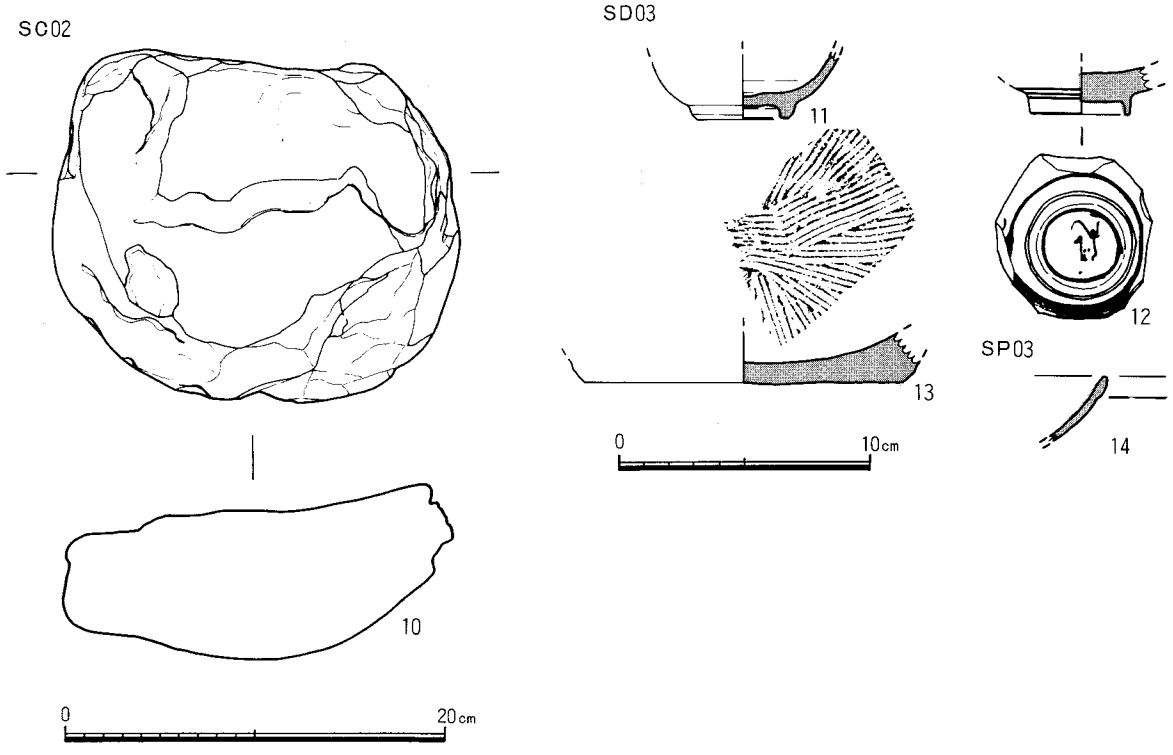


Fig. 44　SC02及びその他の出土遺物（1/3・1/4）

向のものを見れば、SC16・05などが同方向であり、同時期に並存していた可能性がある。調査区の北側は区画整理前の地図によれば谷が入り込むが当地点までは台地が残っていた。恐らく当調査区の東側未調査区にも同時期の竪穴住居址は分布するのであろう。調査区南側は遺構が殆ど残っていない事から、区画整理時にかなり削平を受けたのであろう。戦前の地図から見れば、1m近い削平が考えられる。他にSB01が古墳時代のものになる。

近世の遺構はSB03である。この溝の上面には小礫や粗砂を帯状に敷き詰められており、固く締まっていた。戦前の地図にはこのあたりに北西に延びる道があり、これがその道に相当するのであろう。SB03はその下で確認されたものであり、完掘していないので詳しい状況は判らないが、第143次調査区の延長部分とトレンチ部分から逆台形状を呈し、西側台地部沿いが一段溝状に深くなる。埋土から水路の可能性はなく、上面の道路に先行する道路遺構の可能性が強い。

註１「有田・小田部第２０集」市報第３７８集　１９９４

3．第148次調査出土遺物補遺

本編は1993年刊行の「有田・小田部第18集」－福岡市埋蔵文化財調査報告書第340集－中の第５章、第148次調査の出土遺物補遺である。

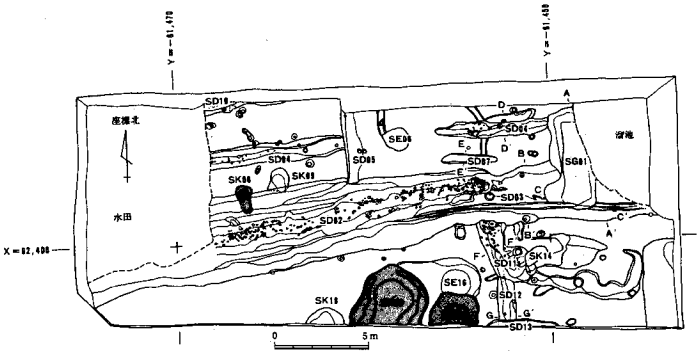


Fig. 45　第148次調査遺構全体図（1/400）

調査地は早良区有田一丁目18－４に所在し、平成元年２月22日～同年３月31日まで実施された。調査面積は414㎡。古墳時代～古代の土壙２基、16世紀代の溝７条、井戸２基、土壙４基、水溜遺構１基、近世の溝２条と水田を検出している。本編の資料は同年調査を行った第147次調査の出土遺物に紛れ込んでしまっていたもので、今回の整理報告の際確認されたため、土壙ＳＫ８・15・17等出土の遺物は本報告では遺物なしか、小片出土となっている。

出土遺物（Fig. 46）１はSD02出土のガラス容器の取手部分で幅6.5～8.5㎜厚さ４㎜を測る。若干緑がかったライトブルーの不透明なガラスで、中央内外面に溝を有する。16世紀代の有田遺跡内初の出土例で、博多遺跡群のガラス器の素材に良く似る。２はＳＫ８出土の須恵器高坏の脚部。低い脚で残存高4.2㎝。方形の透し穴を３孔もうけている。３～10はＳＫ15出土。３は龍泉窯系の青磁碗で複弁の鎬蓮弁文の高台脇に粗雑な凹線を一条施す。胎土は灰白～黄橙色でやや粗目、釉は灰オリーブで細かな貫入が入る。４は瓦質の擂鉢で内面は細かなヨコ板ナデ後５～６本単位の擂目を入れる。外面は粗いヨコナデ。５は備前焼Ｖ期の擂鉢で口径26㎝。内外とも回転ナデ後、内面に８本単位の擂目を施す。大半は使用のため摩滅する。６は土師質の土鍋片を打ち欠いた瓦玉で径2.5～2.8㎝。７は花崗岩の自然礫を用いた叩石で上下端と側面の稜線部に敲打痕が集中する。８は軒丸瓦で径15㎝程。内区の三巴文の尾は圏線に接する。瓦当面に砂粒が多数付着する。９は丸瓦で径13.5㎝程。背部に縄目叩。谷部に籠目と布圧痕が残る。10は軒平瓦で唐草文を配する。瓦当面と谷部に砂粒が多数付着する。11～22はＳＫ17出土。11は龍泉窯系の青磁碗で外面に片切彫の蓮弁文、内面圏線内に印花の花文を施す。胎土は淡灰色で緻密、釉はオリーブ黄で厚く、貫入が入り高台内面までかかる。12・13は白磁碗。12は口径13.6㎝。胎土は灰白色でやや粗く細かい黒色粒を若干含む。釉は乳灰色で厚く半濁する。13は口径12㎝。口唇内側が凹線気味になる。胎土は白色で緻密。釉は灰白色で細かな貫入が入る。14は李朝白磁皿で、胎土は白色で緻密、釉は灰白色で半透明。見込と畳付に４ケ所胎土目痕が残る。15～18は明青花。15は小碗で胎土は白色で緻密、釉は青味がかった白色。外面の低い突帯の両側に圏線。以下に如意頭状の文様を施す。16は碗で胎土は白色で緻密、釉は青味がかった乳白色で呉須はくすんだ暗青灰色を呈する。17は皿で口縁内外に圏線を施す。18は碗で外面はアラベスクを描き高台際に圏線２条、内面圏線内に法螺貝を描く。胎土は白色でやや粗く釉は青味がかった乳白色で畳付のみ露胎。19・20は土師質の土鍋。19は外面口縁下に低い突帯を施し内面はヨコハケ外面は指頭圧後ヨコナデ、口唇はタテハケを施す。20は内面は細かなヨコハケ後粗いヨコヘラナデ、外面は指頭圧後タテハケ、ゆるいユビナデを施す。外面には煤が厚く付着する。21は土師器の鉢底部で底径約12㎝。内面は底面を回転ケズリ後ナデ、以上はナナメ板ナデ、外面は底面を糸切り後ゆるいナデ、以上に粗いヨコ板ナデ後ゆるいユビナデ、底部脇は手持ちの板ナデを施す。22は土師器坏で底径6.6㎝。外底は糸切り。

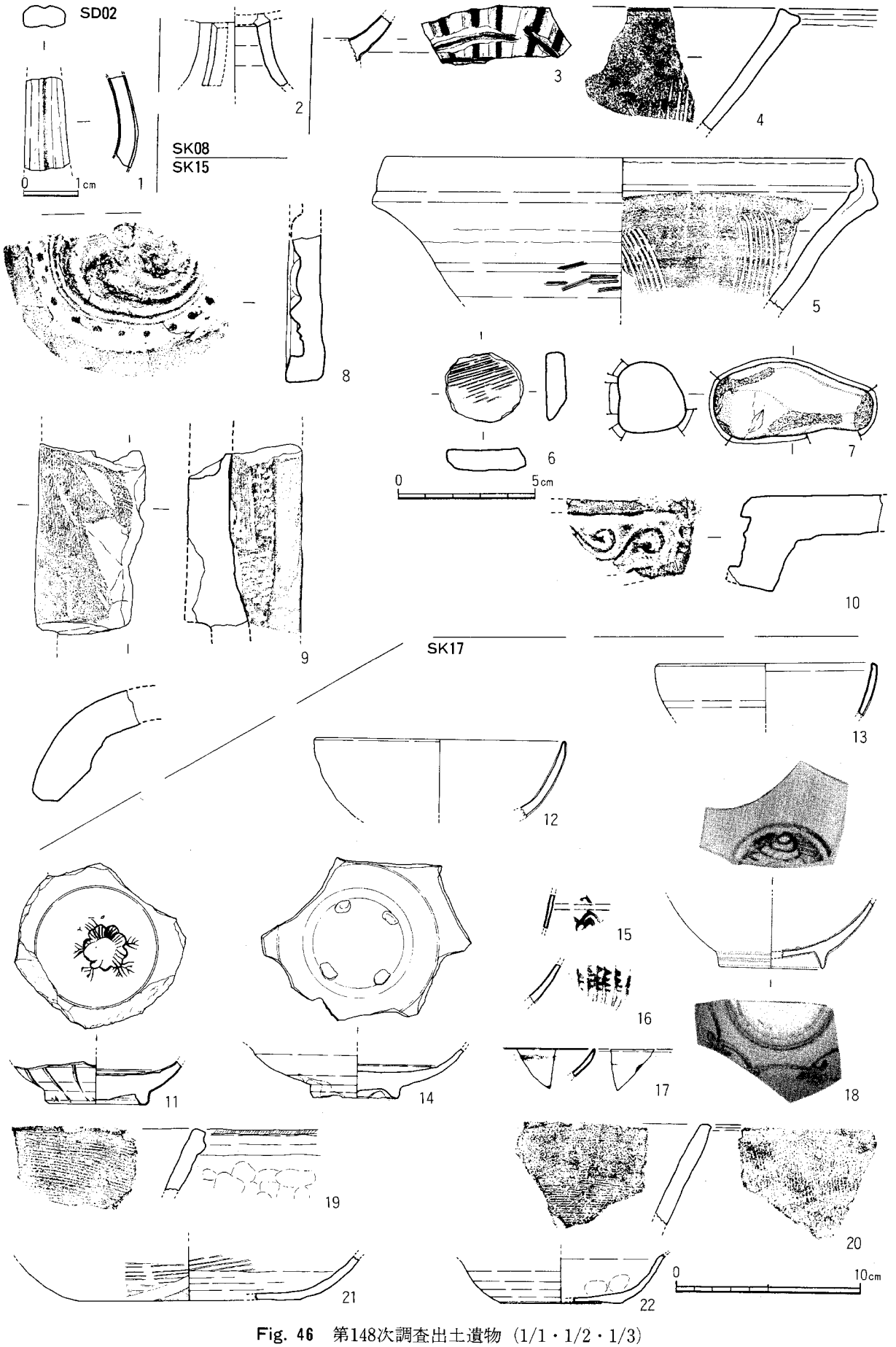


Fig. 46　第148次調査出土遺物（1/1・1/2・1/3）

図　　版

第147次調査区包含層出土水鳥形土製品

PL. 1　有田遺跡群周辺航空写真（1961年撮影）

PL. 2　有田遺跡群周辺航空写真（1972 年撮影）

(1)　第147次調査区東側全景（西から）

(2)　同東側全景（西から）

(1) 調査区東側谷部建物検出状況（西から）

(2) 調査区西側全景（北から）

(1) 調査区全景谷部完掘後（西から）

(2) 同（北から）

(1) SB01（西から）

(2) SB 02（東から）

(1) SB03（西から）

(2) SD01・02（南から）

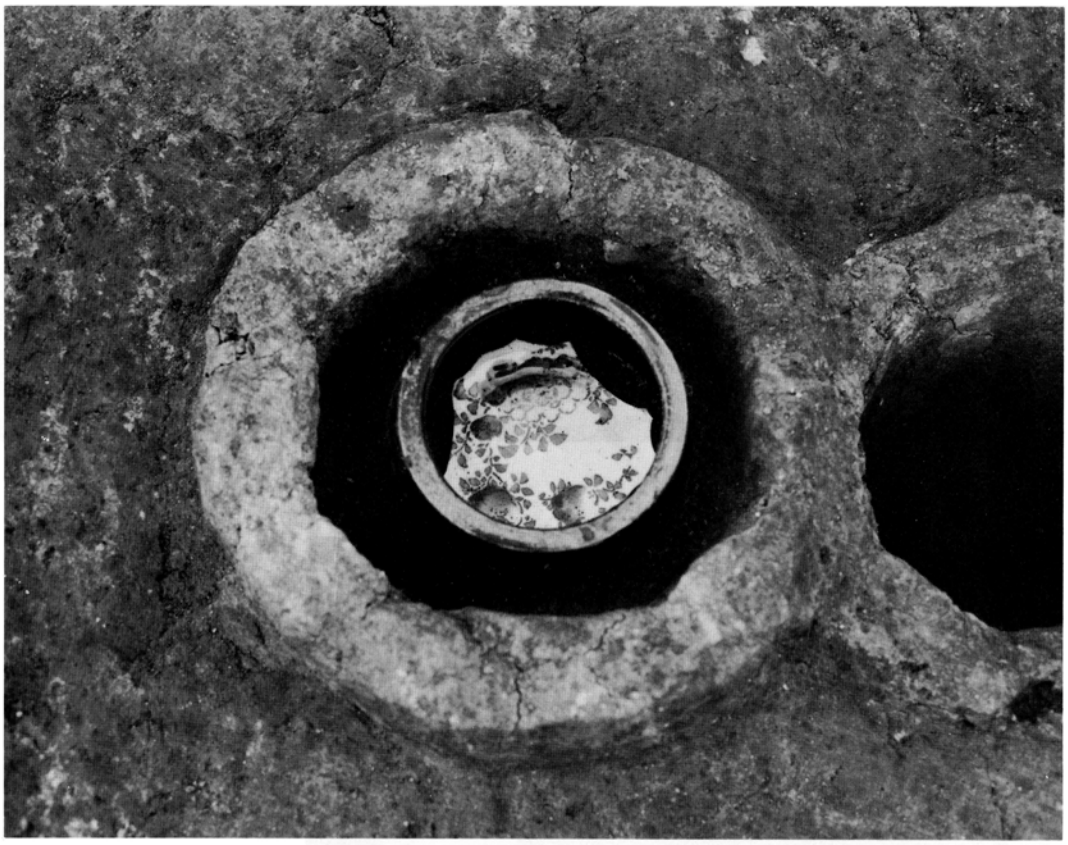
(1)

(2)

(3)

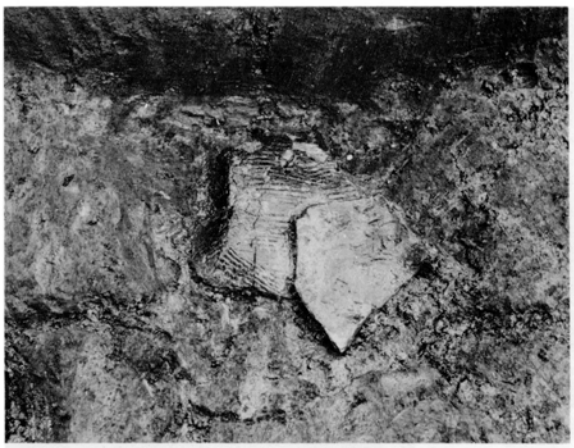
(5)

(1) SD16（西から）
(2) SK03（南から）
(3) SK04（西から）
(4) SK05（南から）

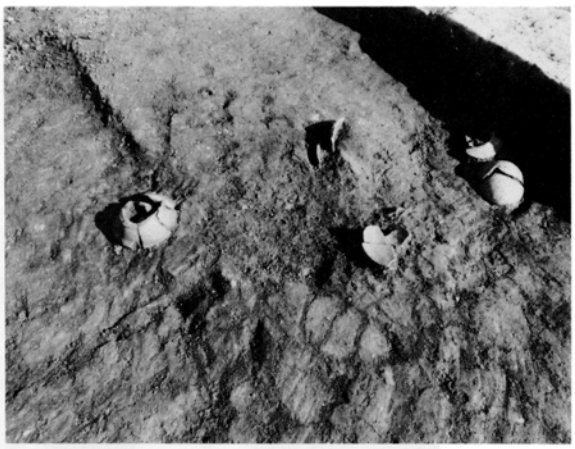


(1)　ＳＰ66（南から）

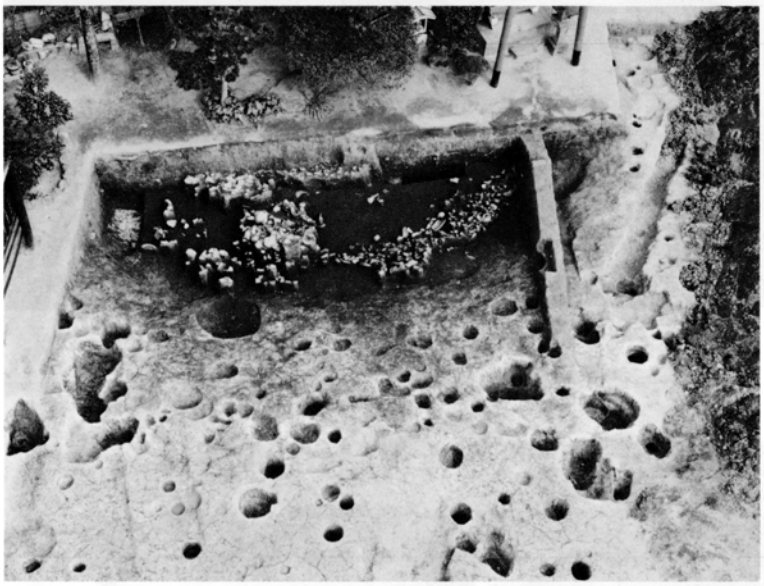
(2)　包含層上層住居址床面？（西から）



(1)　包含層上層遺物出土状況

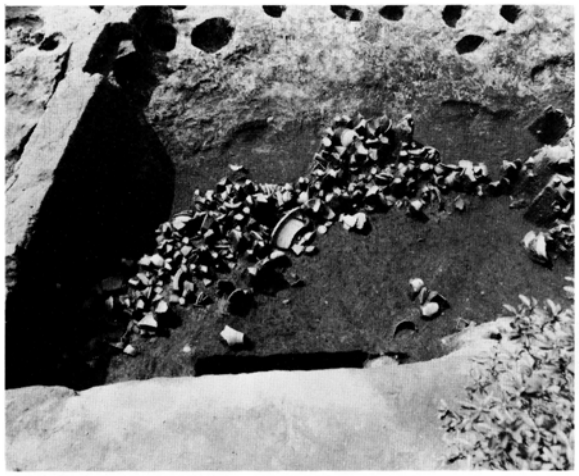


(2)　同出土状況



(3)　包含層下層遺物出土状況(西から)

(4)　同出土状況（北から）



(1)

(2)

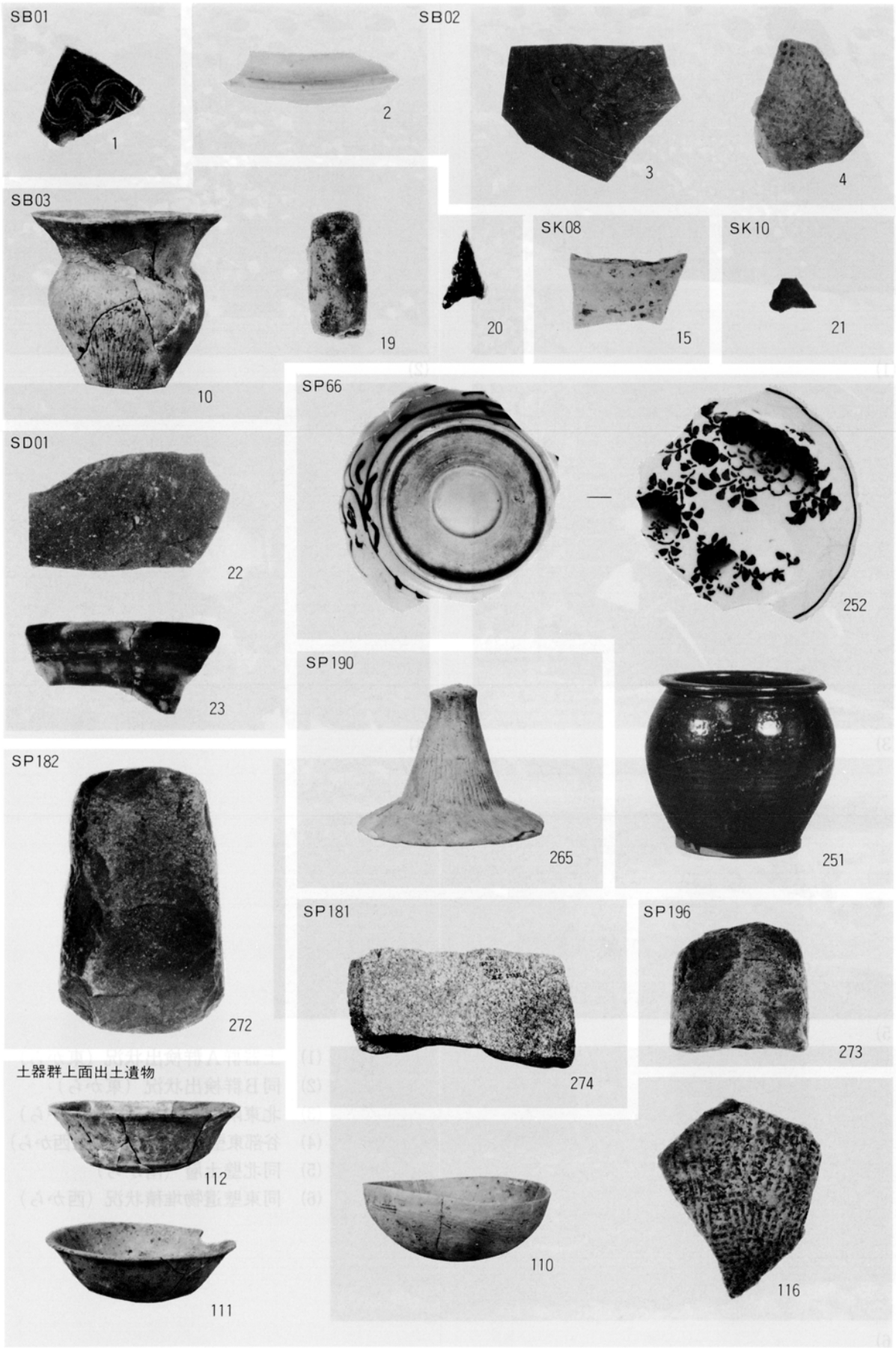
(3)

(4)

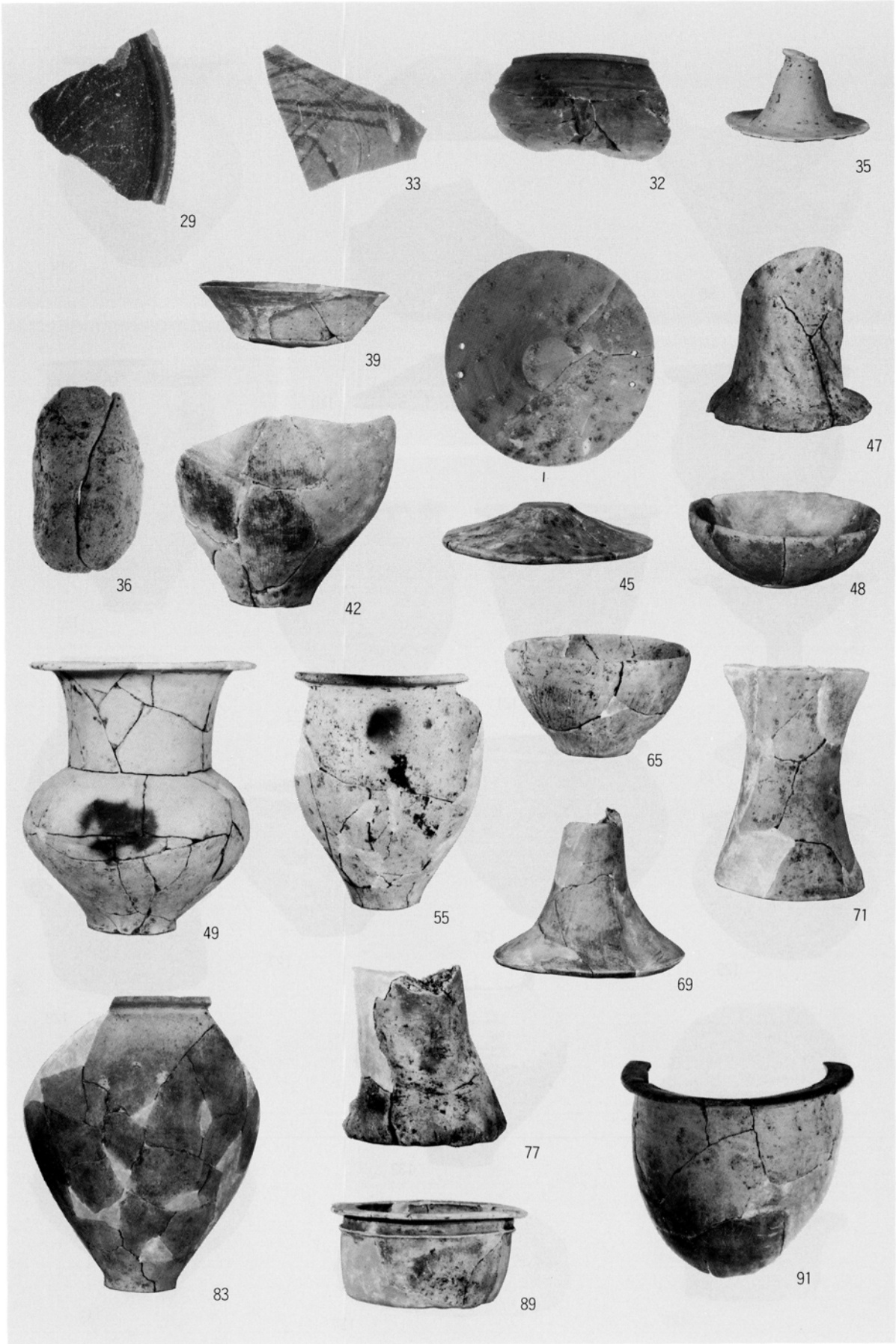
(5)

(6)

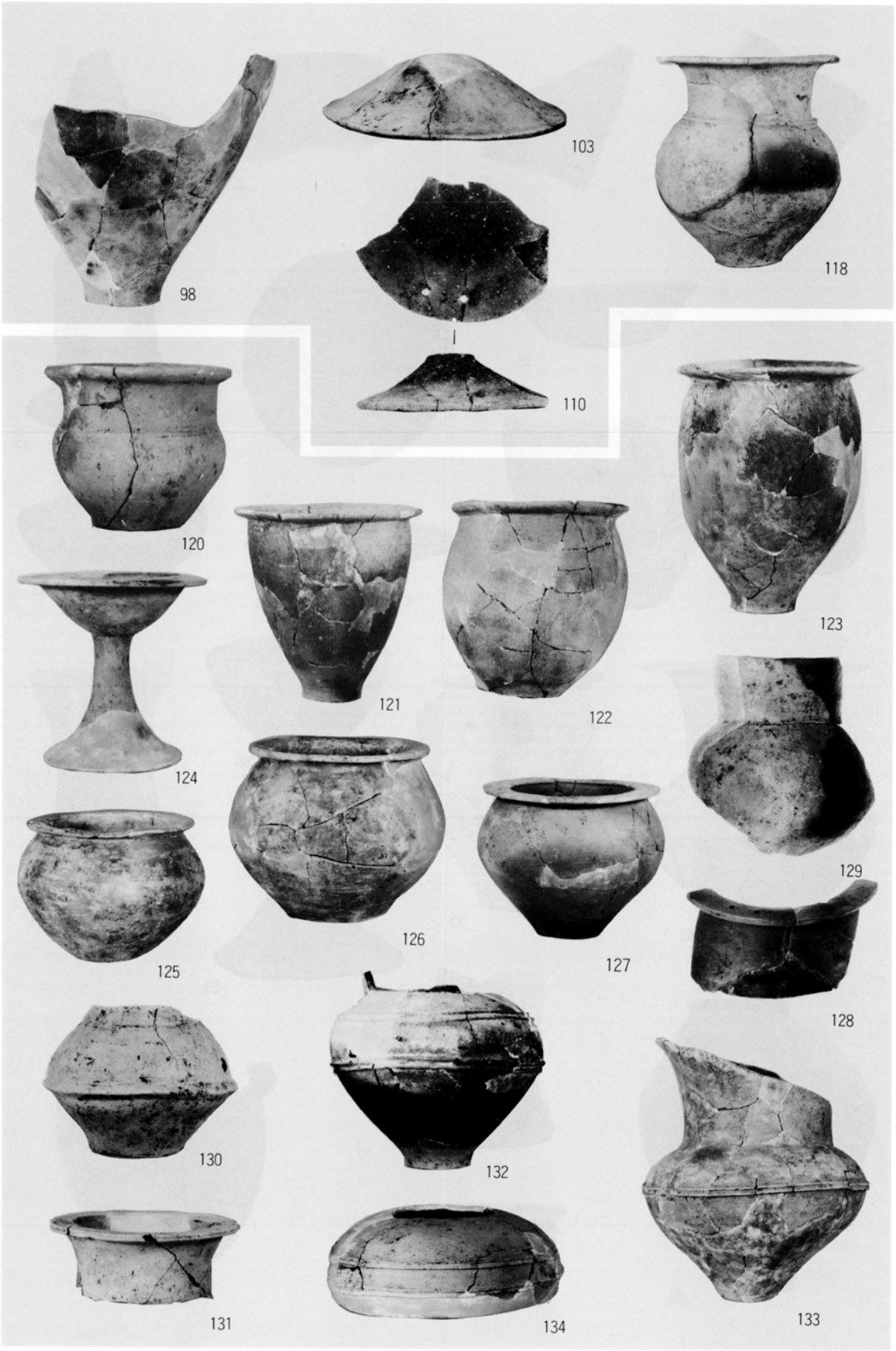
(1) 土器群A群検出状況（東から）
(2) 同B群検出状況（東から）
(3) 北東隅遺物検出状況（東から）
(4) 谷部東壁際遺物出土状況(西から)
(5) 同北壁土層（南から）
(6) 同東壁遺物堆積状況（西から）



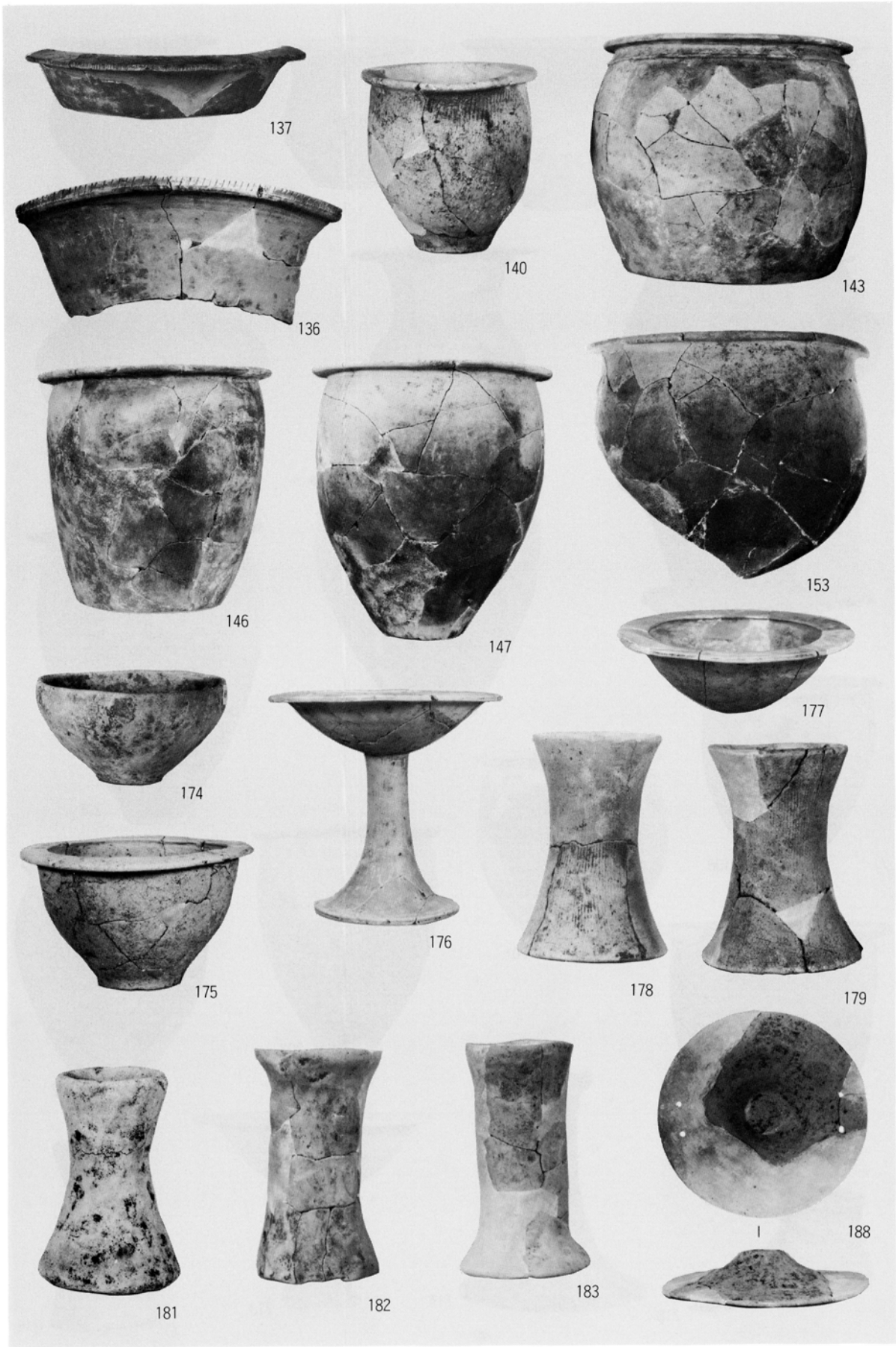
掘立柱建物・土坑・ピット・土器群上面出土遺物（縮尺不統一）



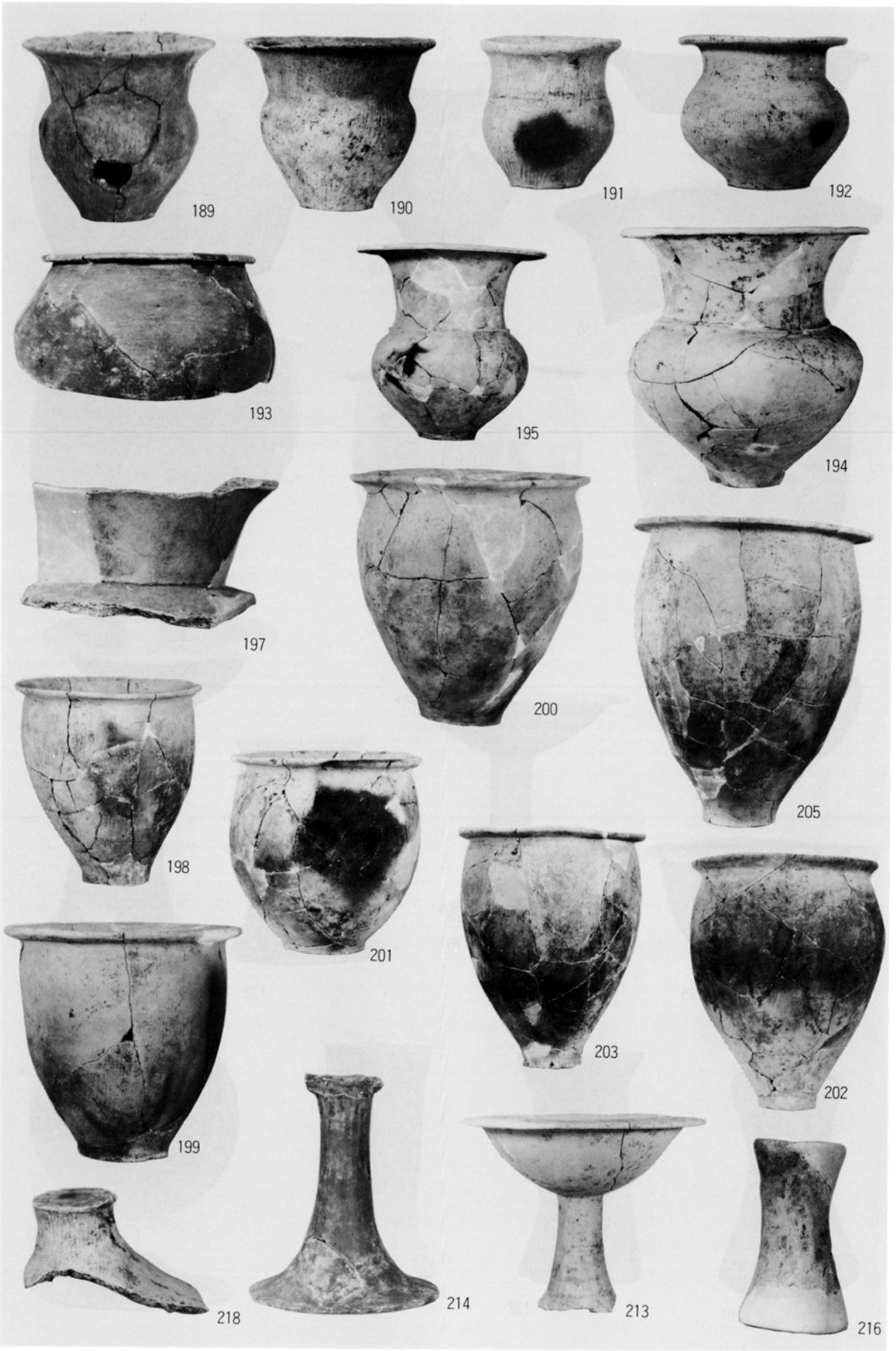
包含層出土遺物（縮尺不統一）



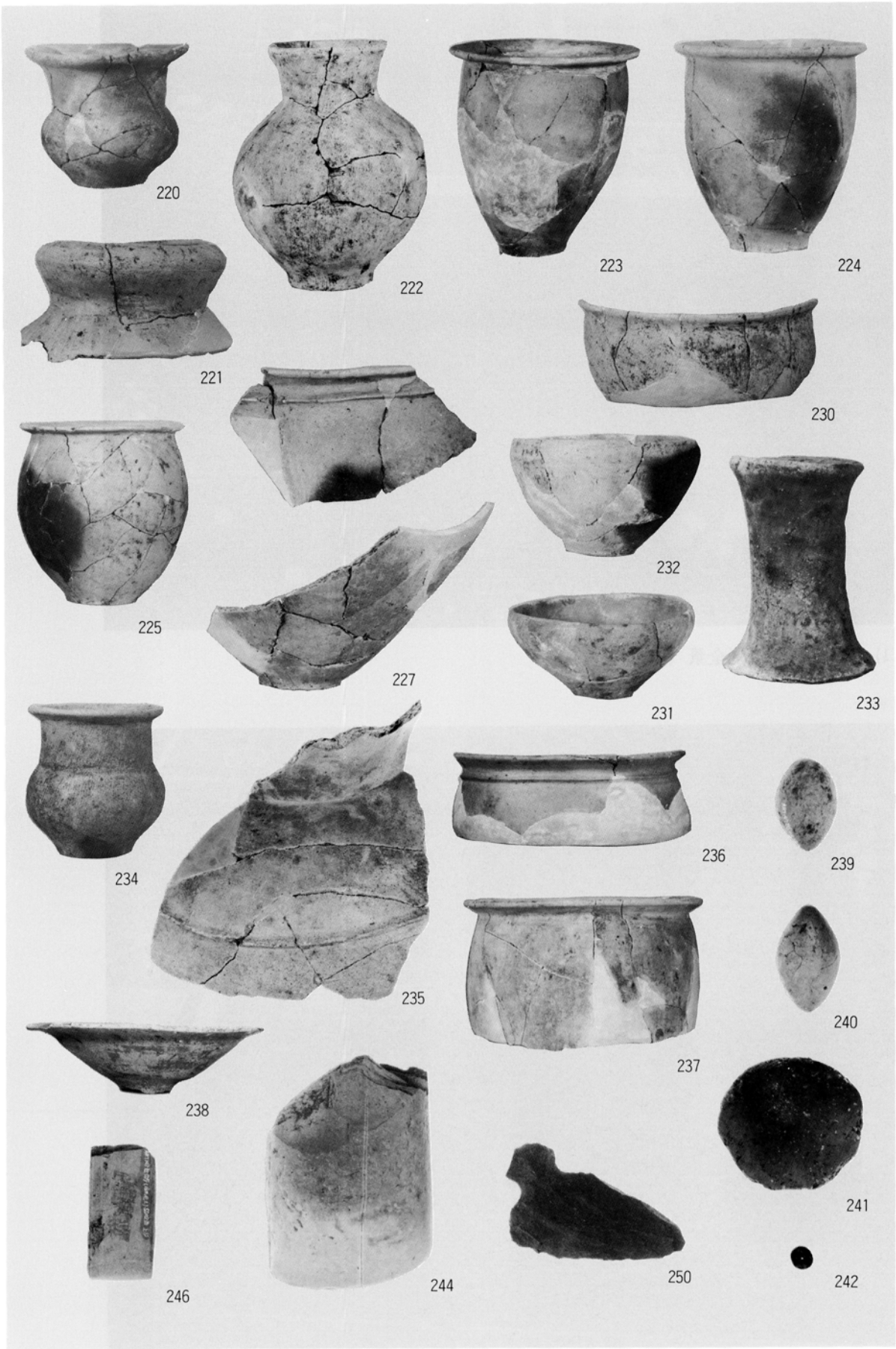
包含層・土器群A群出土遺物１（縮尺不統一）



土器群A群出土遺物2（縮尺不統一）



土器群B群出土遺物（縮尺不統一）



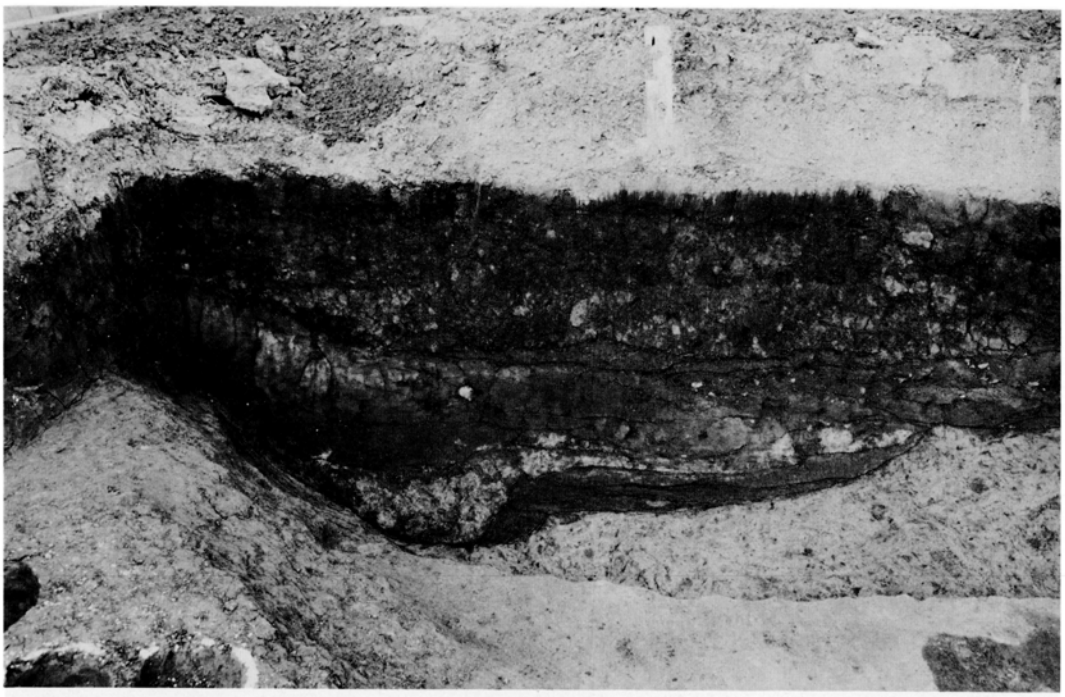
土器群C群・D群出土遺物と包含層出土石器・土製品（縮尺不統一）

(1)　第153次調査区全景（東から）

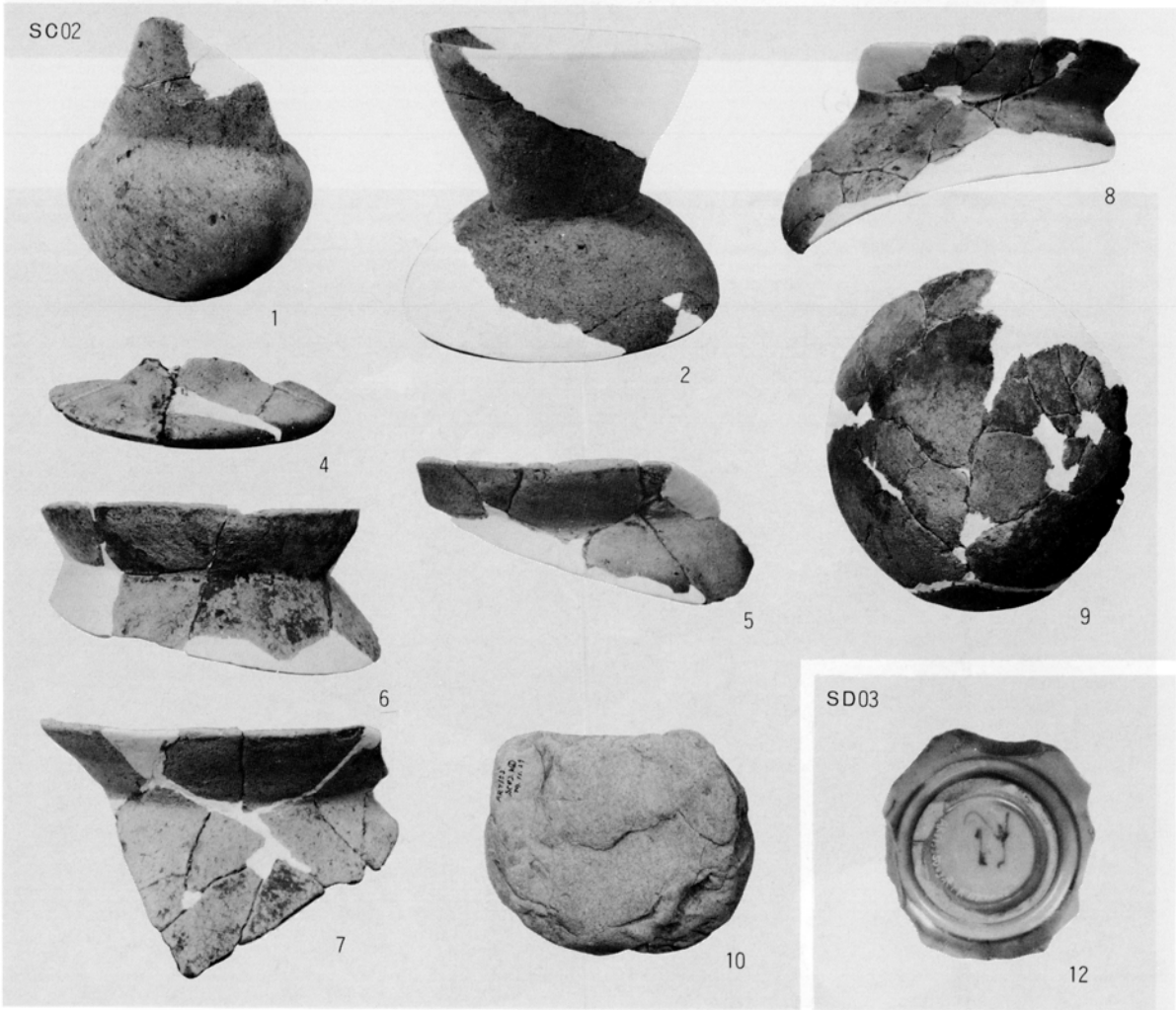
(2)　同全景（北から）

(1) SC02（南から）

(2) SC02遺物出土状況（北から）



(1) SD03北壁土層（南から）



(2) SC 02・SD 03・ピット出土遺物

有田・小田部 第21集
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第426集
1995年（平成７年）３月31日
発　行　福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神１丁目8の1
印　刷　寿印刷株式会社